静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第46集

ミカノセ遺跡

南　伊　豆　町

平成23～26年度山梨静岡交流圏域活性化事業
（河川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１５

静岡県埋蔵文化財センター

序

ミカノセ遺跡は、南伊豆町を流れる二級河川青野川の支流である鯉名川の左岸に立地する遺跡です。調査区から鯉名川の旧河川が検出され、河川の壁には護岸遺構が構築されていました。護岸遺構は横木と杭で構成される木組みの遺構で、この遺構を構築している木材には、柱、梁、桁、垂木などの建築材を転用したものが使用されていることが明らかになりました。護岸遺構は全国各地の遺跡で検出されていますが、構築材に建築材を転用したものを使用している類例は本遺跡以外には見られず、遺構の構築方法や地域の実情がおおいに注目されるところであります。

南伊豆町域では、弥生時代後期に日詰遺跡で集落が営まれ、古墳時代中期から後期にかけて日詰遺跡、日野遺跡で集落内祭祀が行われていたことが調査で明らかになっています。また、平安時代は日詰遺跡、日野遺跡、十二叟遺跡で製鉄が行われているなど、伊豆地域においても特徴的な様相を示しています。本遺跡ではこれらの遺跡と同時期の土器が多く出土していることから、これらの遺跡との関連にも注目される成果となりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県下田土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2015年１月

静岡県埋蔵文化財センター所長

赤　石　達　彦

例　言

1　本書は静岡県賀茂郡南伊豆町湊字埋田に所在するミカノセ遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は山梨静岡交流圏域活性化事業（河川）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県下田土木事務所の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　ミカノセ遺跡発掘調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

発掘調査　平成23年11月～平成24年３月　調査対象面積400㎡　実掘面積265㎡
　　平成24年11月～平成24年12月　調査対象面積222㎡　実掘面積 80㎡
資料整理　平成24年11月～平成25年３月
　　平成25年７月～平成26年３月
　　平成26年９月～平成27年１月

4　調査体制は以下のとおりである。

平成23年度（発掘調査）
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　村松弘文　　総務係長　瀧みやこ
主幹兼調査第一係長　富樫孝志　　調査第二係長　溝口彰啓　　主査　岩﨑しのぶ

平成24年度（発掘調査・資料整理）
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　前田雅人　　総務係長　瀧みやこ
主幹兼調査第一係長　富樫孝志　　調査第二係長　溝口彰啓　　主査　岩本　貴
常勤嘱託員　五味奈々子　大竹弘高

平成25年度（資料整理）
所長　勝田順也　　次長兼総務課長　南谷高久　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　前田雅人　　主幹兼総務係長　大坪淳子
主幹兼調査第一係長　及川　司　　調査第二係長　溝口彰啓　　主査　岩﨑しのぶ

平成26年度（資料整理）
所長　赤石達彦　　次長兼総務課長　長谷川明子　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　大坪淳子
主幹兼調査係長　及川　司　　主幹　溝口彰啓　　主査　岩﨑しのぶ

5　本書の執筆は岩﨑が行った。

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　木製品の樹種同定は東北大学と受託研究契約を締結し実施した。

8　発掘調査・資料整理にあたっての業務の外部委託先は以下のとおりである。
掘削業務委託　平成23年度　セリザワ建設株式会社　　平成24年度　長田建設工業株式会社
測量業務委託　株式会社パスコ

整理作業・保存処理業務委託　株式会社パソナ

9　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

黒坂貴裕　小林和貴　設楽博己　鈴木三男　西尾太加二　山田昌久（五十音順・敬称略）

10　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

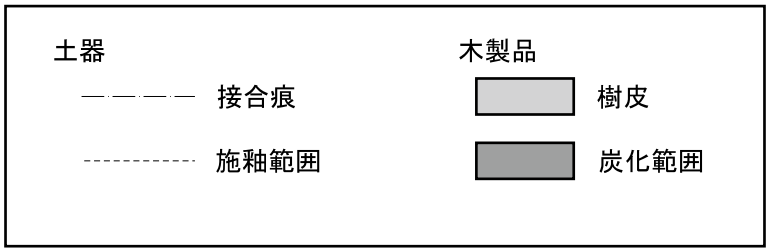
1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
（X＝－149860.0，Y＝35110.0）＝（1，A）

3　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれにスケールを付した。

4　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。

5　第1章第1節第2図のミカノセ遺跡位置図は国土地理院発行1：50,000地形図「神子元島」を、第2章第2節第4図のミカノセ遺跡周辺の遺跡は同1：25,000地形図「石廊崎」「神子元島」を複写し加工・加筆した。



目　　次

序・例言・凡例

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　ミカノセ遺跡の調査

第１節　調査の方法と経過 …… 8
第２節　基本土層 …… 11
第３節　遺構 …… 14
第４節　遺物 …… 21

第４章　ミカノセ遺跡のまとめ

第１節　遺跡の時期と周辺遺跡との関連について …… 65
第２節　護岸遺構ＳＸ01について …… 66

附編　自然科学分析の結果

附編１　静岡県ミカノセ遺跡出土木材の樹種 …… 71
附編２　静岡県ミカノセ遺跡護岸木組み遺構の放射性炭素年代 …… 77

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第１図　南伊豆町位置図 …… 1
第２図　ミカノセ遺跡位置図 …… 2
第３図　遺跡周辺表層地質概要図 …… 4
第４図　ミカノセ遺跡周辺の遺跡 …… 7
第５図　ミカノセ遺跡調査区配置図 …… 9
第６図　ミカノセ遺跡基本土層図 …… 12
第７図　ミカノセ遺跡土層断面図 …… 13
第８図　１区全体図 …… 15
第９図　１区護岸遺構ＳＸ01平面図 …… 16
第10図　１区護岸遺構ＳＸ01立断面図 …… 17
第11図　２区全体図 …… 19
第12図　２区杭列ＳＸ03 …… 20
第13図　出土遺物実測図１（土器１） …… 22
第14図　出土遺物実測図２（土器２） …… 23
第15図　出土遺物実測図３（土器３） …… 25
第16図　出土遺物実測図４（土器４） …… 26
第17図　出土遺物実測図５（土器５） …… 27
第18図　出土遺物実測図６（土器６） …… 28

第19図　出土遺物実測図７（土器７）…… 29
第20図　出土遺物実測図８（土器８）…… 30
第21図　出土遺物実測図９（土器９）…… 31
第22図　出土遺物実測図10（土器10）…… 33
第23図　出土遺物実測図11（土器11）…… 34
第24図　出土遺物実測図12（土器12・土製品）
…… 35
第25図　出土遺物実測図13（土器13）…… 37
第26図　出土遺物実測図14（土器14）…… 38
第27図　出土遺物実測図15（土器15・陶磁器）
…… 39
第28図　出土遺物実測図16（石器）…… 43
第29図　出土遺物実測図17（木製品１）…… 45
第30図　出土遺物実測図18（木製品２）…… 47
第31図　出土遺物実測図19（木製品３）…… 48
第32図　出土遺物実測図20（木製品４）…… 49
第33図　出土遺物実測図21（木製品５）…… 51
第34図　出土遺物実測図22（木製品６）…… 52
第35図　出土遺物実測図23（木製品７）…… 54
第36図　出土遺物実測図24（木製品８）…… 56
第37図　出土遺物実測図25（木製品９）…… 57
第38図　出土遺物実測図26（木製品10）…… 59
第39図　出土遺物実測図27（木製品11）…… 60
第40図　出土遺物実測図28（木製品12）…… 62
第41図　出土遺物実測図29（木製品13）…… 63
第42図　杭列の類例（１）…… 67
第43図　杭列の類例（２）…… 68
第44図　杭列の類例（３）…… 69

挿 表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 6
第２表　現地調査・資料整理工程表 …… 10
第３表　出土遺物計測表（土器）…… 40
第４表　出土遺物計測表（土器・土製品）…… 41
第５表　出土遺物計測表（土器・陶磁器）…… 42
第６表　出土遺物計測表（石器）…… 43
第７表　出土遺物計測表（木製品）…… 64

挿 写 真 目 次

写真１　土器接合作業 …… 10
写真２　土器実測作業 …… 10
写真３　遺構図版作成作業 …… 10
写真４　木製品保存処理作業 …… 10

写真図版目次

図版１　１区全景（南より）
２区全景（南より）
図版２　護岸遺構ＳＸ01全景（北東より）
護岸遺構ＳＸ01全景（南東より）
図版３　護岸遺構ＳＸ01全景（北西より）
杭列ＳＸ02検出状況（南東より）
図版４　杭列ＳＸ03検出状況（南より）
１区遺物出土状況（３）
１区遺物出土状況（25）
１区遺物出土状況（63・39）
１区遺物出土状況（40）
１区遺物出土状況（41）
１区遺物出土状況（42）
１区遺物出土状況（146）
図版５　出土遺物１（土器１）
図版６　出土遺物２（土器２）
図版７　出土遺物３（土器３）
図版８　出土遺物４（土器４）

図版９　出土遺物５（土器５）
図版10　出土遺物６（土器６）
図版11　出土遺物７（土器７）
図版12　出土遺物８（土器８）
図版13　出土遺物９（土器９）
図版14　出土遺物10（土器10・土製品）
図版15　出土遺物11（土器11）
図版16　出土遺物12（土器12・陶磁器・石器）
図版17　出土遺物13（木製品１）
図版18　出土遺物14（木製品２）
図版19　出土遺物15（木製品３）
図版20　出土遺物16（木製品４）
図版21　出土遺物17（木製品５）
図版22　出土遺物18（木製品６）
図版23　出土遺物19（木製品７）
図版24　出土遺物20（木製品８）
図版25　出土遺物21（木製品９）
図版26　出土遺物22（木製品10）
図版27　出土遺物23（木製品11）
図版28　出土遺物24（木製品12）

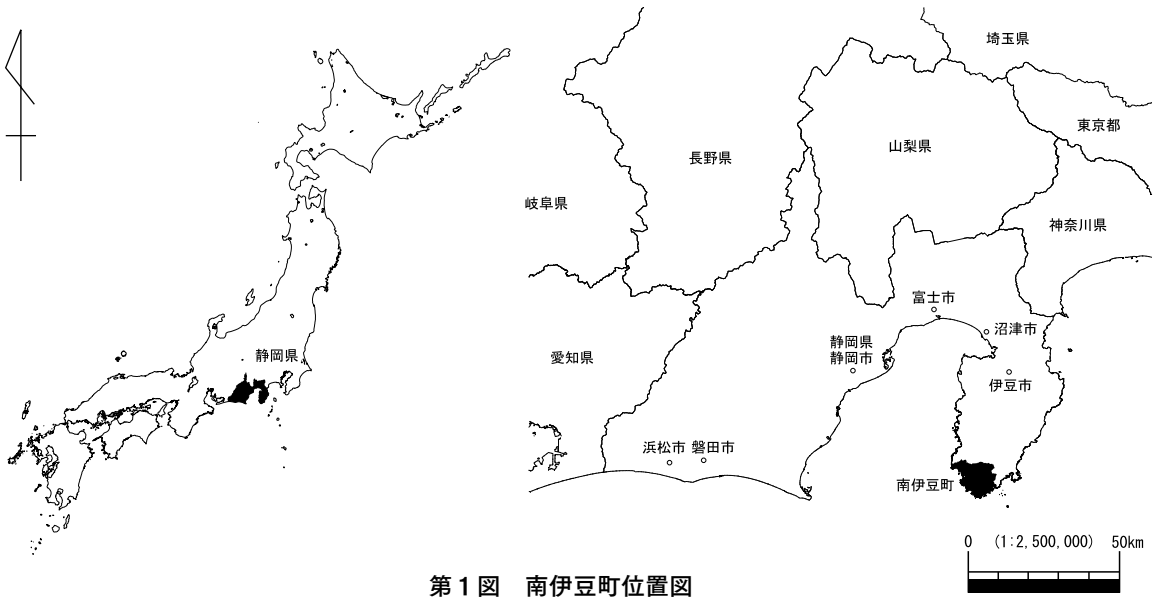
第１章　調査に至る経緯

南伊豆町は日本のほぼ中央部に位置する静岡県の東部、伊豆半島の最南端に位置する（第１図)。南伊豆町の面積の大半は山林・原野で占められており、山林の間を流れる河川の両岸に平地がわずかに存在している。これらの河川は総じて川幅が狭く、流域住民の安全のため、増水時に対応できる川幅を確保する必要が生じていた。

静岡県下田土木事務所（以下下田土木）は、山梨静岡交流圏域活性化事業の一環として、二級河川青野川の支流である同鯉名川の河川改良工事を計画した。平成19年、下田土木は静岡県教育委員会文化課（平成22年度に文化財保護課に課名変更）の事業照会に対して、この事業を計画していると回答した。文化課は工事計画範囲における周知の埋蔵文化財包蔵地の存在の有無を調べた結果、工事計画範囲内にミカノセ遺跡が含まれていることが明らかとなり、下田土木に文化課との調整が必要であることを回答した。

文化課と下田土木は工事箇所が低湿地であることから、調査は渇水期に実施することで調整した。平成20年３月、文化課は埋蔵文化財包蔵地の隣接地において試掘・確認調査（１次）を実施した。この結果、旧河川跡が検出され、土器片が出土した。工事によって遺跡が破壊されることから、文化課は記録保存を目的とした本発掘調査が必要であると判断し、下田土木にこの旨を報告した。平成21年１月、用地内の構築物の撤去等によって新たに掘削が可能となった地点において確認調査（２次）を実施した。この結果、河川の左岸に設定した試掘坑から旧河川跡が検出され、多量の土器片が出土した。文化課はこれらの結果を踏まえて本発掘調査の範囲を決定した。また､同時に遺跡包蔵地の範囲変更を実施した。

本発掘調査は文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（平成23年３月解散　以下埋文研）が実施する運びとなった。平成23年８月、下田土木は埋文研の業務を受け継いだ静岡県埋蔵文化財センター（以下センター）に埋蔵文化財発掘調査を依頼した。これと並行して、文化財保護課は平成23年10月、遺跡包蔵地の北側の試掘・確認調査（３次）を実施した。この結果、遺構及び遺物が確認されなかったことから本発掘調査の範囲が確定した。センターは平成23年12月から平成24年２月まで本発掘調査範囲の南半部（１区)、平成24年11月から12月まで本発掘調査範囲の北半部（２区）の調査を実施した。



第１図　南伊豆町位置図

第２図　ミカノセ遺跡位置図

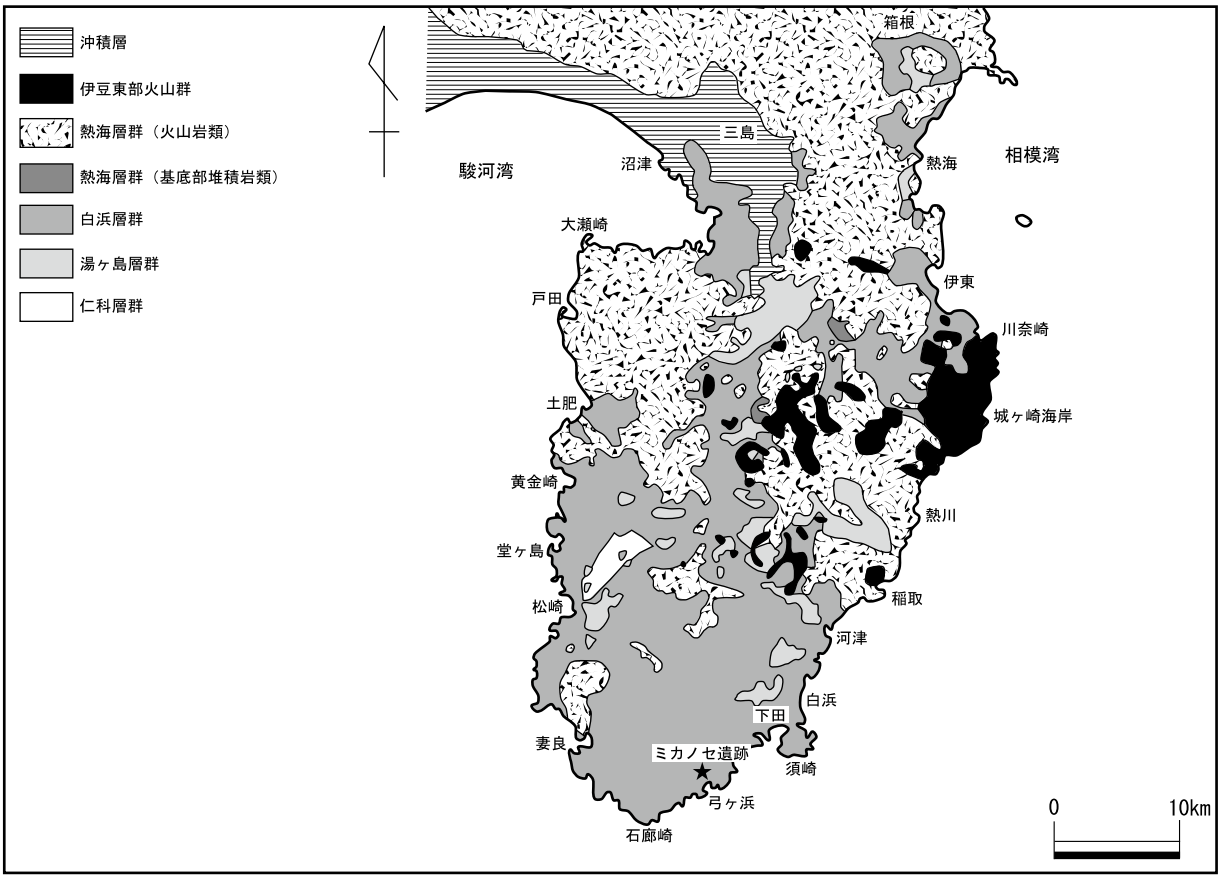
第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

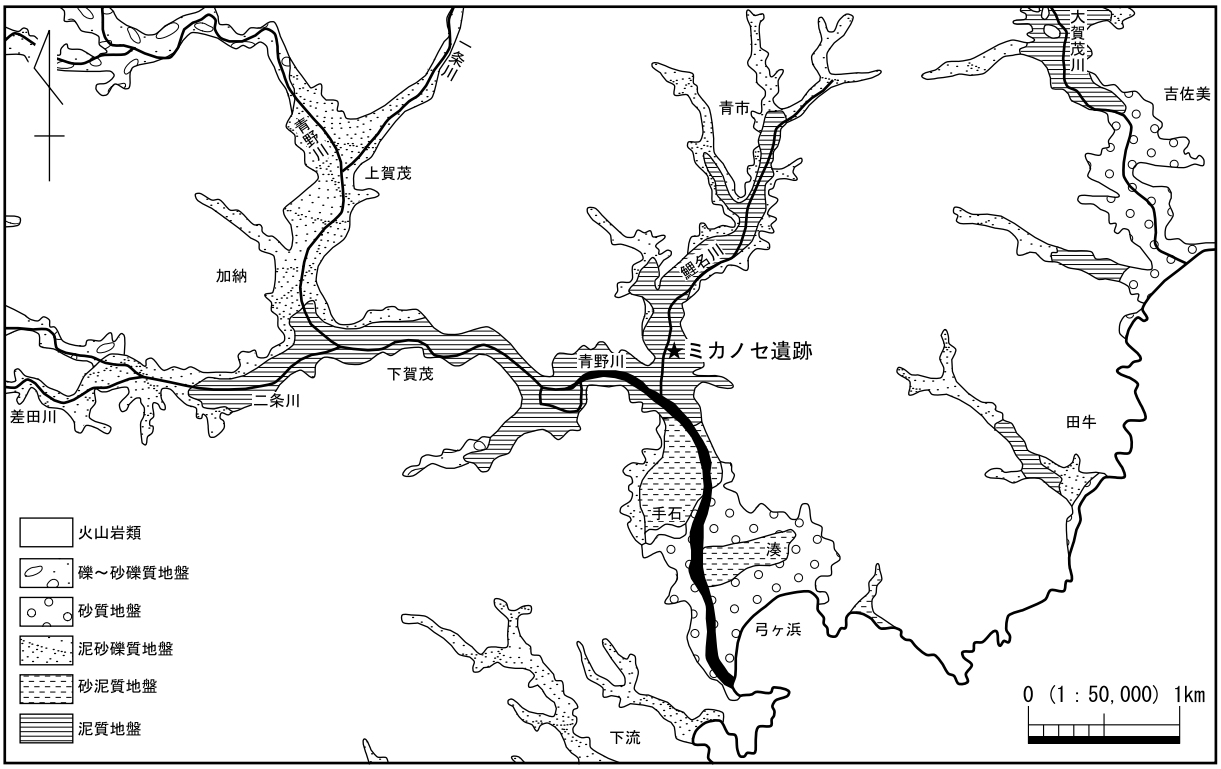
ミカノセ遺跡は静岡県賀茂郡南伊豆町湊字埋田、伊豆急下田駅から南西に約6.5km離れた地点に位置し、標高は現地表面で約３～５ｍである。二級河川鯉名川の左岸に接し、約300m下流に青野川との合流地点がある（第２図）。

ミカノセ遺跡が立地する伊豆半島は、4000万年以上の長い時間に及ぶ海底と陸上の火山噴火で造り出されている。このうち約2000万年分の地層が現在の地表に見えており、残りは地下に埋もれている。約2000万年前から1000万年前の伊豆は、本州から南に数百キロメートル隔たった海底火山群であった。これらの海底火山から噴出した溶岩や火山礫、火山灰などが当時の海底に堆積してできた地層は、古い順に仁科層群、湯ヶ島層群と呼ばれている。岩相は玄武岩質から安山岩質の溶岩や火砕堆積岩を主とし、より酸性の火山岩、火山性堆積岩、石灰岩等を少量含む。その後約1000万年から200万年前、伊豆全体が浅い海となったため、海面上にその姿を現し、火山島になった火山もあった。この時期に噴出した溶岩や火山礫、火山灰層で成り立つ地層は白浜層群と呼ばれている。岩相は中性～酸性火砕岩類が多く、白色凝灰岩が特徴的であり、少量の玄武岩類、砂岩、石灰岩等が含まれる。湯ヶ島層群より酸性物質を多く含み、またより細かい堆積単位を示す傾向がある。約200万年前から100万年前は海底火山がフィリピン海プレートの移動に伴って本州と衝突して合体しようとしていた時期である。この時初めて伊豆の大部分が陸地となり、以後はすべての火山が陸上で墳火するようになった。この時期の堆積物は熱海層群と呼ばれている。60万年前までに伊豆は本州から突き出た半島の形になり、現在見られる伊豆半島の原形ができあがった。陸地となった伊豆半島のあちこちで噴火が起き、天城山や達磨山などの大型の成層火山ができた。20万年前までに伊豆半島はほぼ現在の姿となり、このころになると北方の箱根火山を除くすべての火山は噴火を停止した。15万年前以降は火山活動の性質が大きく変わり、大室山、カワゴ平に代表される伊豆東部火山群が噴火を始めた。伊豆東部火山群は国内では事例の少ない独立単成火山群であり、現在でも時おりマグマ活動を続けている。陸化して間もないという事情から伊豆の台地はまだ激しい浸食の途上にあり、地形が山がちなうえに多くの海岸線も急な崖となっている。大河と呼べる川がまだできていないために広い平野も存在しない。

現在の南伊豆地域は白浜層群の急峻な山が海岸線まで迫り、山地に挟まれた谷間をぬって小河川が流れている。青野川は、南伊豆町北西山間部から流れ出て、東南に流下し、相模灘に注いでいる。中流域にあたる上賀茂で一条川、下賀茂で二条川が合流、さらに下流の湊で鯉名川がこれに合流し、それら合流地付近及び河口に小さな沖積地を造り出している。ミカノセ遺跡は鯉名川の両岸に堆積した泥質地盤上に立地している（第３図）。



伊豆半島の概略地質図
（伊豆ジオパーク連絡協議会 2012『南から来た火山からの贈りもの　伊豆ジオパーク構想
日本ジオパークネットワーク加盟申請書』より転載・加筆）



表層地質図（静岡県総務部防災局 2002『地域の地盤と地震被害（伊豆南部地域）』より転載・加筆）

第３図　遺跡周辺表層地質概要図

第２節　歴史的環境

１　日詰遺跡と日野遺跡

ミカノセ遺跡周辺の遺跡分布図を第４図に示した。

南伊豆地域においては、発掘調査の事例はあまり多くなく、第１表に記載されている遺跡より出土している遺物の大半は表採によるものである。発掘調査によってその性格が明らかにされている主な遺跡として、日詰遺跡（５）と日野遺跡（10）があげられる。

日詰遺跡は青野川と二条川の合流地点付近の沖積地に立地している。弥生時代中期後半に集落の形成が開始され、後期前半にその盛期を迎え、後期後半まで継続している。竪穴住居跡と方形周溝墓が複雑に切りあい、環濠も掘りこまれている。古墳時代前期に一時中断し、中期前半から後期前半にかけて再び集落として利用される。集落は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、祭祀遺構で構成されている。歴史時代の遺構の中心となるのは、折戸53号窯式及びそれ以降の灰釉陶器群に併行する時期のものである。溝と柵によって区切られた区画の中に、鍛冶炉及び鍛冶関連遺構と掘立柱建物跡が配置された状態で検出されている。また、遺跡包蔵地北部に位置するＯ地点では、製鉄炉と小鍛冶遺構、鉄滓などの廃棄ピットなどで構成される製鉄遺跡群が検出されている。

日野遺跡は青野川と鯉名川の合流地点付近に形成されている沖積地東側の微高地に立地している。ミカノセ遺跡から東に約200m離れている。古墳時代前期は水田として利用されていた。２条の畦畔が検出され、作り替えての使用が認められた。古墳時代中期から後期にかけては祭祀活動が行われていた。５世紀後半は石製模造品や玉類を含み、大量の土器を廃棄した祭祀、６世紀前半は土製模造品を含み、手づくね土器を主体とした祭祀、７世紀前半代は配石を設け、その内部と周囲に土師器や須恵器を納めた祭祀へとの変化が見られる。平安時代は南伊豆地域では最も大規模で、９世紀の半ばから12世紀初頭頃まで操業されていた製鉄施設であった。製鉄遺構は６基の製鉄炉、廃滓場と製鉄関連遺構の炉跡、井戸跡で構成されている。その炉のうち４基が製錬炉に、１基が大鍛冶炉に、１基が小鍛冶炉に考えられている。その製錬炉は円筒自立炉であり、当時の東日本で盛んに用いられた竪形炉と西日本の箱形炉の中間形態にある炉である。遺物は奈良三彩の小壺蓋が出土していることが特記される。この他、平城京をはじめとする畿内産の土師器や緑釉陶器が出土していることから、当時の南伊豆地域が畿内と東国を直接結ぶ中継地としての役割を担っていたことが窺える。

２　縄文時代

ミカノセ遺跡周辺での遺跡の初現は縄文時代中期にさかのぼる。縄文時代の遺跡は丘陵上あるいは山麓台地上に立地している。住居跡等の遺構は発見されておらず、その詳細については不明である。谷戸口遺跡（１）、荒巻遺跡（８）で石鏃、加畑遺跡（６）で中期の加曽利Ｅ１式の土器片が出土している。杉田遺跡（２）でも中期の土器片が出土している。また、古墳時代まで継続する大日山遺跡（11）でも土器片が出土している。

３　弥生時代

大日山遺跡（11）では弥生時代中期前葉の丸子式土器が出土している（小野・大島1961）。また、加畑遺跡（６）で中期の土器と扁平片刃石斧が出土している。中期後半になると先述した日詰遺跡のように、沖積地及び丘陵斜面地にも遺跡が出現してくる。後期に入ると遺跡数は増加し、加畑遺跡で土器片が出土している他、下条遺跡（13）、田圃条遺跡（16）が出現する。下条遺跡では土器片、敲石、凹石が、

田圃条遺跡では土器片、土錘が出土している。

４　古墳時代

下条遺跡（13）では６世紀の土師器や須恵器に伴って、土製模造品や手づくね土器などの祭祀遺物が出土している。この時期の南伊豆地域は祭祀遺跡が集中して存在している。これらの遺跡は日詰遺跡、日野遺跡、下条遺跡のように集落内で行われた祭祀遺跡と、集落から離れた特殊な場所に立地する遺跡に大別できる。後者の遺跡は第４図には掲載していないが、南伊豆町湊のタライ岬遺跡、下田市田牛の遠国島遺跡、同須崎の夷子島遺跡、同白浜の三穂ヶ崎遺跡、同火達山白浜神社遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも岬の先端、小島上、海浜等の特殊な場所に立地しており、全国的に見ても類例の少ない特色を有している。この他、荒巻遺跡（８）で土師器が、加納遺跡（４）で後期の須恵器が、田圃条遺跡（16）で後期の土師器と須恵器片が出土している。

５　奈良～平安時代

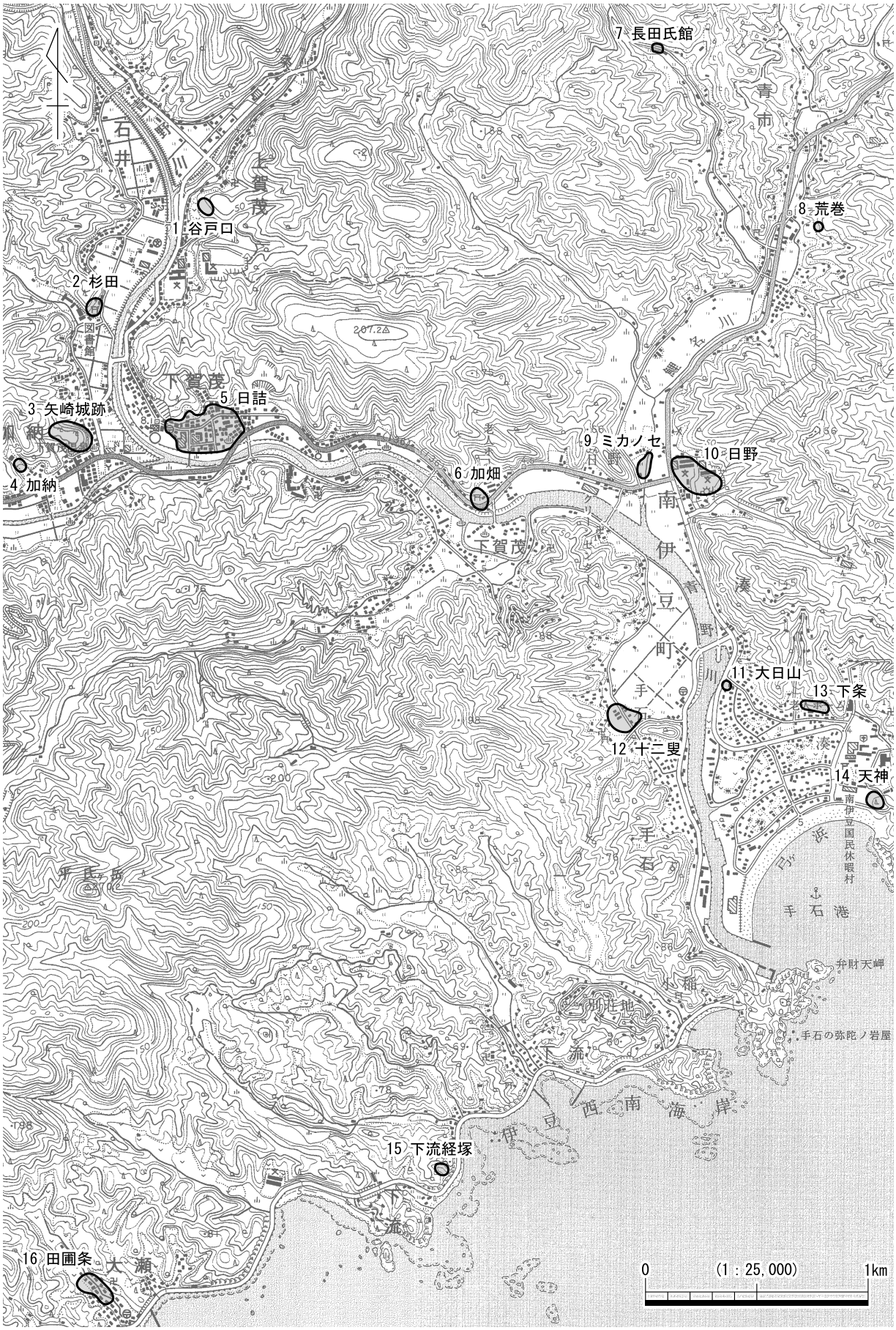
日詰遺跡の祭祀活動は７世紀前半で終息し、遺跡は一時中断する。日野遺跡でも７世紀前半で祭祀活動は終息するが、これ以降の土師器・須恵器が継続して出土している。この地域は平安時代の古代製鉄関係の遺跡が多く存在している。日詰遺跡、日野遺跡の他、十二叟遺跡（12）では楕円形炉が検出され、鉄鏃、鉄滓、鞴羽口が出土している。また、下条遺跡（13）でも鉄滓と鞴羽口が出土している。第４図に掲載していないこの他の製鉄遺跡は、下田市田牛の金草原遺跡、同大賀茂の金山遺跡などの存在が知られている。一方で集落跡、寺院跡、古窯跡等についてはいまだその実態は不明な点である。天神遺跡（14）では土師器片が出土している。

６　中近世

長田氏館（７）は建久三年（1192）（一説には治承四年（1180））長田忠致（荘司）が誅せられ、その三男、長田三郎が高祖父、平致房（賀茂二郎）の縁故により居を構えたという。矢崎城跡（３）は加納城とも呼ばれ、築造者、築造年代ともに不詳であるが、一節には天正十六年（1588）、下田城主に任ぜられた清水上野介に代表される小田原北条氏の伊豆衆21家の一人である清水氏一族の城と伝えられている。近世の遺跡は下流経塚（15）の存在が伝承されている。

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	文化財の年代								備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	
1	谷戸口遺跡	南伊豆町上賀茂		○							
2	杉田遺跡	南伊豆町加納		○							
3	矢崎城跡	南伊豆町加納							○		
4	加納遺跡	南伊豆町加納				○					
5	日詰遺跡	南伊豆町下賀茂			○	○	○	○	○		
6	加畑遺跡	南伊豆町下賀茂		○	○						
7	長田氏館	南伊豆町青市							○		
8	荒巻遺跡	南伊豆町青市		○		○					
9	ミカノセ遺跡	南伊豆町湊		○	○	○	○	○	○		
10	日野遺跡	南伊豆町湊		○	○	○	○	○			
11	大日山遺跡	南伊豆町湊		○	○	○					
12	十二叟遺跡	南伊豆町手石						○	○		
13	下条遺跡	南伊豆町湊			○	○	○	○	○		
14	天神遺跡	南伊豆町湊					○	○			
15	下流経塚	南伊豆町下流								○	
16	田圃条遺跡	南伊豆町大瀬			○	○					



第４図　ミカノセ遺跡周辺の遺跡

第３章　ミカノセ遺跡の調査

第１節　調査の方法と経過

本発掘調査範囲の南側を１区､北側を２区とし､国土座標を基準に10m単位のグリッドを設定した（第５図)。１区の発掘調査は平成23年度、２区の発掘調査は平成24年度に実施した。

１　１区

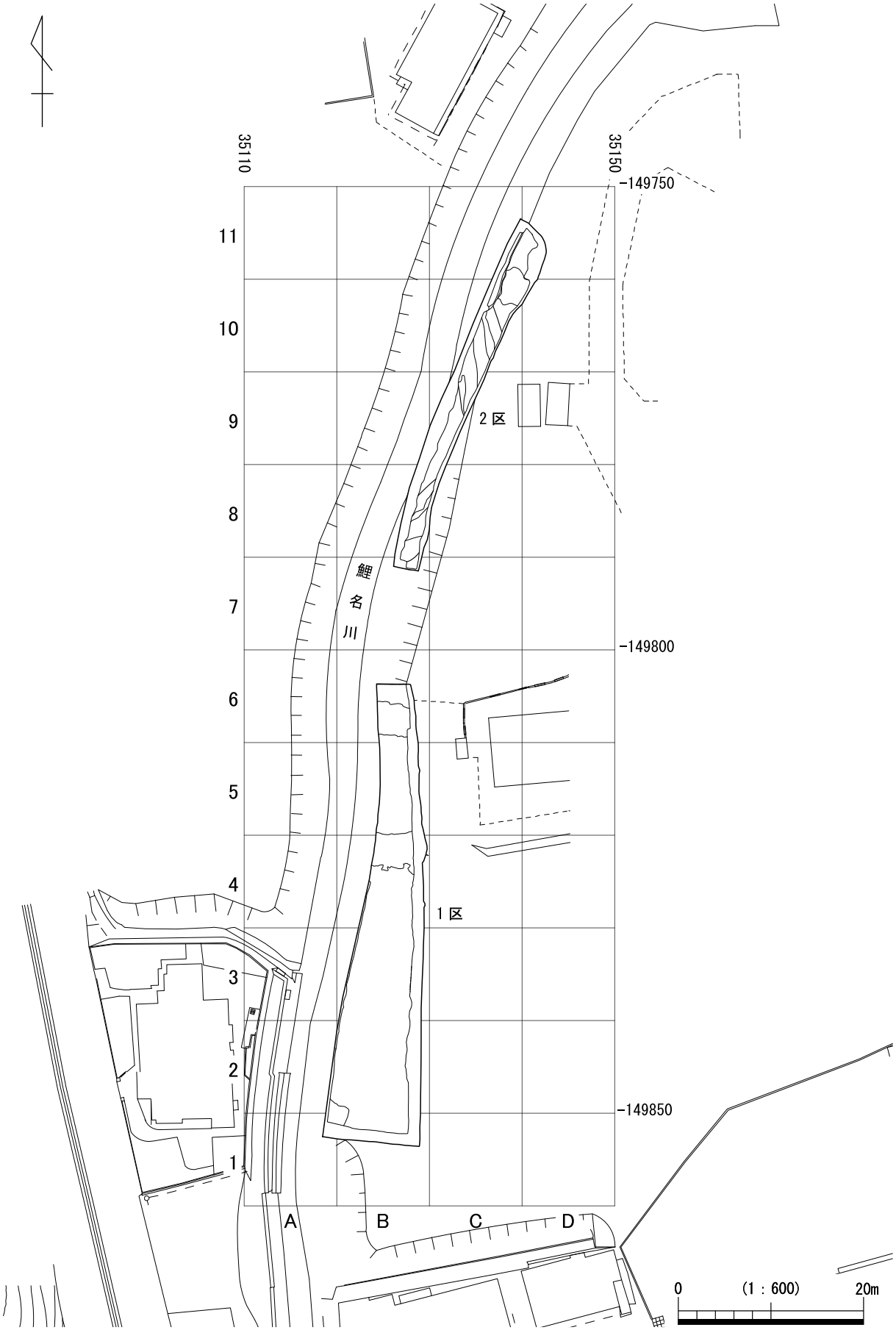
下田土木による表土除去と調査区西壁の鋼矢板打設の後、平成23年12月15日からバックホーによる中間層除去を開始した。中間層除去は調査区南西隅に集水枡を設置し、排水ポンプを設置して排水処理を行いながら進めた。中間層除去終了後、包含層の掘削を人力によって行った。掘削作業は調査区周囲の排水溝掘削と同時並行して行った。掘削の途中で護岸遺構ＳＸ01が確認されたため、遺構確認面で包含層掘削を一時中断し、ＳＸ01の検出を行った。ＳＸ01と調査区東壁・南壁の土層断面は写真測量により記録図面を作成した。杭列ＳＸ02及び包含層から出土した土器の一部はトータルステーションで出土位置の座標値を記録した。記録写真は６×７モノクロフィルム及び６×７カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。ＳＸ01を構成する木製品を取り上げた後、包含層掘削を再開した。掘削終了後、平成24年２月22日にラジコンヘリコプターによる調査区全景の写真撮影及び測量を実施して、２月24日に現地調査を完了した。

２　２区

１区と同様、下田土木による表土除去と調査区西壁の鋼矢板打設の後、平成24年11月８日からバックホーによる中間層除去を開始した。中間層除去は排水ポンプを設置して排水処理を行いながら進めた。中間層除去終了後、包含層の掘削を人力によって行った。掘削作業は調査区周囲の排水溝掘削と同時並行で行った。遺構確認面で流路を検出し、これを掘削した。途中で杭列ＳＸ03の検出を行い、手実測で記録図面を作成した。調査区東壁の土層断面は写真測量により記録図面を作成した。記録写真は６×７モノクロフィルム及び６×７カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。掘削終了後、12月10日にラジコンヘリコプターによる調査区全景の写真撮影及び測量を実施して､12月18日に現地調査を完了した。

３　資料整理

遺物洗浄、記録類の整理と注記の一部は本発掘調査期間中に基礎整理作業として掘削委託業者が実施した。資料整理は平成24年11月より木製品の実測を先行して行い､平成25年７月より本格的に着手した。出土した土器は注記・分類・仕分け・接合・復原・実測を経て、縄文土器・弥生土器・土師器についてはトレース作業を行い、トレースした図面をコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS3によって版組作業を実施した。須恵器・灰釉陶器・陶磁器については実測図をコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS3によってトレース・版組作業を実施した。石器は注記・分類・実測を経て、実測図をコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS3によってトレース・版組作業を実施した。木製品は分類・実測を経て、実測図をコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS3によってトレース・版組作業を実施した。木製品の樹種同定は東北大学との受託研究契約を締結し実施した。また、東北大学の御協力をいただき、木製品の年代測定を実施した。木製品はこれらの整理作業を経て、保存処理を実施した。遺構図版は記録図面及び写真測量のデータをコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS3によって

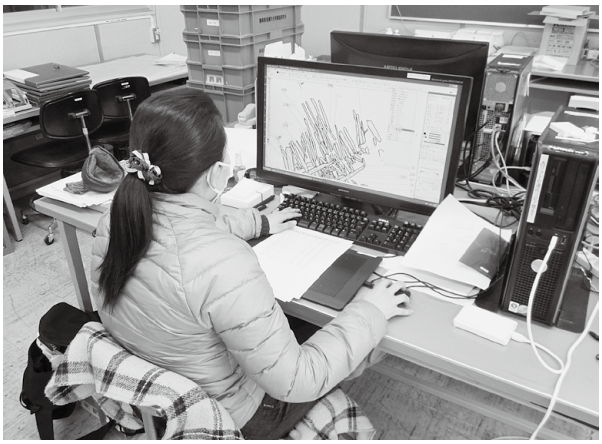


第５図　ミカノセ遺跡調査区配置図

編集して作成した。それと並行して遺物写真撮影及び写真図版作成を実施した。遺物写真は６×７モノクロフィルムと６×７カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。遺物と記録類の版組終了後に編集作業を行っている。また、報告書の作成とともに、収納作業も実施している。

土器接合作業

土器実測作業



遺構図版作成作業

木製品保存処理作業

第２表　現地調査・資料整理期間工程表

平成23年度												平成24年度											
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
								―	―	―									―	―			
																			-	-	-	-	-
平成25年度												平成26年度											
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
			-	-	-	-	-	-	-	-	-						-	-	-	-	-	-		

現地調査期間 ――――

資料整理期間 - - - - - - - -

第２節　基本土層

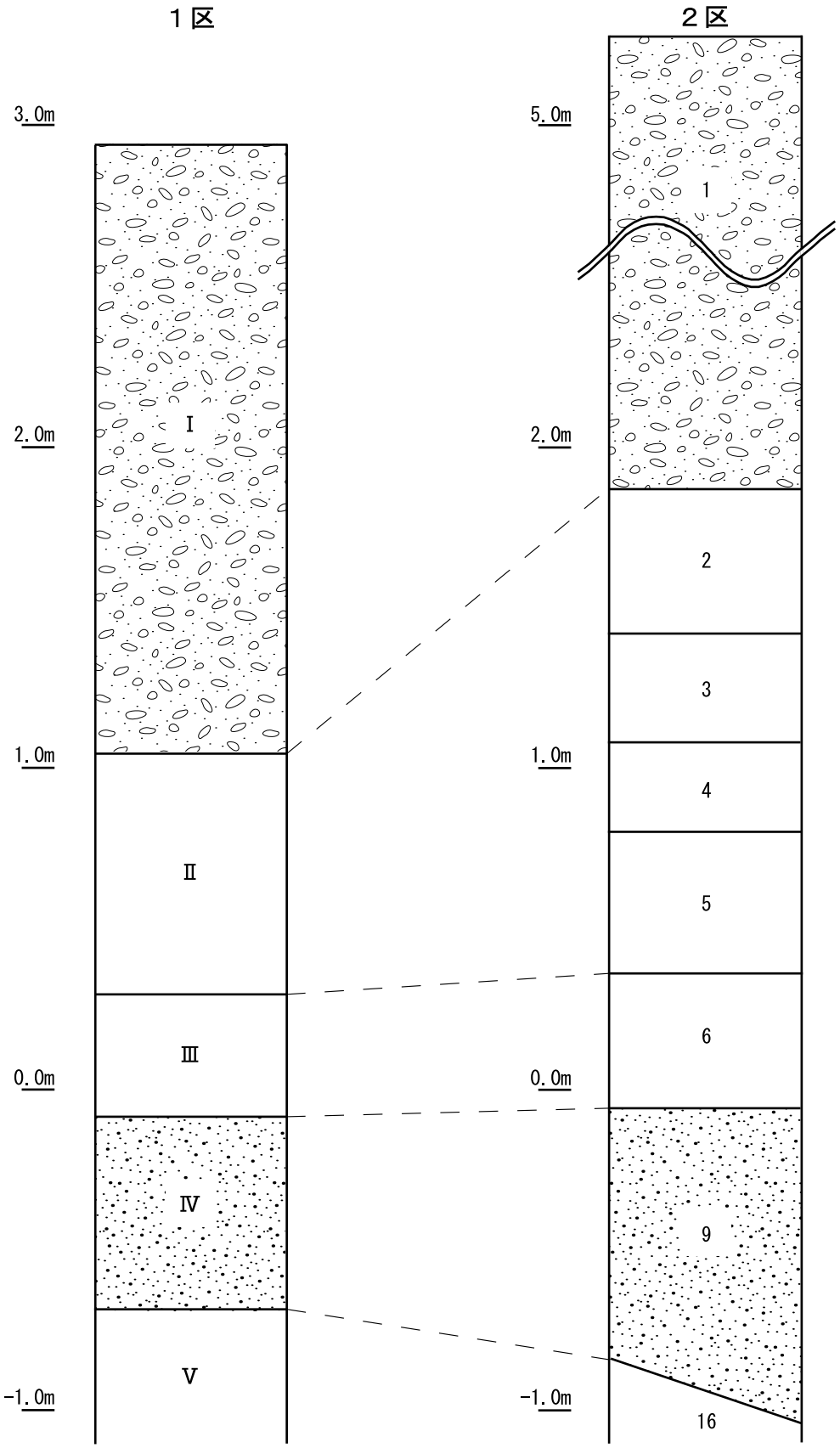
ミカノセ遺跡の層序は以下のとおりである。

１　１区

第Ⅰ層　近現代の盛土層。礫、コンクリートブロック等を多く含む。
第Ⅱ層　旧耕作土。10YR3/1黒褐色シルト質土層。
第Ⅲ層　旧河川堆積層。部分的に残存。北半部は粘性が弱く、酸化物を多く含んだ10YR5/1～10YR4/1褐灰色粘土、南半部は10YR3/1黒褐色粘土またはシルトと10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/2灰黄褐色中砂または粗砂の互層である。
第Ⅳ層　旧河川堆積層。遺物包含層。全体的にしまりが悪い湧水層。礫が混じった10YR3/1黒褐色中砂または粗砂が主体で、同色のシルトまたは軟質の粘土が互層に入る。
第Ⅴ層　基底層。10YR3/1黒褐色～10YR2/1黒色粘土が主体で、同色のシルトまたは粗砂が互層に入る。

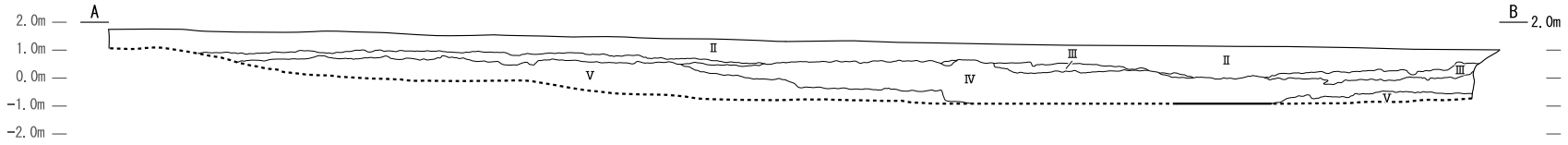
２　２区

第１層　近現代の盛土層。礫、コンクリートブロック等を多く含む。１区第Ⅰ層に相当する。
以下１区第Ⅱ層に相当する。
第２層　にぶい黄褐色土
第３層　暗黄褐色土
第４層　灰黄褐色土
第５層　灰褐色土
以下１区第Ⅲ層に相当する。
第６層　黒～灰褐色粘土
第６’層　暗褐色粘土　黒褐色細砂をラミナ状に含む。
第７層　黄褐色土
第８層　灰黄褐色粗砂　１～２cm大の礫多く含む。
以下１区第Ⅳ層に相当する。
第９層　灰黄褐色砂礫　２～５㎝大の礫多く含む。
第10層　黒褐色粘土と灰黄褐色粗砂の互層
第11層　黒褐色粘土
第12層　暗褐色細砂
第13層　暗褐色粗砂　１～２cm大の礫少量含む。
第14層　灰～黄褐色粘土
第15層　青灰色砂礫　１～３cm大の礫多く含む。
以下１区第Ⅴ層に相当する。
第16層　黒褐色粘土
第16’層　黒褐色粘土ブロック

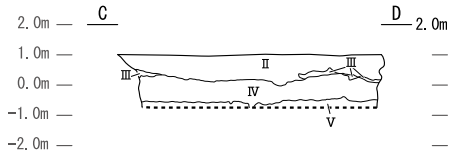


第６図　ミカノセ遺跡基本土層図

ミカノセ遺跡１区東壁土層図

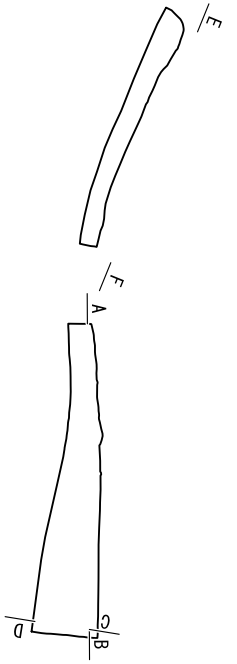


ミカノセ遺跡１区南壁土層図

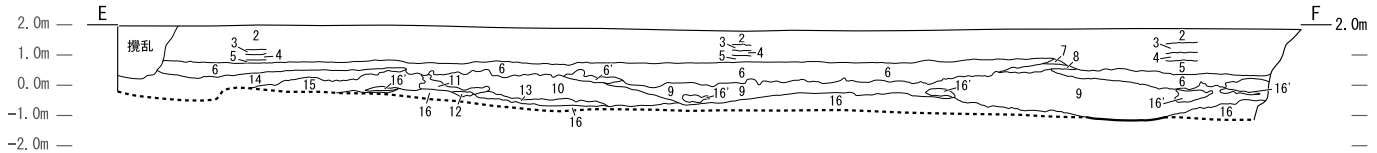


１区

第Ⅱ層　黒褐色シルト質土
第Ⅲ層　褐灰色粘土及び黒褐色粘土またはシルトとにぶい黄褐色～灰黄褐色中砂と粗砂の互層
第Ⅳ層　黒褐色中砂または粗砂
第Ⅴ層　黒褐色～黒色粘土

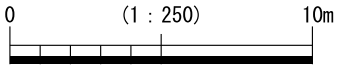


ミカノセ遺跡２区東壁土層図



２区

第２層　にぶい黄褐色土
第３層　暗黄褐色土
第４層　灰黄褐色土
第５層　灰褐色土
第６層　黒～灰褐色粘土
第6'層　暗褐色粘土
第７層　黄褐色土
第８層　灰黄褐色粗砂
第９層　灰黄褐色砂礫
第10層　黒褐色粘土と灰黄褐色粗砂の互層
第11層　黒褐色粘土
第12層　暗褐色細砂
第13層　暗褐色粗砂
第14層　灰～黄褐色粘土
第15層　青灰色砂礫
第16層　黒褐色粘土
第16'層　黒褐色粘土ブロック



第７図　ミカノセ遺跡土層断面図

第３節　遺構

１　１区

（１）流路（第８図）

北東から南西に向かって流れる流路が検出された。調査区西側に接する鯉名川の旧河川であると考えられる。右岸はＢ４グリッドに存在していたと想定される。左岸は当初Ｂ２グリッドに存在していたと想定され、川幅は約14mと推定される。後述するＳＸ01はこの時期に構築されたものと考えられる。河川の中からは、弥生時代中期から８世紀代の土師器・須恵器、10世紀の灰釉陶器までと、幅広い時期の土器が出土している。後に河川が氾濫を起こし、川幅は調査区以南まで拡がったと考えられる。

（２）護岸遺構ＳＸ01（第８図～第10図　図版２～３）

Ｂ３グリッドで検出された。河川の左岸の壁に造られた木組みの遺構である。現存長は約10m、最大幅は約4.5mである。南西側約３ｍは後の河川の氾濫の影響で崩れた部分が見られる。河川の壁に横木を置き、横木の前に杭を河川の壁に沿って隙間なく並べている。杭の勾配は20°～35°である。横木は現状で４列確認できる。河川に近い１列目と２列目の横木の間は杭を３重、４重に重ねて並べた部分もあり、その間隔は約１ｍに及ぶ。最も岸に近い横木は、前面に杭を並べず、部分的に地面に対して垂直に打った杭と、背面に河川の壁に対して直角に打ちこんだ杭で支えている。土層断面を観察したところ、遺構を人為的に埋めた痕跡は確認できなかった。この遺構を構築している横木及び杭の本数は現存で331本を数える。この遺構を構築している木材は、自然木の他に建築材を転用したものが含まれている。柱材254、263、267と梁または桁材278～280、杭323は横木として転用されている。280は梁または桁として使用していた時の枘孔に杭を河川の壁に楔のように打ちこんで固定させている。252、253、255～257、259～262、264～268、270、274～277、282～284、286～288、290、291、295、297は杭として転用された建築材であり、この施設を構築するために二次的に先端加工を施したものも見られる。下流に杭列が続いていることから、実際の遺構の構築範囲はより広かったものと想定され、後の河川の氾濫で流失したと考えられる。

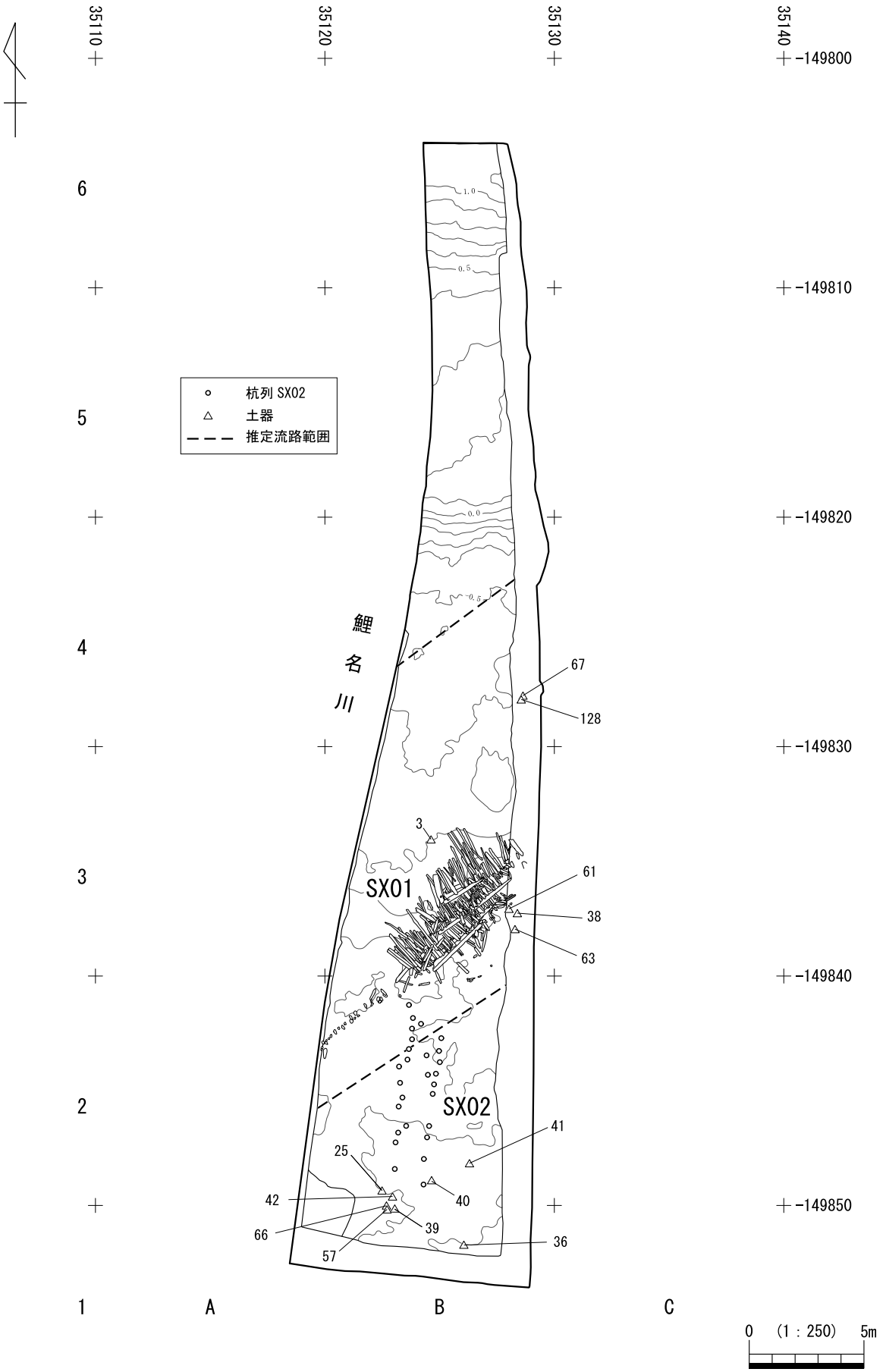
遺構に使用された木材の樹種はほとんどがイヌマキ属である。（註１）。

木材の加工には主に手斧が使用されていたと考えられるが、柱材を中心に調整面が弯曲しているものも見られることから、ヤリガンナが使用されていた可能性も考えられる（註２）。

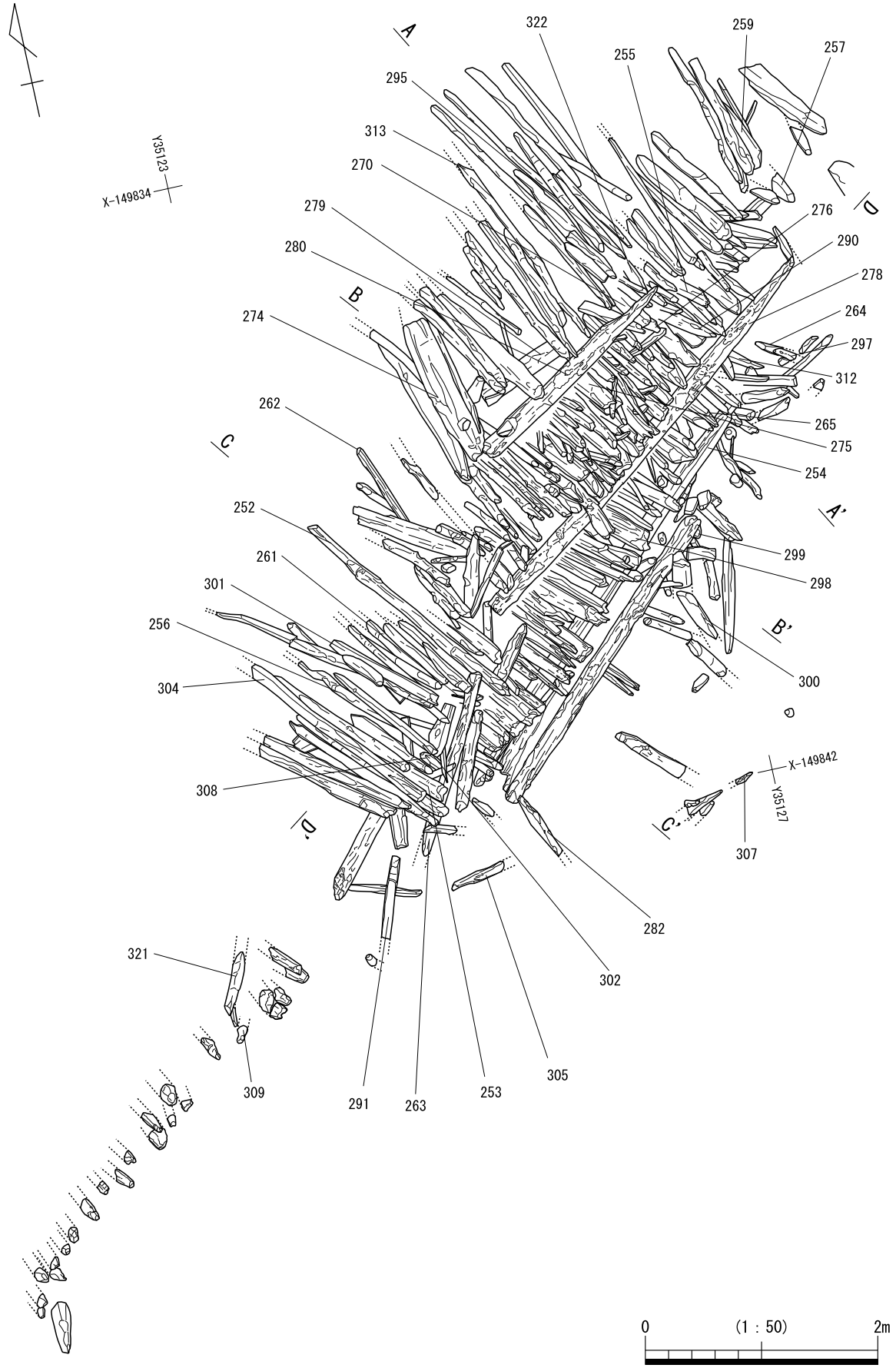
この遺構の構築材は、加工に金属製の工具が使用されていたことと、転用された柱の形状、附編２で述べる年代測定の結果から考慮して、弥生時代後期のものであると推定される。遺構が構築された時期は、河川から出土した土器の時期幅が広いため特定することが難しく、現段階ではそれ以降であると言うに留めておく。

（註１）西尾太加二氏は、イヌマキ属は室町時代以前の静岡県内では、ヒノキ、スギに次ぐ建築材として優先的に用いられていたことを指摘している（西尾2008）。樋上昇氏も、駿河地域の遺跡から出土した垂木はイヌマキ属を多用していることを指摘している（樋上2012）。

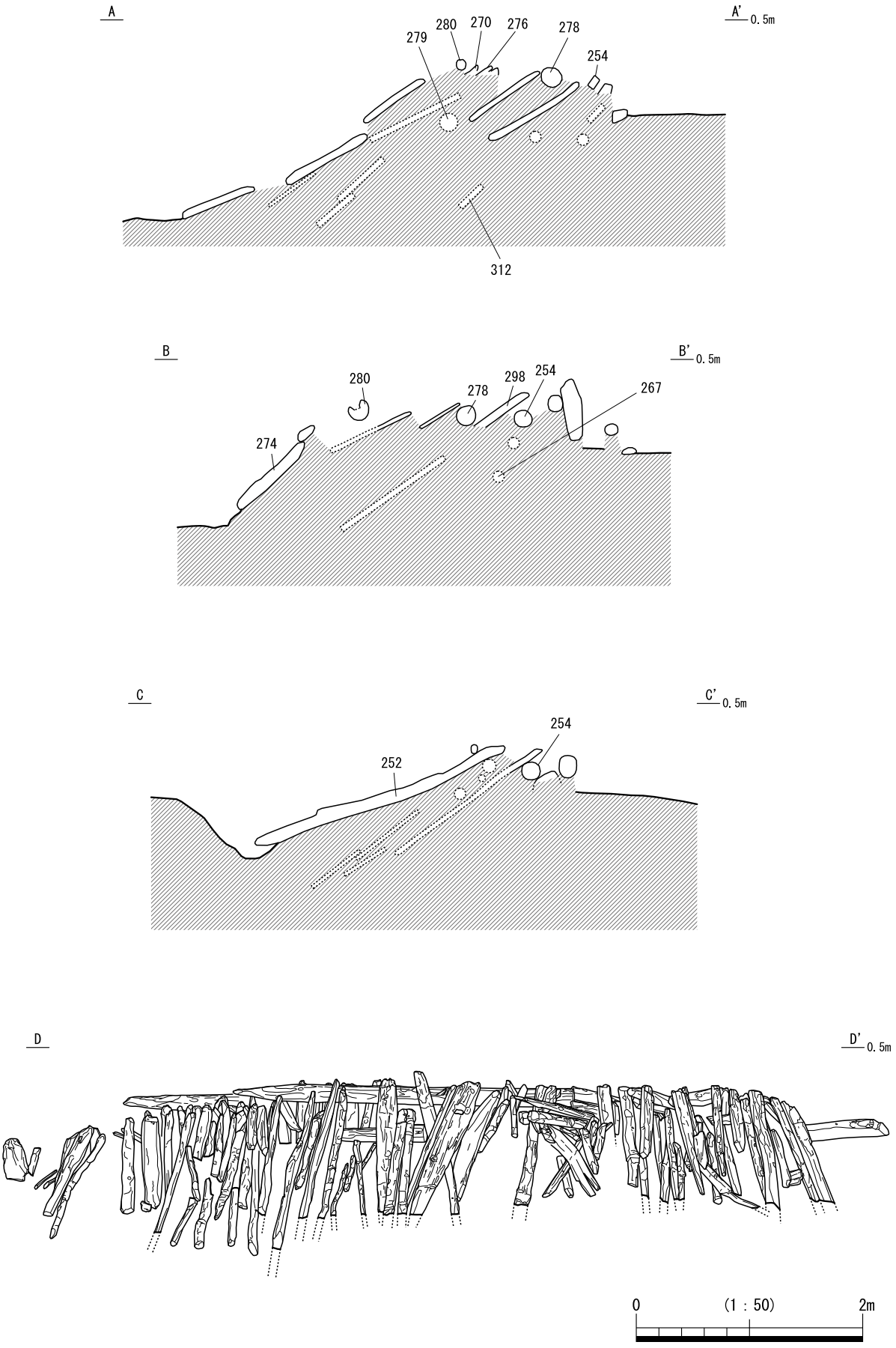
（註２）山田昌久氏・黒坂貴裕氏の御教示による。


35110
35120
35130
35140
-149800
-149810
-149820
-149830
-149840
-149850
1
2
3
4
5
6
A
B
C
杭列 SX02
土器
推定流路範囲
鯉名川
SX01
SX02
67
128
3
61
38
63
41
25
42
40
66
39
57
36
0
(1：250)
5m

第８図　１区全体図



第９図　１区　護岸遺構ＳＸ01平面図



第10図　１区　護岸遺構ＳＸ01立断面図

（３）杭列ＳＸ02（第８図　図版３）

Ｂ２グリッドで検出された杭列である。南北方向に杭が２列並行に打たれている。列の間隔は約１～1.8m、長さは約7.5mである。打たれた杭の本数は現存で東側12本、西側15本の計27本である。杭はすべて樹皮を剥いだ直径10cm程の丸太材に先端加工を施したものである。杭は地面に対してほぼ垂直に打ちこまれている。杭列の方向が河川に影響されていないこと、各杭の下端のレベルが河川の検出面より高いことから、河川が埋没した後に造られたものと考えられる。遺構の性格については不明である。

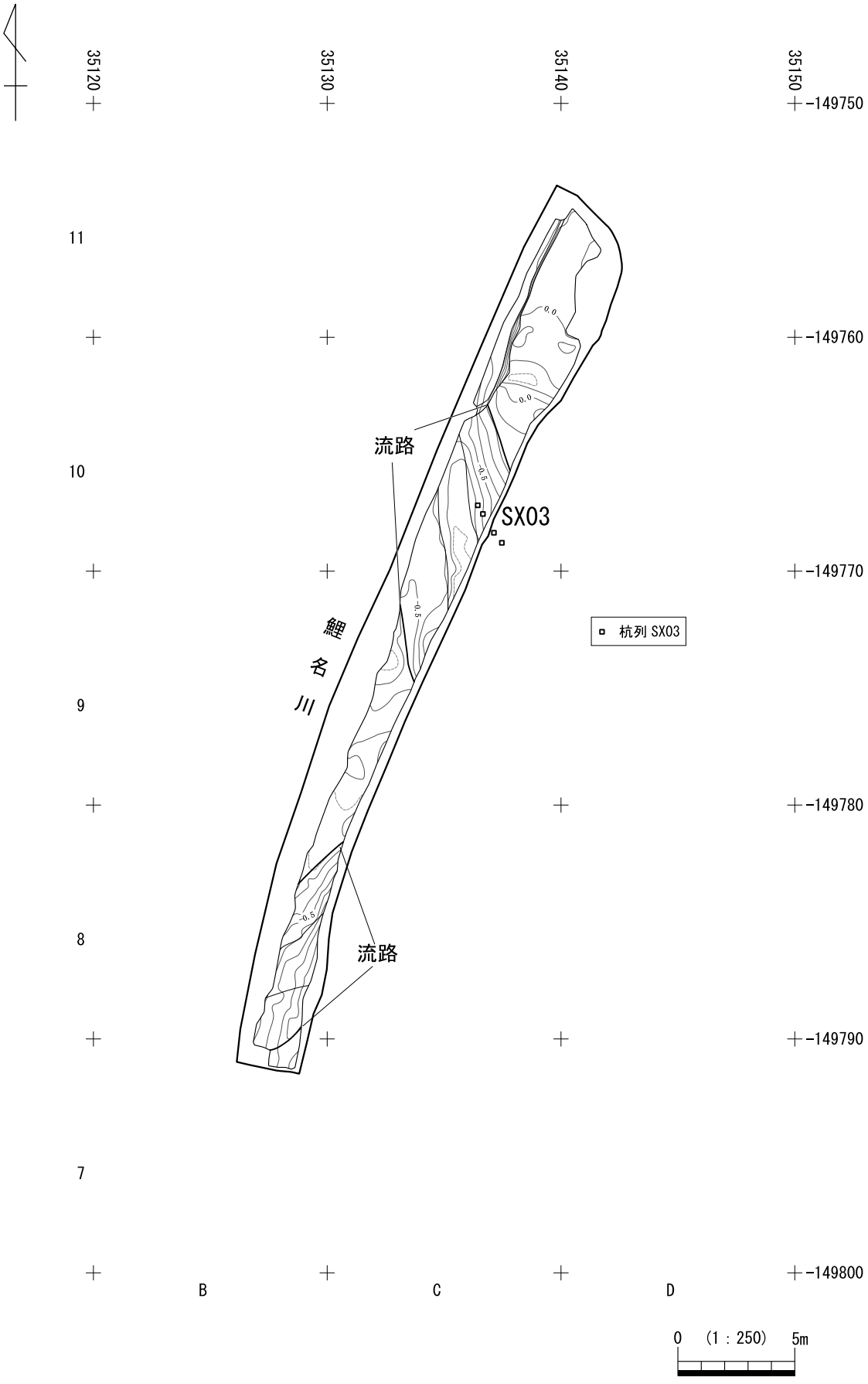
２　２区

（１）流路（第11図）

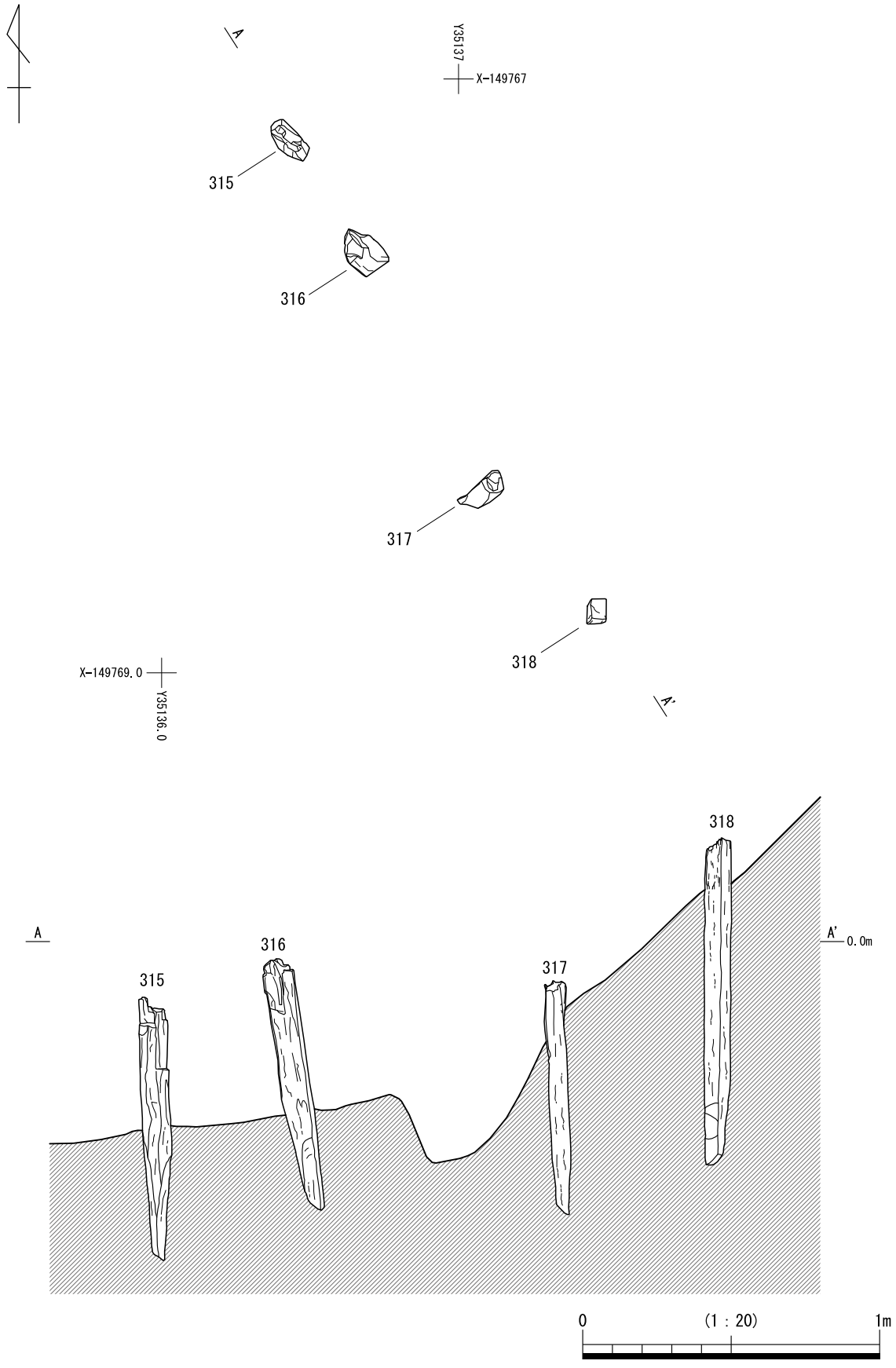
Ｂ８グリッドとＣ９・10グリッドで２条の流路が検出された。１区から検出された流路と同様、鯉名川の旧河川であると考えられる。南側の河川は北東から南西に向かって流れ、幅約７m、検出面からの深さは約1.3mである。北側の河川は北西から南東に向かって流れ、幅約７m、検出面からの深さは約１mである。土層断面を観察すると、南側の河川の堆積土が北側の河川を覆うような状態を呈しており、同一の河川であるかは明らかではない。また、１区で検出された河川とも同一のものであるかは明らかではない。両河川とも弥生時代から平安時代にかけての土器片と、獣骨と思われる骨片が出土したが、遺物の出土量は１区に比べて少ない。

（２）杭列ＳＸ03（第12図　図版４）

Ｃ10グリッドで検出された杭列である。北側の河川の左岸の壁に沿って４本の杭315～318が打たれている。杭の樹種はすべてスギである。東側２本の杭は調査区の東壁に打たれている。杭列の長さは約２mである。１区ＳＸ01と同様、護岸のために打ちこまれたものと考えられる。杭は地面に対してほぼ垂直に打ちこまれている。杭はすべて割材に先端加工を施したものであり、上部は折損している。


35120
35130
35140
35150
-149750
-149760
-149770
-149780
-149790
-149800
11
10
9
8
7
B
C
D
流路
SX03
流路
鯉名川
杭列 SX03
0.0
-0.5
0　(1：250)　5m

第11図　２区全体図



第12図　２区　杭列ＳＸ03

第４節　遺物

１　土器・土製品（第13図１～第27図243　第３表～第５表　図版５～16）

（１）縄文土器

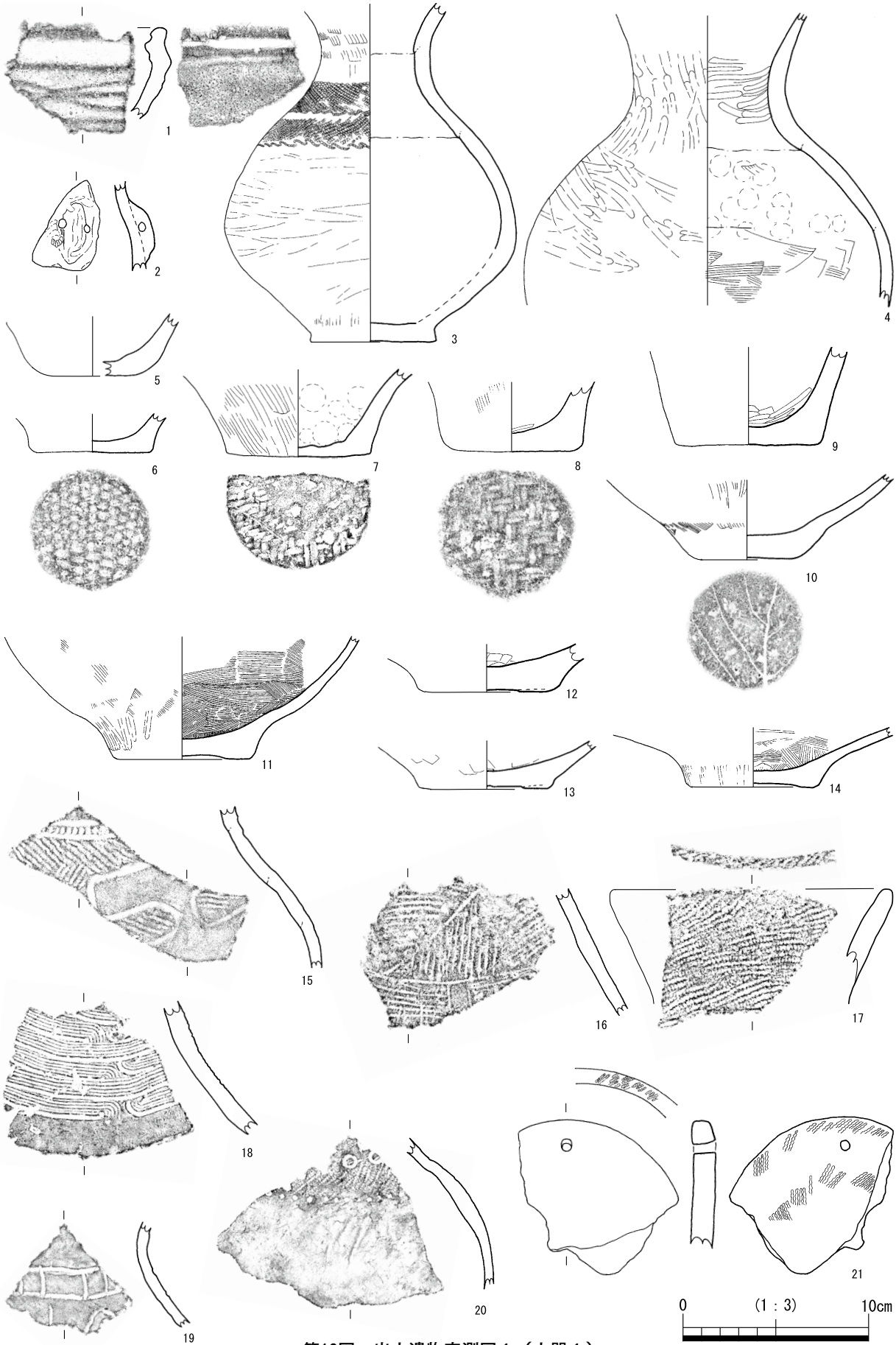
１は晩期後半の浮線文系土器の鉢である。口縁部直下でくの字状に屈曲し、屈曲部から上は狭い無文帯を有する。屈曲部から下は隆線で区画を作出している。区画の中には３条の隆線を作出し、中央で摘まんでいる。この摘みの部分がシャープであることは氷Ⅰ式古段階の特徴である。しかしこのような文様を持つ土器は静岡市駿河山王遺跡で出土した離山式併行期の土器などにも類例が見られること、内面に２条の沈線を引いて断面楕円形の隆線を作り出していることから、この土器は女鳥羽川式～離山式期のものと考えられる（註）。

（註）設楽博己氏の御教示による。

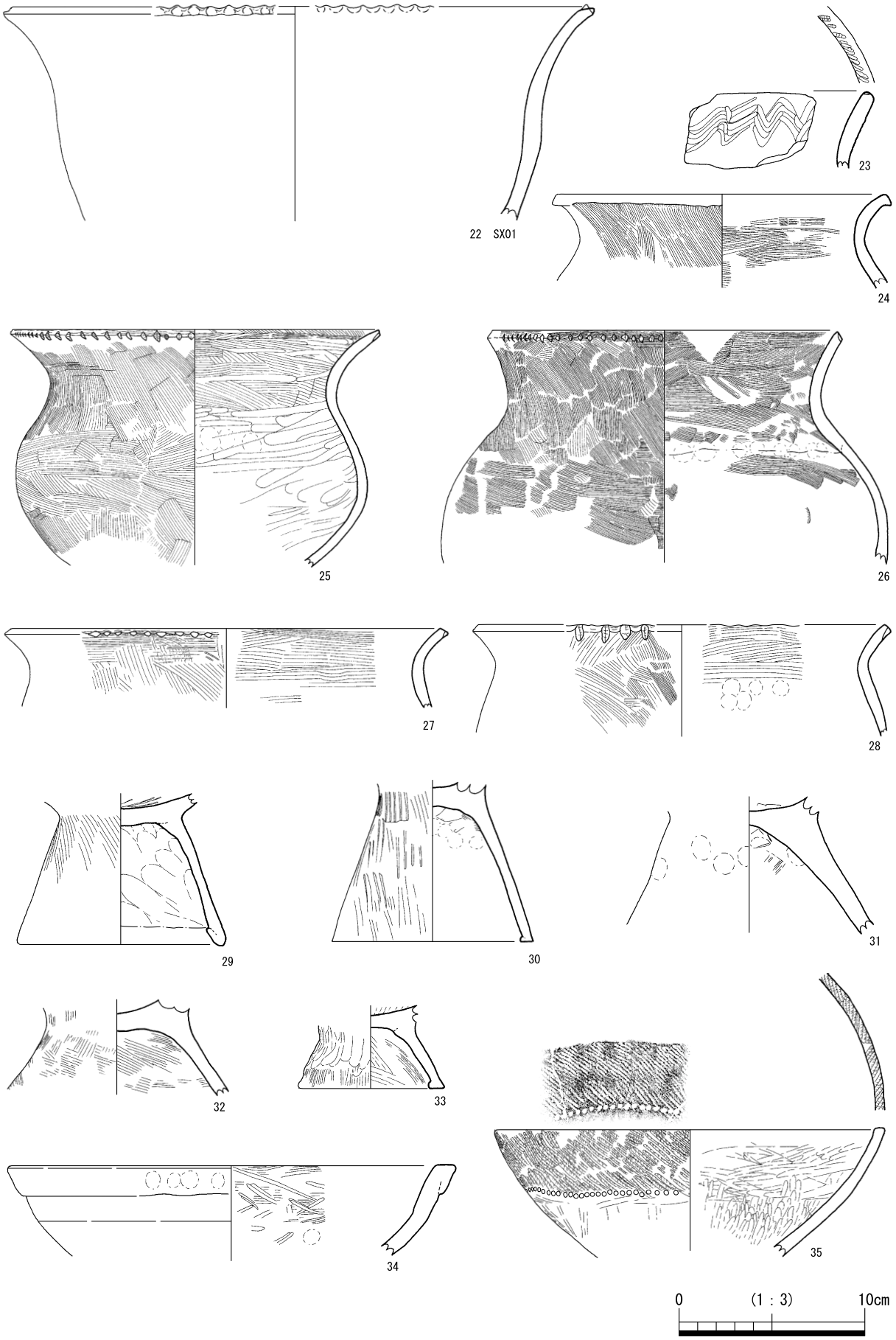
（２）弥生土器

２は中期中葉の平沢型長頸壺の突起部と考えられる。15と16は中期中葉の壺の胴部である。15は沈線で工字状の区画を描き、中にＲＬの縄文を横位または縦位に施文している。区画文の直上にも沈線を引き、間に連続刺突文を施文している。16は予め沈線で縦位、横位、斜位の区画を描いてから同じ原体で矢羽根状あるいは格子状の文様を施文している。17は中期後葉の壺の口縁部である。口縁の開きは小さい。口唇部と外面全体にＬＲの縄文を施文している。18と19は中期後葉の壺の胴部である。18は櫛状の工具で流水文を施文している。施文方法を見ると、始点と終点を上下逆方向に回転させてから引いた直線を、間隔を開けて引いてから、間に直線を引いている。内面はハケメが見られる。19は沈線で梯子状の文様を施文している。５～９は中期中葉から後葉の壺または甕の底部である。５は底面の網代痕が磨滅している。６～８は底面に網代痕が見られる。５と６は胎土に雲母を含む。22と23は中期後葉の甕である。22は口縁部が大きく開く。口唇部の角には外内面両面から交互にキザミを施している。23は外面口縁部に櫛状工具で波状文を施文している。口唇部内面の角に斜位のキザミを施している。信州系の土器と考えられる。

10～14は後期前葉の壺の底部である。11は胎土が白く、東遠江からの搬入品と考えられる。３と４は後期中葉から後葉の壺である。３は肩部に上段はＲＬ、下段はＬＲのＳ字結節を伴う縄文を施文している。４は器面全体にヘラミガキを施している。20は後期後葉の壺の胴部である。肩部にＬＲの縄文を施文し、縄文の直下に細い竹管で連続刺突文を施文している。縄文の上には竹管文を施文している。内面はハケメが見られる。関東系の土器と考えられる。21は後期の壺の蓋と考えられる個体である。全体的に磨滅が著しい。外縁部に１箇所穿孔が見られる。外面は無文で､口唇部にＬＲの縄文を施文している。内面はＬＲの縄文を施文していると考えられる。24～28は後期後葉の台付甕の甕部である。いずれも頸部の屈曲は丸い。25～28は口唇部外面の角にキザミを施している。27と28は口唇部のキザミの入れ方がやや抉り気味で波打っていることと、胴部の張りが小さいことから、25と26より時期がやや先行する可能性がある。30～32は台付甕の脚部である。30は底径に対して器高が高く、後期前葉のものと考えられる。31と32は後期後葉の比較的大型の個体である。33は中期または後期の台付鉢か高坏の脚部である。接地面はハケメを施してから、部分的にさらに粘土を貼りつけている。底面は同一方向のヘラミガキを施している。34と35は後期の高坏の坏部である。34は外面ににぶい稜を有し､口縁部は折り返している。35は埦形を呈する。外面口唇部直下は短いＬの縄文を重ねて施文してから、直下に細い竹管で連続刺突



第13図　出土遺物実測図１（土器１）



第14図　出土遺物実測図２（土器２）

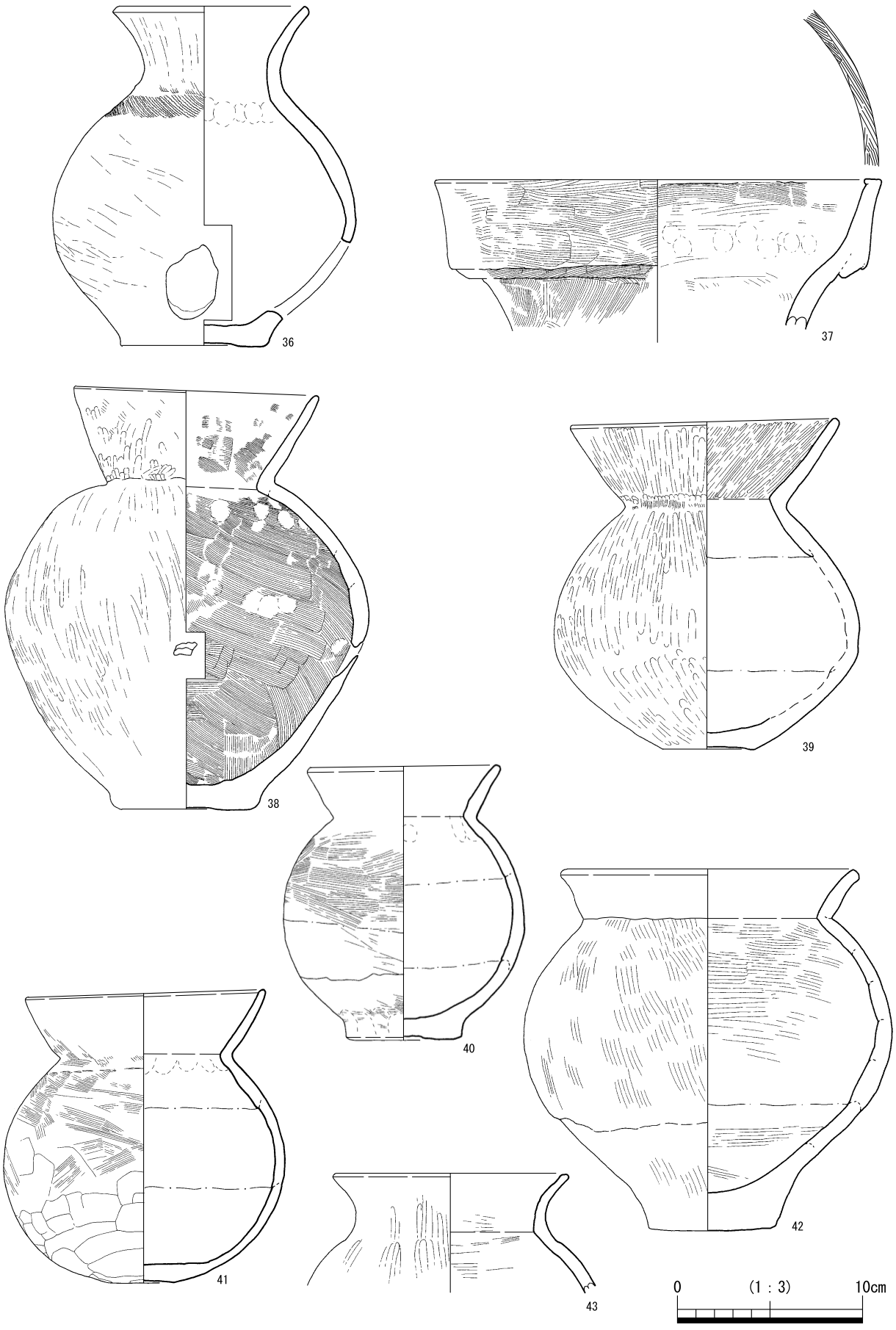
文を施文している。口唇部にもＬの縄文を施文している。関東系の土器と考えられる。

（３）土師器

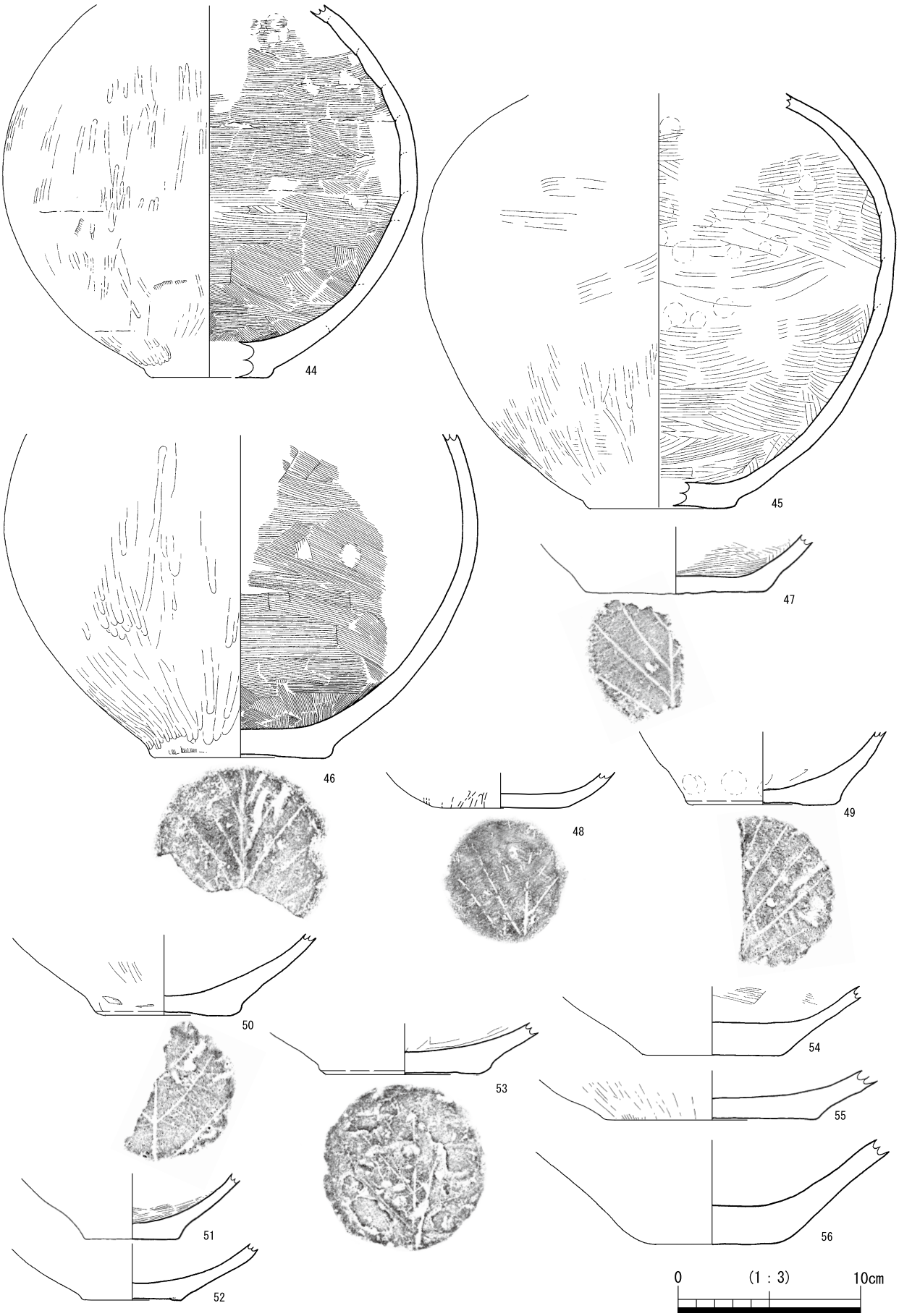
29・36～66は須恵器出現期以前のものと考えられる個体である。29はＳ字甕の脚部であると考えられる。36は大廓式期の単純口縁壺である。口縁部の開きは小さく、頸部は短く、肩部はなだらかである。肩部にはＲＬの縄文を施文している。焼成後に胴下部を穿孔している。37は大型の複合口縁壺である。口径に対して複合部が短く、内面に屈曲が見られることから、大廓Ⅰ式ないしⅡ式のものと考えられる。但し、典型的な大廓式の大型壺に比して胎土に含まれる白色粒子は小さくかつ少ない。42は大廓Ⅲ式期以降出現する平底甕である。「く」の字状に屈曲する口縁部をヨコナデにより調整し、屈曲部分の外面の接合痕を意図的に残している。また、胴部のハケメを顕著に残している。大廓式期後半のものと考えられる。43は平底甕と考えられる口縁部である。外面はヘラミガキを施している。38～41は直口壺である。いずれも胴径が口径を凌駕する。38は口縁部が比較的長く、胴中央部に最大径を有する。器面は丁寧なヘラミガキを施している。焼成後に胴部を穿孔している。39は口縁部の開きが大きく、胴下部に最大径を有する。器面は丁寧なヘラミガキを施している。40はやや長胴である。41は丸い下膨れの胴部を有し、下部をヘラケズリで調整している。これは中見代式期に見られる調整手法である。44～46は大廓Ⅲ式～Ⅳ式期のものと考えられる球胴の壺である。46は胎土に白色粒子を含む。47～56は壺の底部である。54～56は胎土に白色粒子を含む。57と58は小型の壺である。57は口縁部が短く、口唇部は丸く整えている。器面は丁寧なヘラミガキを施している。58は胴径に比して底径が大きい。弥生時代後期までさかのぼる可能性がある。61は小型の鉢である。頸部の屈曲が緩やかで、口唇部を面取りしていることから、弥生時代後期までさかのぼる可能性がある。62は小型の甕である。脚台の有無は不明である。59・63・65・66は平底の坩である。59は口径が胴最大径より大きい。口縁部は胴部よりやや短く、内弯気味に開く。63と66は底径に比して頸部径が大きいやや潰れた球形の胴部を有する。65は頸部径が小さく、算盤玉状に近い形状の胴部を有する。60と64は平底または丸底の坩である。60は口径が胴最大径より大きく、口縁部は短く内弯気味に開く。64は口縁部が直線的に大きく開く。

67～89は５世紀中葉から７世紀のものと推定される甕である。67は張りの小さい長胴の甕である。器面は丁寧なナデでハケメを消している。68は67よりやや球形に近い胴部を有する。屈曲部分の外面の接合痕を意図的に残している。69～71・75～78・79・80は破片資料ではあるが、胴部の張りが小さい甕であると推定される。80は屈曲部分の外面の接合痕を意図的に残している。82～89は、古墳時代後期に出現する駿東型の甕である。82を除いて口唇部の肥厚が明瞭でないことから、これらの甕の年代は８世紀まで下る可能性がある。85の口唇部は、内面がわずかに肥厚し、外面も肥厚している。87は口唇部内面を折り返してわずかに肥厚させている。85と87は口縁部と胴部の接合部の突き出しが顕著である点も見ると、年代は８世紀前半と考えられる。

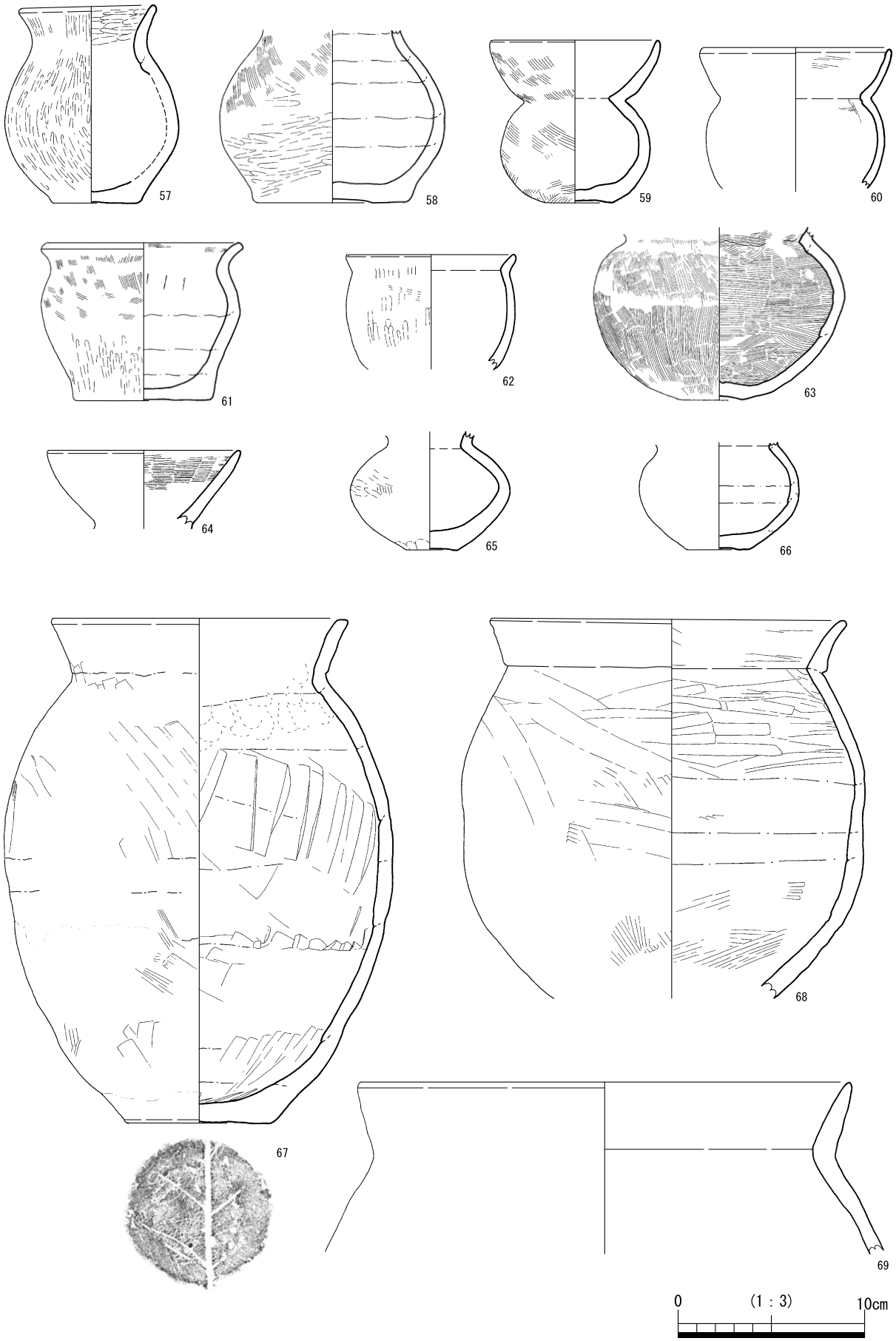
90～118は７世紀末に出現し、９世紀後半あるいは10世紀まで継続した堝である。この形態の堝は、沼津市藤井原遺跡、同御幸町遺跡で多量に出土し、また、富士市東平遺跡、函南町伊豆逓信病院内遺跡など、主に静岡県東部の集落遺跡で出土している。90は半球形を呈する胴部を有し、口縁部が外反する。91～93は直線的に立ち上がった胴部を有し、口縁部が外反する。91と92は口縁部がやや肥厚する。94～102・112・113は口縁部の断面形が三角形を呈する。口縁端部外面は尖っている。94～102は口縁端部内面が玉縁状に張り出している。94・96・100～102・113は内面の肥厚部下に稜を有する。102は上部に向かって大きく開く胴部を有している。103～110は口縁部全体が肥厚し、内面の肥厚部下に稜を有する。口縁端部外側は尖っている。105は胴上部の張り出しが強い。口縁端部外面は上方へ突き出し、口縁端部内面は玉縁状に張り出している。107は口縁部外面に折り返しが見られる。108は屈曲部分の外面の接



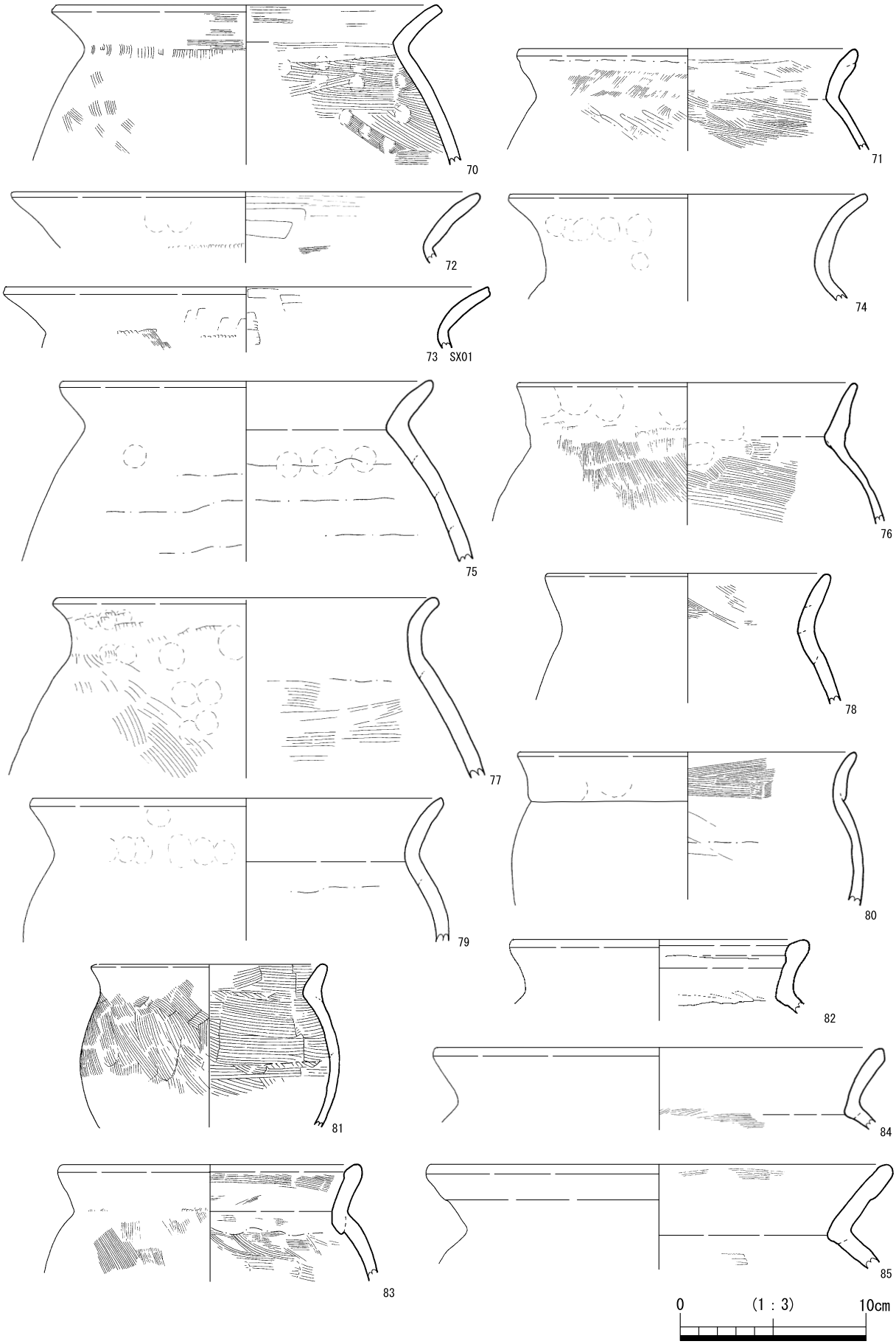
第15図　出土遺物実測図３（土器３）



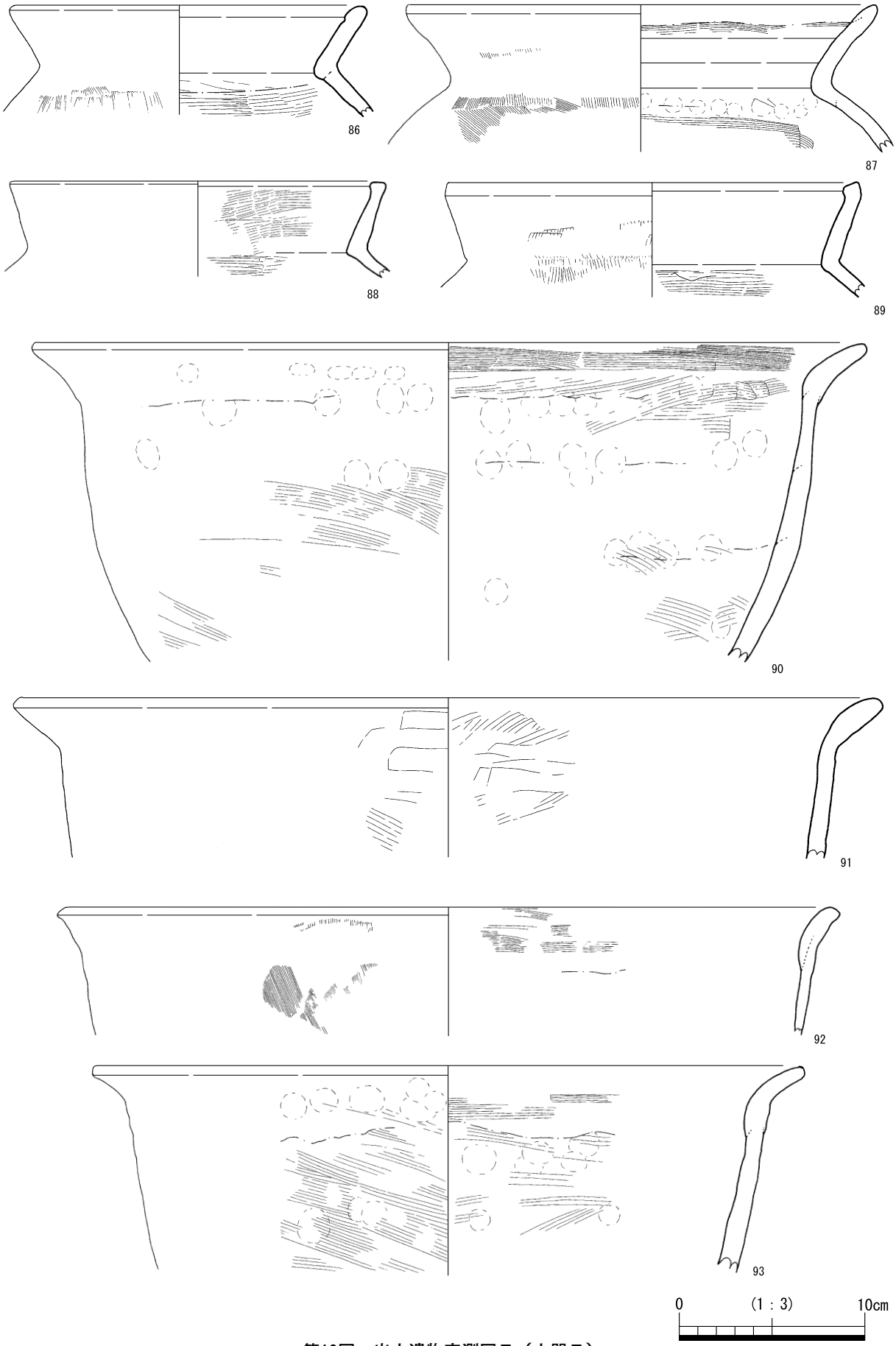
第16図　出土遺物実測図４（土器４）



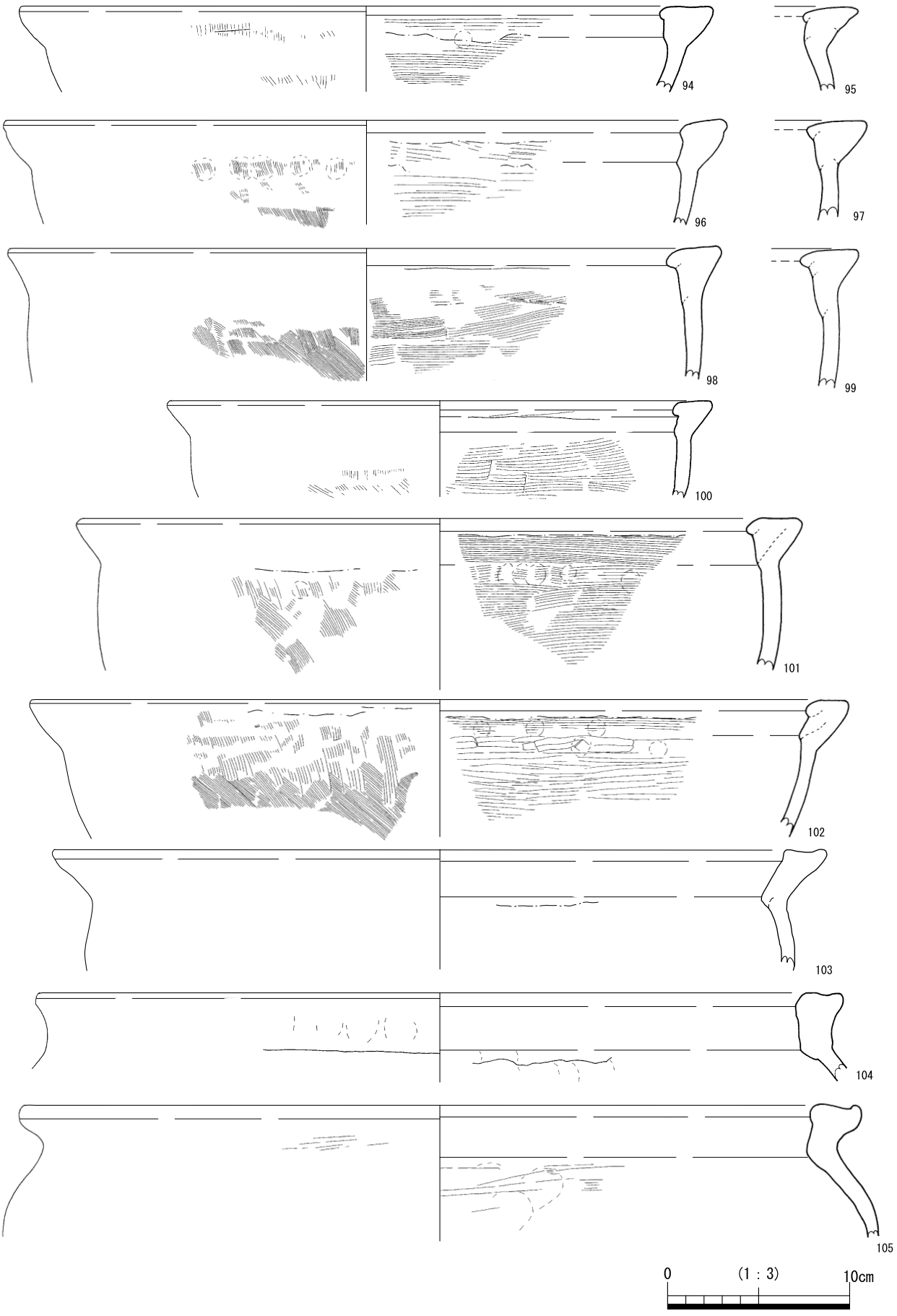
第17図　出土遺物実測図５（土器５）



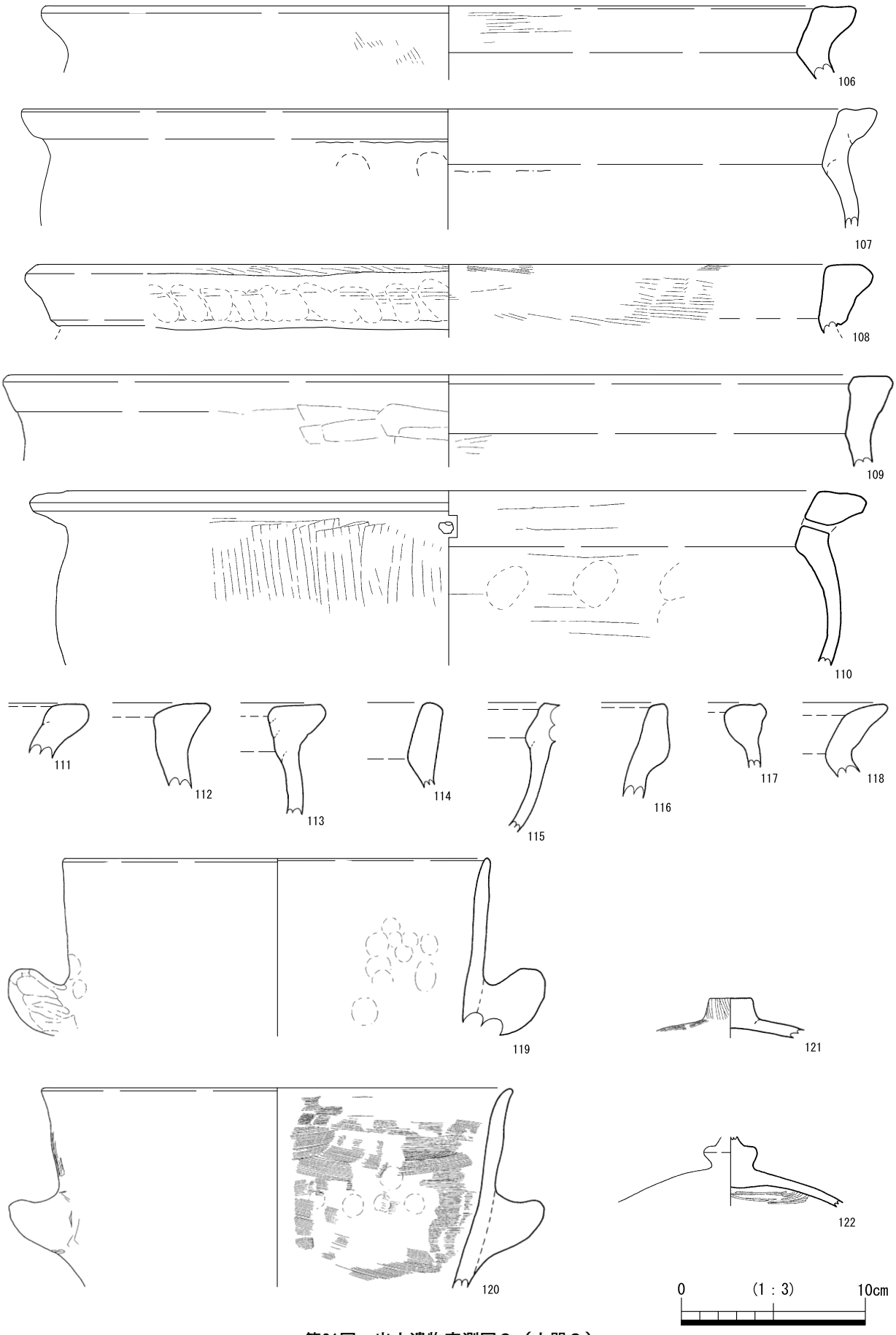
第18図　出土遺物実測図６（土器６）



第19図　出土遺物実測図７（土器７）



第20図　出土遺物実測図８（土器８）



第21図　出土遺物実測図９（土器９）

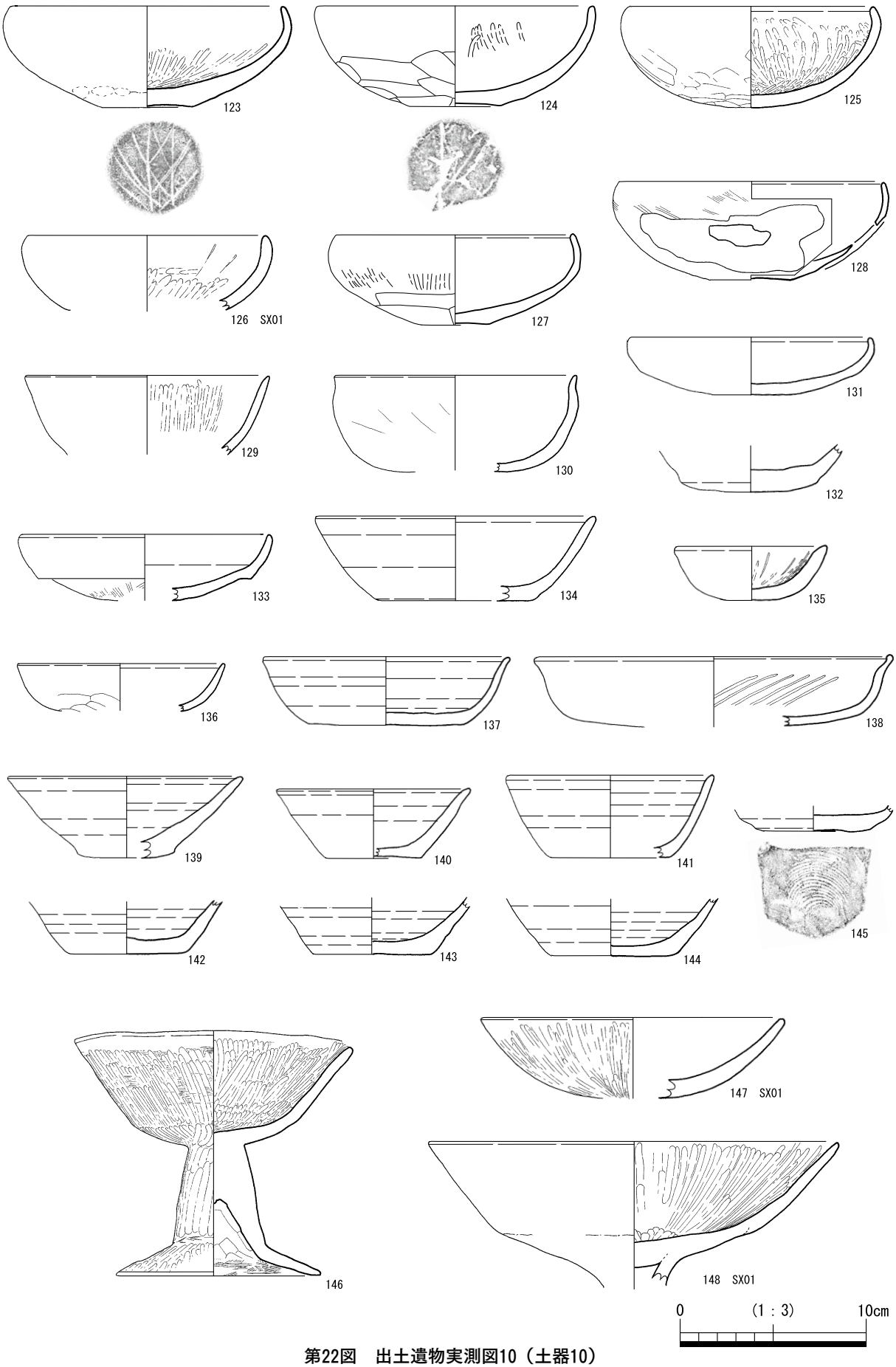
合痕を意図的に残している。110は丸みのある胴部を有する。また、口縁部には小孔を穿っている。114は口縁部全体が肥厚するが、厚みは均一である。内面に稜を有する。115は上部に向かって大きく開く胴部を有すると考えられる。口縁部の形態は94～102と同じであると考えられる。116は口縁部外面に段を有している。117は口縁端部内面が大きく突出し、断面形が三角形を呈する。118は厚みのある口縁部が斜上方に外反する。

119と120は古墳時代後期の甑である。いずれも把手の位置は胴部中ほどよりやや上と考えられる。119は把手をヘラケズリで調整している。120はハケメ整形を主体としている。

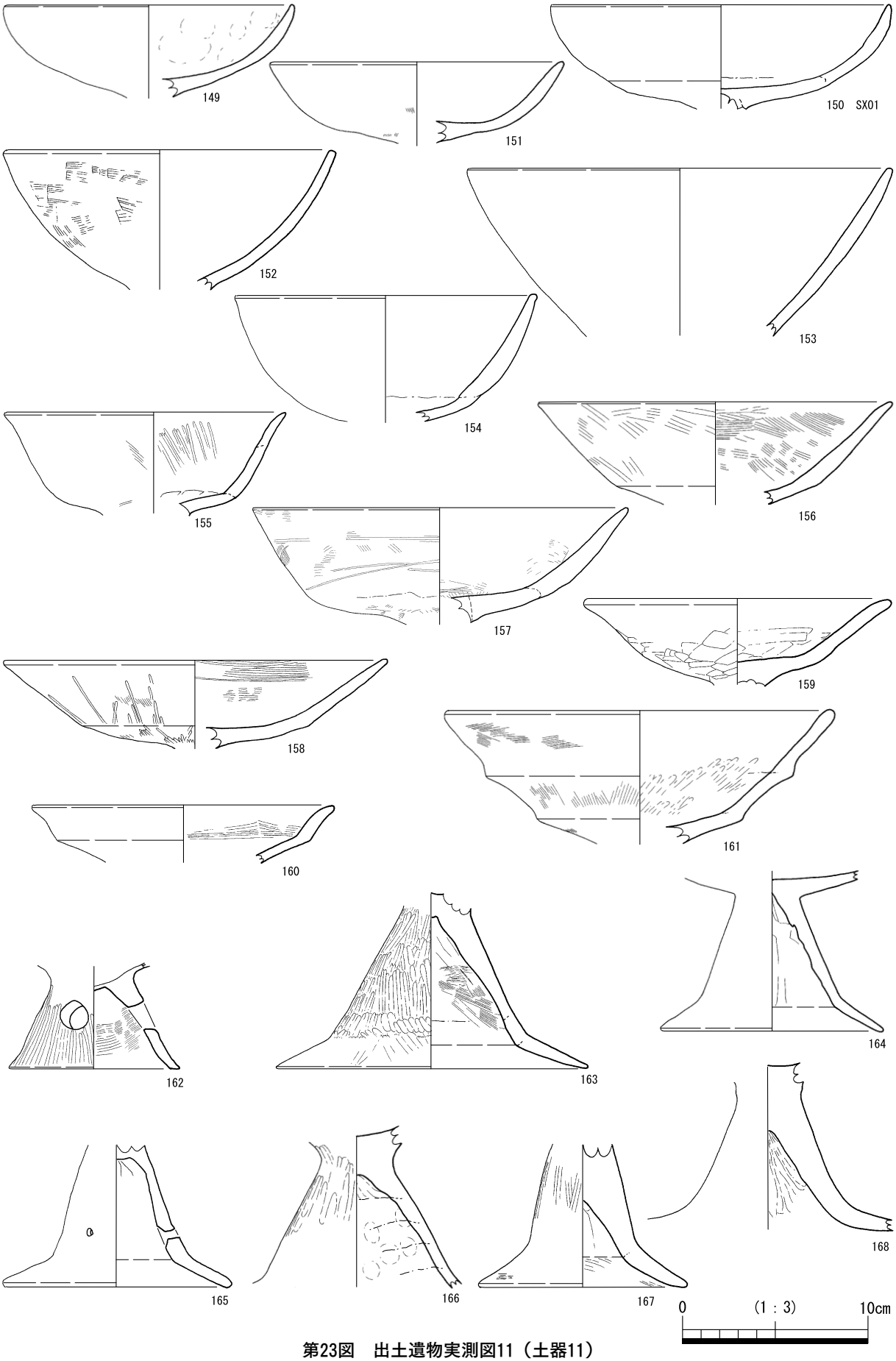
121と122は８世紀の須恵器を模した坏蓋である。121は天井部が平坦なつまみ、122は宝珠状のつまみを付けている。

123～133・135・136は古墳時代後期の坏である。123～128・131は口縁部が内弯して立ち上がる。123・124・128は上げ底、125は丸底である。いずれも磨滅が著しく、調整手法が明確に観察できるものは少ないが、口縁部はヨコナデ、外面胴下部はヘラナデまたはヘラケズリ、内面は放射状のヘラミガキを施しているものが多い。128は焼成後に胴部を穿孔している。131は平底で器高の低い個体である。129と130は埦に近い形態を有する。129は口縁部が開き、内面は放射状のヘラミガキを施している。130は丸底で球形の体部を有し、強いヨコナデで短く直立して立ち上がる口縁部を作り出している。胴下部はヘラナデで調整している。132は厚手で、丸底の底部を持ち、胴部は稜を有して立ち上がる。133の形態は坩の最終形態と考えられるもので、日野遺跡で出土例が報告されている。（南伊豆教委1987）。135と136は小型の製品である。135は平底で、内面は放射状のヘラミガキを施している。138は皿である。８世紀代の平城京からの搬入品に似た形状を呈する。134・137・139～145は９～10世紀の坏である。いずれもロクロ成形の製品である。134と137は内弯して立ち上がる体部を有する。137は底部に強いナデを施している。ともに甲斐型坏と考えられる。139～144は体部が直線的に立ち上がる駿東型坏と考えられる。139は底径が口径に比して小さく、体部の開きも大きい。140は口縁部に強いヨコナデを施して端部を外反させている。145の底面は糸切りの後、周縁にヘラケズリを施している。

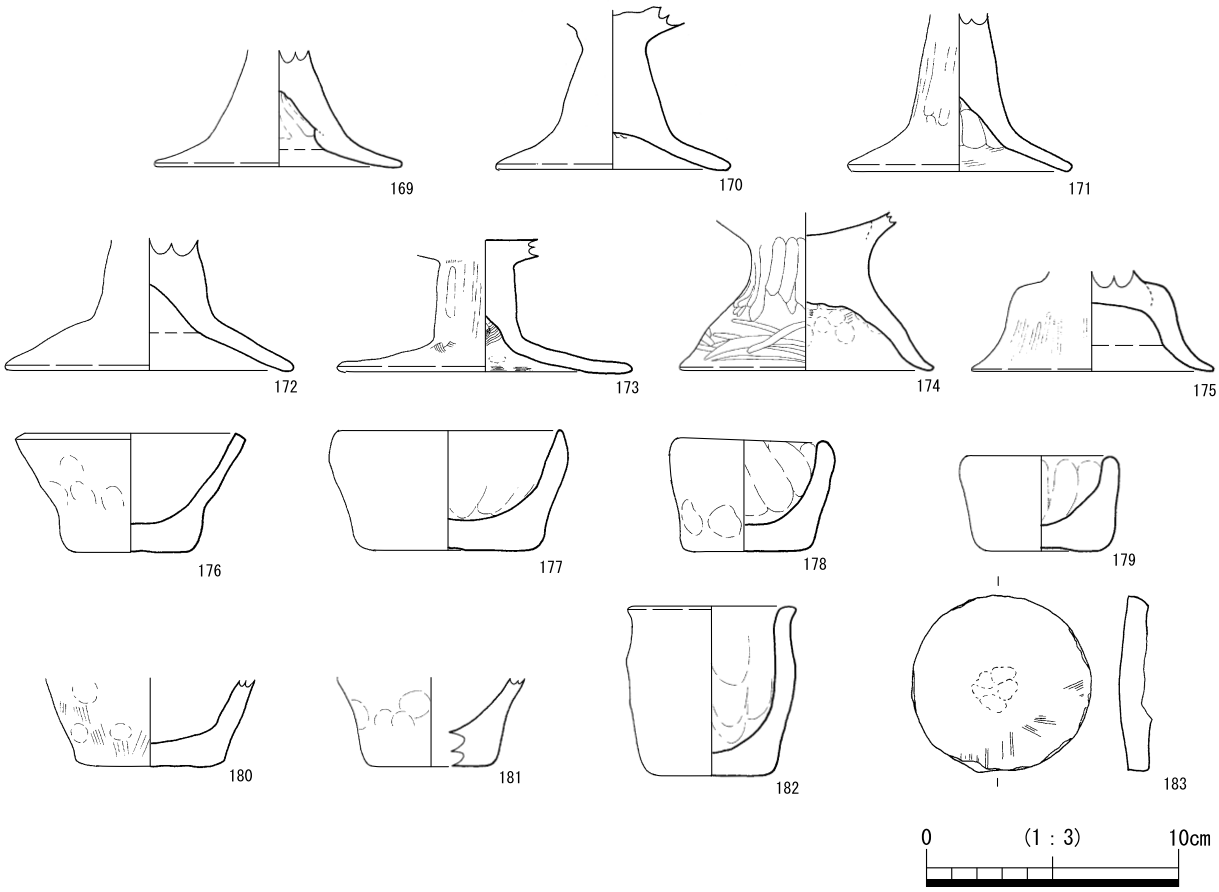
146～175は高坏である。146は出土した高坏の中で唯一全体の器形が明らかな個体である。坏部は深く、直線的に開き、下部ににぶい稜を有する。脚部はエンタシス風で、下部で屈曲して、短く大きく開く。また、脚部の上半部約1/2が中実化している。坏部外内面と脚部外面は放射状のヘラミガキを施している。口径と脚部径の比率及び坏部と脚部の比率から見て、古墳時代中期前葉のものと推定される。147と149～151は浅い埦形の坏部である。147は外面に放射状のヘラミガキを施している。いずれも古墳時代前期後葉～中期のものと考えられる。148は直線的に開き、下部ににぶい稜を有する坏部である。内面は放射状のヘラミガキを施している。脚部との接合部の形状から、古墳時代前期のものと推定される。152は脚部との接合部から直接大きく開く深い坏部である。外面は横位のハケメ調整が見られる。153は直線的に開く大型の深い坏部である。ともに古墳時代中期のものと考えられる。154は深い埦状の坏部である。155は深く、直線的に開く坏部で、下部ににぶい稜を有する。口縁部は外反している。内面底部はヘラナデ、体部は放射状のヘラミガキを施している。154と155の時期は古墳時代後期まで下る可能性がある。156～160は浅く、直線的に大きく開く坏部である。156・158・159は下部に稜を有する。157は下部ににぶい稜を有する。160は坏の中央部に稜を有する。この形態の坏部は159を除いてハケメ調整が見られるのが特徴的である。159は外内面とも下部をヘラナデで調整している。161は外面に２段の稜を有する坏部である。内面は一直線に開く。外面上半部は横位のハケメ、下半部は放射状のハケメ、内面は放射状のヘラミガキを施している。調整技法は異なるが、この形態の高坏は三島市安久川原崎遺跡第２号河川などで出土例が報告されている（三島市教委1989）。156～161の時期は古墳時代中期と考えられる。162～175は脚部である。162は低脚で、接合部が太く、「ハ」の字状に開く。中央部に円形の透か



第22図　出土遺物実測図10（土器10）



第23図　出土遺物実測図11（土器11）



第24図　出土遺物実測図12（土器12・土製品）

しを３方穿っている。外面は放射状のヘラミガキ、内面はハケで調整している。古墳時代前期の脚部である。163・164・166は接合部から「ハ」の字状に開き、下部で屈曲して、短く大きく開く。165と167はエンタシス風で、下部で屈曲して、短く大きく開く。165は小さな円形の透かしを３方に配置しているが、実際に穿っているのは２方のみである。168は細長い脚部を有し、接合部から徐々に開き、下部で大きく開く。163～168の時期は古墳時代中期と考えられる。169～175は小型の脚部である。169は接合部から「ハ」の字状に開き、下部で屈曲して大きく開く。170～172はエンタシス風で、下部で屈曲して大きく開く。170は中実化している。171は細長い脚部を有する。脚部の上半部約1/2が中実化している。172は低脚で、裾部が長い。173は柱状で、下部が大きく屈曲し、裾部が長い。169～173の時期は古墳時代中期と考えられる。174は短く太い脚部で、「ハ」の字状に開いている。外面の接合部にヘラケズリを施している。時期は古墳時代後期と考えられる。175はほぼ直角に弯曲し、裾の端部が短く開く。上部には柱状の脚部が付くと推定される。時期は古墳時代中期または後期と考えられる。

176～182は手づくね土器である。日詰遺跡及び日野遺跡の５世紀～７世紀前半の祭祀遺構から同形態の土器が多く出土している（南伊豆町教委1980・1987・2000）。176は比較的丁寧な作りをしている。体部は直線的に開き、口唇部を面取りしている。177～179は直立気味に立ち上がる体部を有する。180は胎土が精緻である。外面にはハケメ調整が確認できる。182は長胴で、口唇部付近がわずかに外反する。

183は土製円板である。高坏の坏部を素材にしたものと考えられる。高坏の脚部を外し、体部の接合痕の位置に合わせて円形に打ち欠いて形状を整えている。外面にはヘラミガキが確認できる。

（４）須恵器

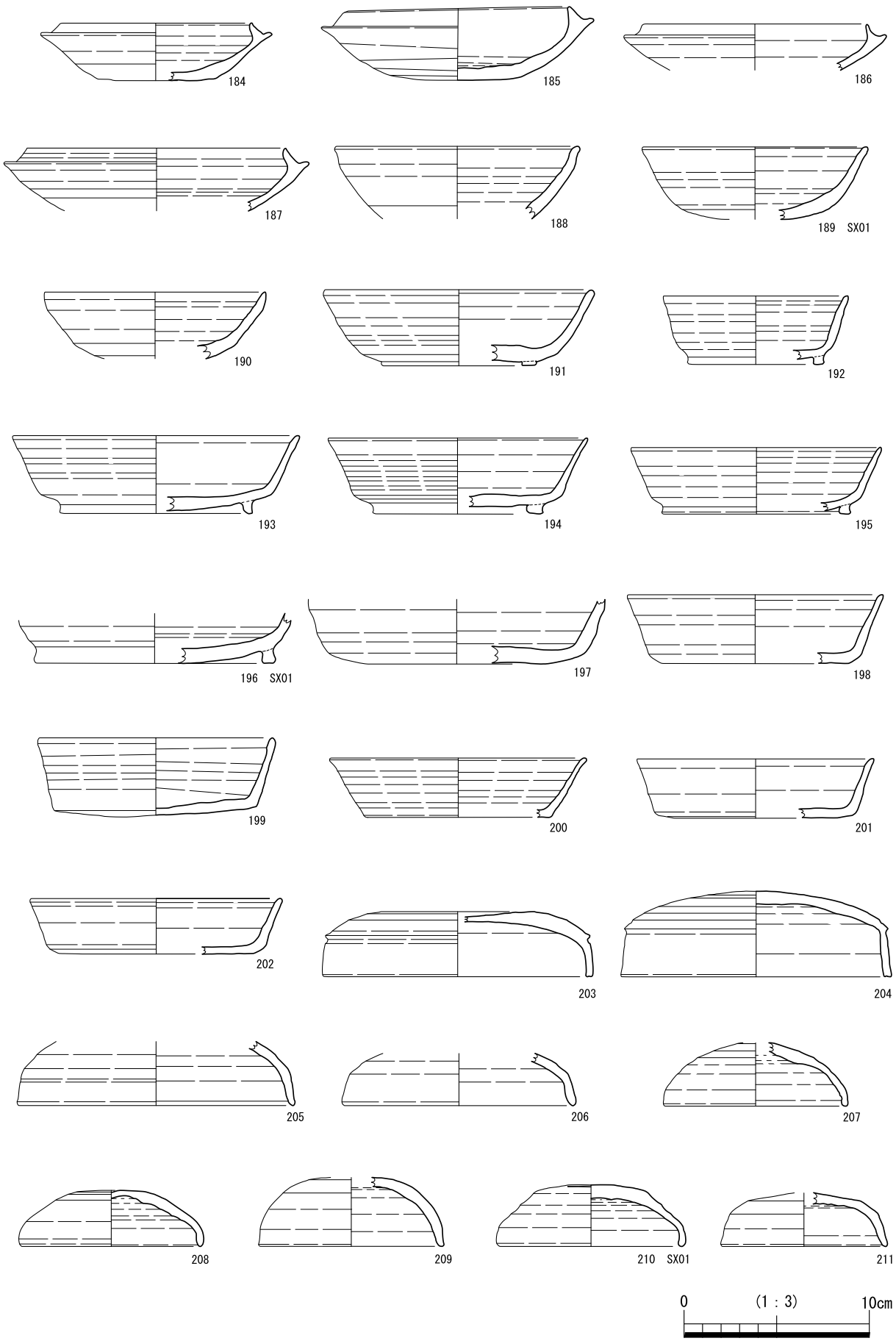
184～202は坏身である。184～187は受部にかえりが付いている。底部は弓張り状で、口縁部は内傾して立ち上がる。端部は丸く仕上げている。６世紀後半の遠考研編年第Ⅲ期中葉陶邑編年ＴＫ43型式に該当すると考えられる。184は底部にヘラおこしの痕跡が残る。188～190は受部にかえりが付かず、器形は埦型を呈する。７世紀後半の遠考研編年第Ⅳ期後半陶邑編年ＴＫ46・48型式に該当すると考えられる。191～196は貼付高台を有する。191は平底で、丸みを持って外傾する体部を有し、低い高台をやや内側に貼り付けている。192～195は体部の立ち上がりの位置に稜を有する。193・195・196の底面は丸く、195と196は底部が高台の接地面とほぼ同じ高さとなる。196は高台が体部の立ち上がりの位置に付く。これらの製品の時期は７世紀末～８世紀初頭と考えられる。197～202は無高台の平底の坏身である。いずれも器形は箱形を呈する。これらの製品の時期は８世紀中葉と考えられる。197の底部は回転糸切り痕の周縁にナデ調整を行っている。198・200～202は底部全体に回転ヘラケズリ調整を行っている。199は底面の糸切り痕を回転ヘラケズリ調整で消している。200～202は底径に比して器高が低い個体である。

203～220は坏蓋である。203と204は天井部と口縁部の境に明瞭な稜を作り出している。口縁端部には段の名残と考えられる凹みが確認できる。６世紀前葉の遠考研編年第Ⅱ期陶邑編年ＭＴ15型式に該当すると考えられる。205と206は天井部と口縁部の境の稜が退化した形態で、口縁端部が丸い。205は天井部に自然釉が付着している。６世紀後半の遠考研編年第Ⅲ期中葉陶邑編年ＴＫ43型式に該当すると考えられる。207～211は205・206の法量が小型化したものである。210は天井部に窯印と考えられる鋭利な刃物痕が確認できる。７世紀後半の遠考研編年第Ⅳ期後半陶邑編年ＴＫ217もしくはＴＫ46・48型式に該当すると考えられる。212～220は天井部に宝珠状のつまみが付いた坏蓋である。212と213は受部にかえりが付いている。ともにかえりの部分が長く伸び、かえりの高さと口縁端部の高さはほぼ等しい。212のつまみは相対的に径が太く、扁平である。これらの製品の時期は７世紀後葉と考えられる。214は全体的に器壁が厚く、半球形を呈する。口縁端部は外面の強いヨコナデ調整によって断面を三角形状に仕上げている。つまみは相対的に径が太く、扁平である。215は全体の開きが直線的になり、口縁端部は214と同様、外面の強いヨコナデ調整によって断面を三角形状に仕上げている。216は天井部が半球形で、口縁部は直線的に開く。口縁端部は外内面の強いヨコナデ調整によって下方に引き出している。217は214～216に比して器高が低くなる。口縁端部は外面の強いヨコナデ調整により外側に開いている。外面には自然釉が厚く付着しており、残存している範囲だけで焼きぶくれが３か所確認されている。218と219は器高が低く、口縁端部は若干折り曲げて、外内面の強いヨコナデ調整によって断面を三角形状に仕上げている。218の天井部には窯印と考えられる「メ」の字状の鋭利な刃物痕が付けられている。214～219の時期は８世紀前葉と考えられる。220は細くて高い宝珠状のつまみが付き、口縁端部は外内面の強いヨコナデ調整によって断面を三角形状に仕上げている。時期は８世紀中葉～後葉と考えられる。

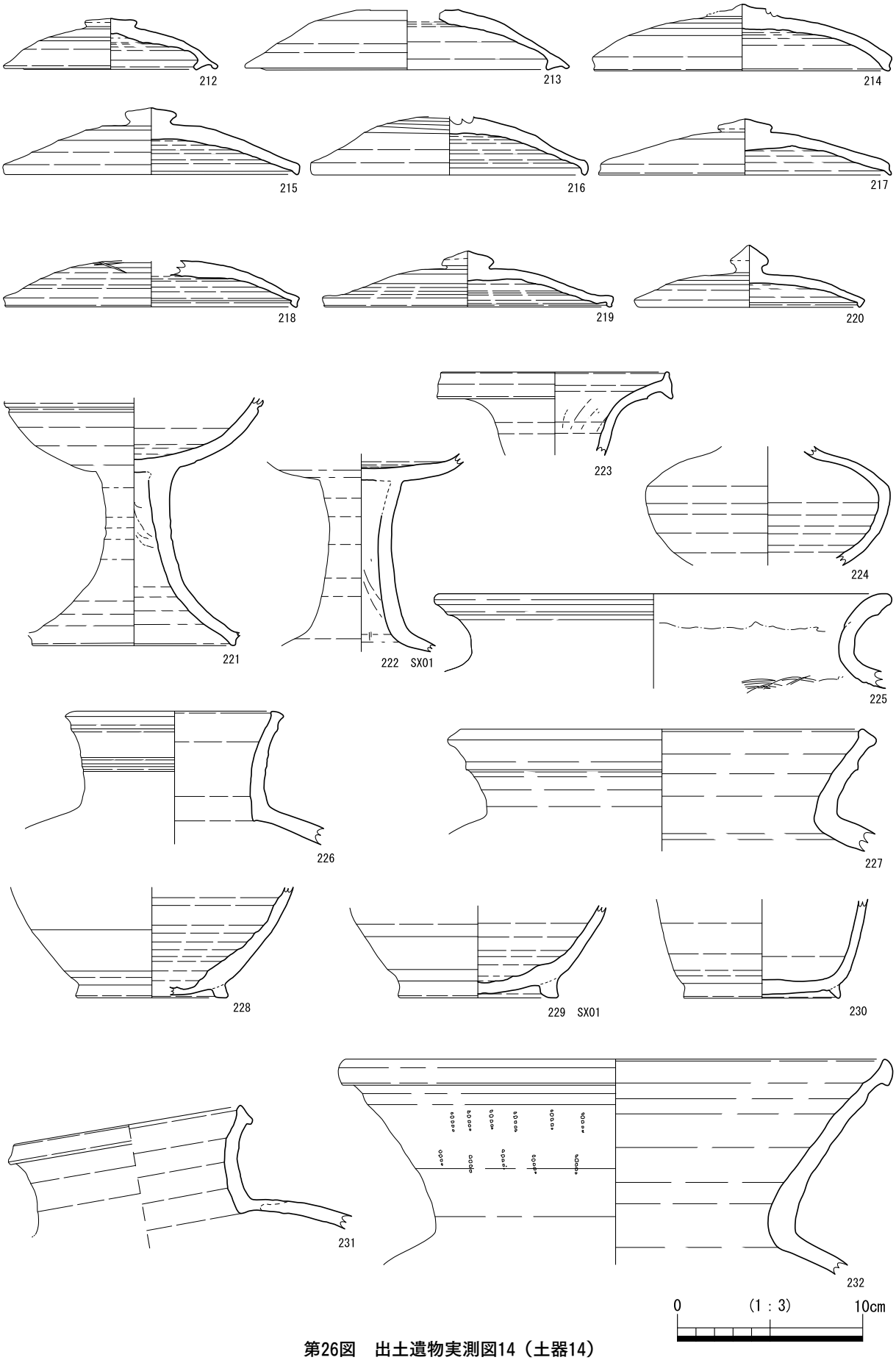
221と222は高坏である。221は埦型の坏部を有する。脚部は細長く、裾部はゆるやかに開く。222は221とほぼ同様の形態の脚部である。いずれも時期は７世紀後葉と考えられる。

223は長頸壺である。口縁部は大きく開き、口縁端部はヨコナデ調整により上下に引き伸ばしている。時期は７世紀後半～８世紀と考えられる。224は丸い胴部である。ハソウである可能性もある。228～230は長頸壺の底部である。228と229は丸い体部に断面四角形の高台を貼り付けている。また、体部下半は回転ヘラケズリ調整を行っている。230は箱形の体部の屈曲部分に断面三角形の高台を貼り付けている。228と229の時期は７世紀後半～８世紀と考えられる。230の時期は９世紀まで下がる可能性がある。

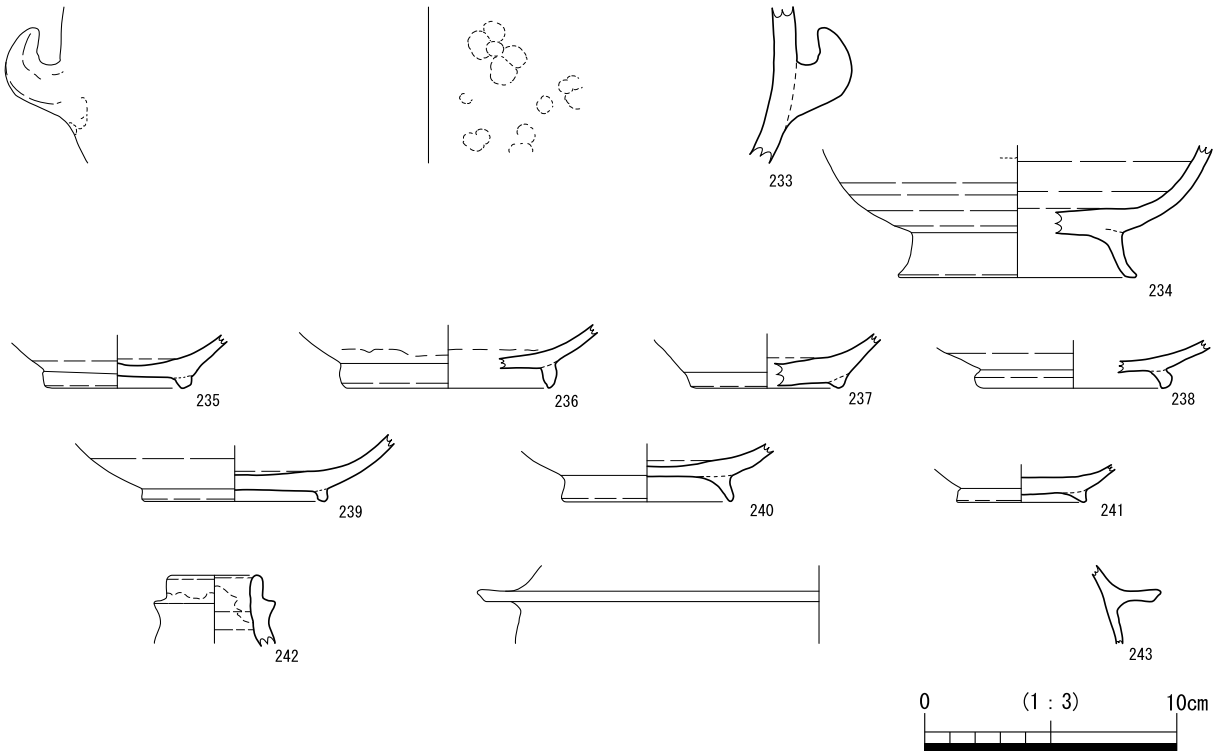
225～227・232は甕である。225は口縁部が短く、大きく外反する。口縁部内面には接合痕が残る。胴部内面には同心円状の当て具痕が確認できる。226は口縁部が細く、直線的に立ち上がる。227は口縁部が「く」の字状に屈曲し、直線的に開く。232は大型の甕で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、直線的



第25図　出土遺物実測図13（土器13）



第26図　出土遺物実測図14（土器14）



第27図　出土遺物実測図15（土器15・陶磁器）

に開く。外面には櫛状工具による列点文が施されている。口縁端部はヨコナデ調整により上下に引き伸ばしている。これらの時期は７世紀後半～８世紀と考えられる。

231は平瓶である。大型の個体になると考えられる。頸部が太く、口縁部が直線的に立ち上がる。口縁端部はヨコナデ調整により上下に引き伸ばしている。時期は７世紀後半～８世紀と考えられる。

233は甑または把手付鉢である。把手は小さく、根元からすぐに上方に曲がり、先端が尖っている。

（５）灰釉陶器

234は深埦である。高台が高く、端部が外側に開く。体部と高台の内外面の一部に釉が付着している。見込み部分には重ね焼きの際の粘土痕が付着している。235～241は埦である。238は三日月形の高台を有している。238と239は見込み部分全体に施釉している。236は漬け掛け施釉を行っている。237・240・241は三角形の高台を有している。235と241は見込み部分に重ね焼き痕が見られる。241は底部に糸切り痕が残る。これらの灰釉陶器の時期はいずれも10世紀前半の折戸53号窯式期の範疇に入るものと考えられる。

（６）陶磁器

242は14世紀の古瀬戸の瓶子である。243は土師質土器の羽釜である。二次焼成を受けている。

第３表　出土遺物計測表（土器）

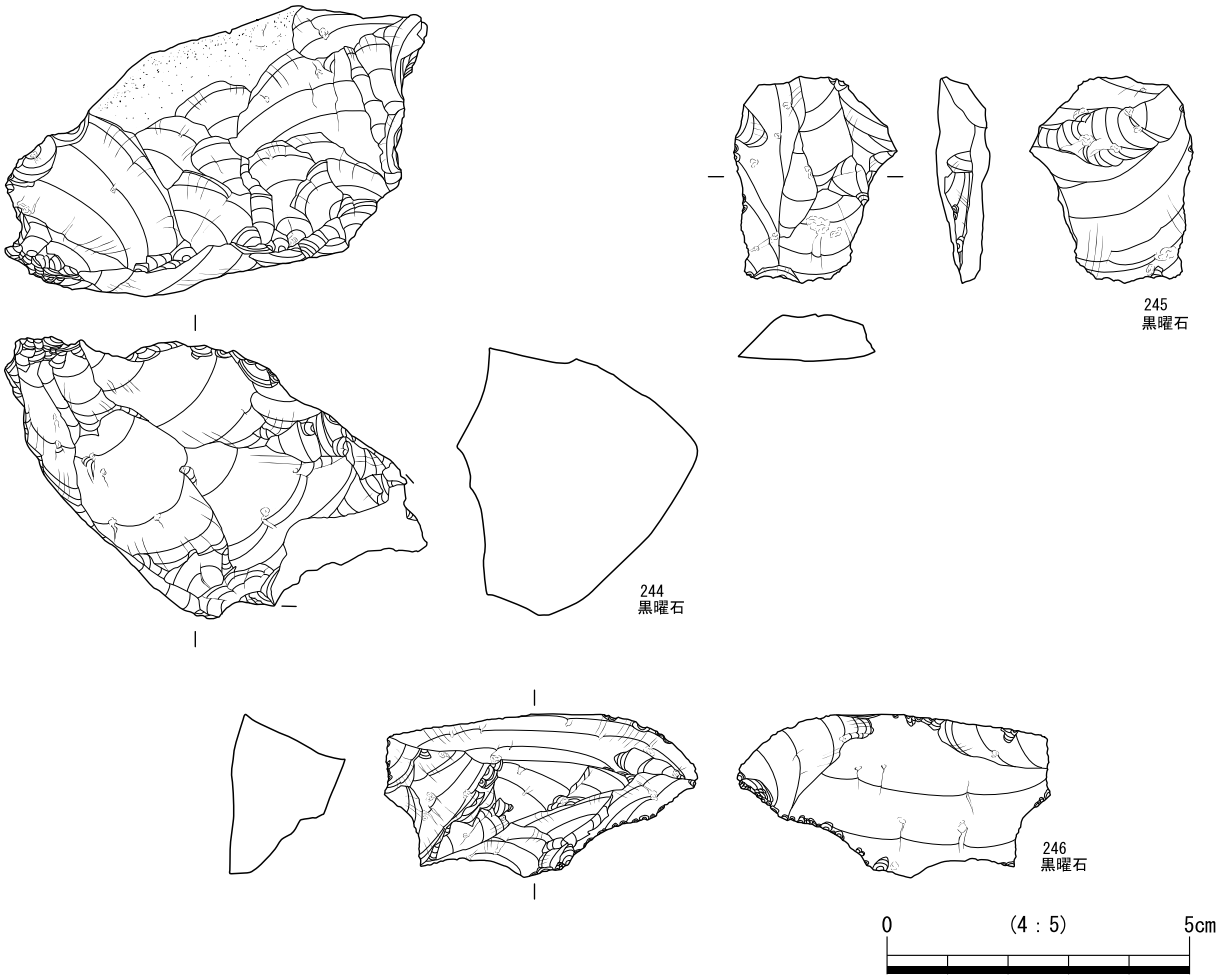
挿図番号	写真図版	グリッド	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調	備考
1	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	縄文土器	鉢	口縁部	破片				(4.8)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
2	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	突起部	破片				(4.7)	10YR 6/2 灰黄褐	平沢型長頸壺
3	5	B３	1		Ⅳ層	弥生土器	壺	頸部～底部	100%		6.7	15.6	(18.3)	10YR 6/4 にぶい黄橙	
4	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	頸部～胴部	40%			(19.7)	(15.7)	10YR 7/1 灰白	
5	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺か甕	底部	50%		(5.2)		(3.4)	7.5YR 5/3 にぶい褐	網代痕が摩滅 雲母含有
6	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺か甕	底部	100%		6.0		(2.1)	10YR 7/2 にぶい黄橙	網代痕　雲母含有
7	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺か甕	底部	60%		7.7		(4.7)	5 YR 5/3　にぶい赤褐	網代痕
8	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺か甕	底部	100%		6.3		(3.7)	7.5YR 7/6 橙	網代痕
9	5	B３	1	東側側溝	－	弥生土器	壺か甕	底部	100%		7.7		(5.0)	10YR 5/1 褐灰	
10	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	底部	100%		4.8		(4.5)	10YR 8/1 灰白	木葉痕
11	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	底部	100%		7.2		(6.6)	10YR 7/2 にぶい黄橙	東遠搬入品か？
12	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	底部	100%		7.5		(2.6)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
13	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	底部	100%		6.8		(2.6)	10YR 7/3 にぶい黄橙	
14	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	底部	100%		6.5		(3.2)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
15	5	B１	1	南側側溝	－	弥生土器	壺	胴部	破片				(8.7)	10YR 5/2 灰黄褐	
16	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	胴部	破片				(6.8)	7.5YR 6/2 灰褐	
17	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	口縁部	40%	(15.2)			(6.1)	5 YR 5/4 にぶい赤褐	
18	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	胴部	破片				(7.2)	10YR 7/4 にぶい橙	
19	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	胴部	破片				(5.7)	7.5YR 5/1 褐灰	
20	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	壺	胴部	破片				(8.0)	2.5YR 6/3 にぶい橙	
21	5	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	蓋？		30%	(13.6)				10YR 8/3 浅黄橙	
22	6	B３	1	SX01	－	弥生土器	甕	口縁部～胴部	10%以下	(30.5)			(11.5)	7.5YR 4/1 褐灰	
23	6	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	甕	口縁部	18%				(4.0)	2.5Y 4/1 黄灰	
24	6	B３	1	東側側溝	－	弥生土器	台付甕	口縁部～頸部	25%	(17.6)			(5.0)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
25	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	台付甕	口縁部～胴部	40%	(19.6)			(12.7)	5 YR 8/2 灰	
26	5	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	台付甕	口縁部～胴部	30%	(18.4)			(12.4)	2.5YR 7/4 淡赤橙	
27	6	B２,３	1	東側側溝	－	弥生土器	台付甕	口縁部～頸部	10%	(23.0)			(4.3)	10YR 8/3 浅黄橙	
28	6	－	1	試掘箇所	－	弥生土器	台付甕	口縁部～頸部	10%以下	(22.0)			(5.8)	7.5YR 6/1 褐灰	
29	6	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	台付甕	脚部	60%		(10.8)		(8.1)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
30	6	B１	1	南側側溝	－	弥生土器	台付甕	脚部	50%		(10.8)		(8.5)	2.5Y 7/2 灰黄	
31	6	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	台付甕	脚部	50%				(7.3)	10YR 7/2 にぶい黄橙	
32	6	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	台付甕	脚部	80%				(5.1)	2.5Y 6/6 橙	
33	6	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	台付鉢か高坏	脚部	95%		7.8		(4.4)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
34	6	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	高坏	坏部	10%以下	(23.8)			(4.8)	7.5YR 8/3 浅黄橙	
35	6	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	弥生土器	高坏	坏部	25%	(21.0)			(6.8)	7.5YR 7/2 明褐灰	関東系か？
36	6	B１	1		Ⅳ層	土師器	壺		完形	9.9	7.7	16.2	18.2	5 YR 7/3 にぶい橙	
37	6	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	口縁部	15%	(23.8)			(8.1)	7.5YR 8/3 浅黄橙	
38	6	B３	1	東側側溝	－	土師器	壺	口縁部～底部	90%	12.9	7.0	19.5	22.6	2.5YR 7/6 橙	小礫含有
39	7	B１	1		Ⅳ層	土師器	壺		完形	14.1	4.9	16.5	17.8	5 YR 7/6 橙	
40	7	B２	1		Ⅳ層	土師器	壺	口縁部～底部	99%	10.1	6.2	13.0	14.8	10YR 7/2 にぶい黄橙	小礫含有
41	7	B２	1		Ⅳ層	土師器	壺	口縁部～底部	98%	13.0	3.6	15.1	15.8	10YR 6/3 にぶい黄橙	
42	7	B２	1		Ⅳ層	土師器	甕		完形	15.3	6.8	19.8	19.4	7.5YR 7/6 橙	
43	6	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(12.4)			(6.4)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
44	7	B１,２,３	1	東側側溝	Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	胴部～底部	40%		(6.1)	(22.6)	(20.3)	5 YR 6/2 灰褐	小礫含有
45	7	B２	1	東側側溝	Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	胴部～底部	40%		(7.6)	(25.6)	(22.6)	5 YR 7/4 にぶい橙	小礫含有
46	7	B２	1	東側側溝	－	土師器	壺	胴部～底部	30%		(9.4)	(25.8)	(17.7)	7.5YR 8/3 浅黄橙	木葉痕 白色粒子含有
47	7	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		9.8		(3.3)	7.5YR 4/2 灰褐色	木葉痕
48	7	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		6.3		(1.9)	2.5YR 6/4 にぶい橙	木葉痕
49	7	B２	1	東側側溝	－	土師器	壺	底部	60%		(8.1)		(4.0)	10YR 7/3 にぶい黄橙	木葉痕
50	7	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	60%		(6.9)		(4.4)	5 YR 6/6 橙	木葉痕
51	7	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		5.0		(3.6)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
52	7	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		5.3		(3.0)	7.5YR 7/3 にぶい橙	
53	8	B２	1		－	土師器	壺	底部	100%		8.7		(2.8)	5 YR 7/4 にぶい橙	木葉痕
54	8	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		7.4		(3.8)	10YR 8/1 灰白	木葉痕 白色粒子含有
55	8	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	100%		11.4		(2.7)	10YR 8/3 浅黄橙	白色粒子含有
56	8	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	底部	70%		(6.4)		(5.7)	10YR 7/4 にぶい橙	白色粒子含有
57	8	B１	1		Ⅳ層	土師器	壺		完形	7.0	4.7	9.3	10.6	2.5Y 6/6 橙	
58	8	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	壺	胴部～底部	50%		8.3	(12.1)	(9.4)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
59	8	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坩	口縁部～底部	80%	(8.8)	3.5	7.9	8.6	10YR 6/4 にぶい黄橙	
60	8	B２	1	東側側溝	Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坩	口縁部～胴部	30%	(10.0)			(7.2)	5 YR 6/6 橙	
61	8	B３	1		Ⅳ層	土師器	鉢	口縁部～底部	80%	10.1	7.3	10.6	8.4	7.5YR 6/6 橙	
62	8	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	(8.8)			(6.1)	5 YR 7/2 明褐	
63	8	B３	1	東側側溝	Ⅳ層	土師器	坩	頸部～底部	100%		3.1	13.4	(9.2)	7.5YR 7/4 にぶい橙	小礫含有
64	8	B３	1		－	土師器	坩	口縁部	100%	10.1			(4.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
65	8	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坩	頸部～底部	100%		2.6	8.5	(6.3)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
66	8	B１	1		Ⅳ層	土師器	坩	頸部～底部	100%		3.4	8.5	(5.7)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
67	9	B１,３,４	1	東・南側側溝	－	土師器	甕	口縁部～底部	70%	(15.6)	7.4	20.7	25.7	7.5YR 4/2 灰褐	木葉痕 小礫含有
68	9	B１	1	南側側溝	－	土師器	甕	口縁部～胴部	50%	19.0		(21.4)	(20.3)	7.5YR 6/3 にぶい橙	小礫含有
69	9	B２	1	東側側溝	－	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(26.0)			(9.2)	10YR 7/4 にぶい黄橙	
70	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	25%	(20.4)			(8.5)	10YR 5/2 灰黄褐	
71	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(18.0)			(5.4)	10YR 6/2 灰褐	
72	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	15%	(25.0)			(3.8)	10YR 4/2 灰黄褐	
73	9	B３	1	SX01	－	土師器	甕	口縁部	15%	(26.0)			(3.3)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
74	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	20%	(19.0)			(6.6)	5 YR 7/3　にぶい赤褐	小礫含有
75	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(19.6)			(9.7)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
76	9	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	(18.0)			(7.7)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
77	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(20.2)			(9.5)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
78	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	(14.8)			(6.9)	5 YR 6/4 にぶい橙	
79	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	7 %	(21.8)			(7.7)	10YR 6/2 灰黄褐	
80	9	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	10%以下	(18.0)			(8.3)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
81	9	B３	1	東側側溝	－	土師器	甕	口縁部～胴部	50%	(12.0)		(13.8)	(8.7)	7.5YR 2/2 黒褐	
82	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	13%	(15.4)			(3.9)	5 YR 5/4 にぶい赤褐	
83	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	15%	(16.0)			(6.3)	2.5YR 5/6 明赤褐	
84	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	10%以下	(24.0)			(4.4)	7.5YR 4/3 褐	
85	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	15%	(25.1)			(5.6)	5 YR 4/6 赤褐	
86	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	15%	(17.8)			(5.9)	5 YR 5/4 にぶい赤褐	
87	9	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	25%	(24.9)			(7.5)	5 YR 5/8 明赤褐	
88	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	9 %	(20.2)			(5.1)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
89	9	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部	10%	(22.0)			(6.1)	7.5YR 5/3 にぶい褐	
90	9	B８	2		9	土師器	塝	口縁部～胴部	20%	(44.6)			(17.2)	2.5Y 7/1 灰白	小礫含有
91	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	塝	口縁部～胴部	10%以下	(45.8)			(8.5)	5 YR 6/6 橙	

第４表　出土遺物計測表（土器・土製品）

挿図番号	写真図版	グリッド	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調	備考
92	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	９％	(41.0)			(6.9)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
93	10	C10	2		15	土師器	埦	口縁部～胴部	８％	(38.0)			(11.0)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
94	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	９％	(37.6)			(4.7)	5 YR 7/4 にぶい橙	
95	10	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(4.6)	5 YR 5/6 明赤褐	
96	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	３％	(39.2)			(5.8)	5 YR 4/1 褐灰	
97	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(5.5)	5 YR 5/4 にぶい赤褐	
98	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	８％	(38.8)			(7.3)	2.5YR 5/6 明赤褐	
99	10	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	破片				(7.7)	2.5YR 5/6 明赤褐	
100	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	９％	(29.4)			(5.2)	2.5YR 4/6 赤褐	
101	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	12%	(38.9)			(8.4)	5 YR 7/4 にぶい橙	
102	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	10%	(44.6)			(7.6)	5 YR 5/3 にぶい赤褐	
103	10	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	10%	(41.6)			(6.6)	5 YR 6/6 橙	
104	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	10%	(43.7)			(4.9)	10YR 6/2 灰黄褐	
105	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	10%	(45.4)			(7.4)	10YR 7/4 にぶい黄褐	
106	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	10%	(43.6)			(4.0)	10YR 5/3 にぶい黄褐	
107	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	15%	(45.8)			(6.5)	10YR 6/4 にぶい黄橙	
108	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	15%	(46.0)			(4.0)	2.5Y 4/1 黄灰	
109	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	15%	(47.6)			(5.0)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
110	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	15%	(45.2)			(9.5)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
111	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(2.0)	7.5YR 6/3 にぶい褐	
112	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(4.8)	5 YR 6/3 にぶい橙	
113	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(6.1)	5 YR 4/3 にぶい赤褐	
114	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(4.6)	10YR 6/1 褐灰	
115	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部～胴部	破片				(7.0)	10YR 7/3 にぶい黄橙	
116	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(7.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	小礫含有
117	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(3.6)	5 YR 6/4 にぶい橙	
118	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	埦	口縁部	破片				(3.9)	7.5YR 4/3 褐	
119	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	10%	(22.9)		(29.0)	(9.6)	5 YR 7/6 橙	
120	10	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	20%	(25.0)		(29.0)	(10.8)	7.5YR 7/3 にぶい橙	
121	10	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏蓋	天井部	－				(2.1)	10YR 7/3 にぶい黄橙	
122	10	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏蓋	天井部	40%				(3.7)	5 YR 5/3 にぶい橙	
123	10	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	95%	14.6	4.8	15.4	5.4	10YR 7/4 にぶい黄橙	木葉痕
124	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	60%	(14.6)	(5.0)		5.3	7.5YR 7/6 橙	木葉痕
125	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	60%	12.9	3.0	13.9	5.4	5 YR 6/6 橙	
126	11	B３	1	SX01	－	土師器	坏	口縁部～体部	25%	(12.6)		(13.4)	(4.0)	2.5YR 6/6 橙	
127	11	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	30%	(12.5)	(3.6)	(13.5)	4.8	7.5YR 5/3 にぶい褐	
128	11	B４	1	東側側溝	Ⅴ層	土師器	坏		完形	14.1	4.2	(14.7)	5.2	10YR 7/4 にぶい黄橙	
129	11	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～体部	10%以下	(12.9)			(4.2)	2.5Y 7/1 灰白	
130	11	B２,３	1	東側側溝	－	土師器	坏	口縁部～底部	20%	(12.9)		(13.1)	(5.1)	2.5YR 8/3 浅黄	
131	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	40%	(12.9)	(4.0)		3.1	7.5YR 6/6 橙	
132	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	体部～底部	100%		7.0		(2.6)	2.5YR 5/6 明赤褐	
133	11	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	25%	(13.2)			(3.5)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
134	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	15%	(14.8)	(8.2)		4.5	2.5YR 6/4 にぶい橙	
135	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	50%	(8.0)	2.5		3.9	10YR 5/3 にぶい黄褐	
136	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～体部	10%	(10.8)			(3.5)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
137	11	B２	1	東側側溝	－	土師器	坏	口縁部～底部	40%	(13.2)	(4.2)		3.6	10YR 5/1 褐灰	
138	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	皿	口縁部～底部	15%	(19.0)	(15.6)		(3.7)	2.5Y 7/1 灰白	
139	11	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	45%	(12.4)	(5.2)		(4.3)	7.5YR 6/4 にぶい橙	糸切痕
140	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	40%	(10.4)	(5.0)		3.7	2.5Y 4/1 黄灰	糸切痕
141	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	口縁部～底部	30%	(11.2)	(6.3)		4.4	10YR 6/4 にぶい黄橙	
142	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	体部～底部	60%		(6.0)		(2.8)	5 YR 7/6 橙	
143	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	体部～底部	100%		(6.3)		(3.1)	7.5YR 7/6 橙	
144	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	体部～底部	40%		(6.2)		(3.1)	7.5YR 7/6 橙	
145	11	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	坏	底部	70%		(6.0)		(1.2)	10YR 5/2 灰黄褐	糸切痕
146	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部～脚部	70%	15.0	11.0		13.1	10YR 6/3 にぶい黄橙	
147	12	B３	1	SX01	－	土師器	高坏	坏部	20%	(16.2)			(4.3)	7.5YR 8/3 浅黄橙	
148	12	B３	1	SX01	－	土師器	高坏	坏部	45%	(21.7)			(7.6)	5 YR 6/6 橙	
149	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	45%	(15.4)			(5.0)	7.5YR 8/4 浅黄橙	
150	12	B３	1	SX01	－	土師器	高坏	坏部	10%以下	(18.2)			(5.5)	5 YR 7/3 にぶい橙	
151	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	20%	(15.6)			(4.4)	7.5YR 8/4 浅黄橙	
152	12	B２	1	東側側溝	Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	35%	(17.4)			(7.4)	7.5YR 8/2 灰	
153	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	15%	(22.6)			(9.0)	5 YR 8/4 淡橙	
154	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	25%	(16.0)			(6.7)	10YR 6/2 灰黄褐	
155	12	B３	1	東側側溝	－	土師器	高坏	坏部	25%	(14.8)			(5.4)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
156	12	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	15%	(18.8)			(5.5)	5 YR 7/4 にぶい橙	
157	12	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	70%	(20.0)			(6.7)	7.5YR 7/6 橙	
158	12	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	10%	(20.4)			(4.7)	7.5YR 6/3 にぶい褐	小礫含有
159	12	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	50%	16.4			(4.6)	7.5YR 6/4 にぶい橙	
160	12	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	10%	(16.0)			(3.1)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
161	12	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	坏部	40%	(20.6)			(7.2)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
162	12	B１	1	東側側溝	－	土師器	高坏	脚部	90%		(9.0)		(5.0)	2.5Y 7/2 灰黄	
163	12	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	70%		16.8		(9.4)	10YR 6/3 にぶい黄橙	
164	13	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	70%		(11.8)		(8.6)	5 YR 7/4 にぶい橙	
165	13	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	60%		(11.8)		(7.6)	10YR 7/3 にぶい黄橙	
166	13	B４	1	東側側溝	－	土師器	高坏	脚部	80%				(8.8)	5 YR 7/4 にぶい橙	
167	13	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	30%		(11.0)		(7.7)	7.5YR 8/3 浅黄橙	
168	13	－	1		表採	土師器	高坏	脚部	40%				(8.9)	10YR 8/3 浅黄橙	
169	13	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	50%		(9.8)		(4.6)	5 YR 7/3 にぶい橙	
170	13	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	90%		(9.0)		(6.4)	10YR 7/4 にぶい黄橙	
171	13	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	40%		(10.4)		(6.2)	7.5YR 7/4 にぶい橙	
172	13	B２	1		－	土師器	高坏	脚部	30%		(10.4)		(5.2)	2.5Y 7/2 灰黄	
173	13	B２	1		－	土師器	高坏	脚部	30%		(11.6)		(5.2)	2.5Y 7/2 灰黄	
174	13	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	高坏	脚部	100%		(10.1)		(6.3)	5 YR 7/4 にぶい橙	
175	13	B２	1	東側側溝	－	土師器	高坏	脚部	40%		(9.5)		(4.0)	5 YR 7/3 にぶい橙	
176	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	手づくね土器	口縁部～底部	25%	(8.2)	(5.0)		4.7	7.5YR 7/4 にぶい橙	
177	13	B２	1	東側側溝	－	土師器	手づくね土器	口縁部～底部	60%	(8.7)	(6.6)	(9.4)	4.7	10YR 6/4 にぶい黄橙	
178	13	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	手づくね土器		完形	5.9	4.9	6.5	4.4	10YR 6/3 にぶい黄橙	
179	13	B２	1		－	土師器	手づくね土器	口縁部～底部	70%	(5.7)	5.1		3.8	5 YR 6/4 にぶい橙	
180	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	手づくね土器	体部～底部	25%		(5.8)		(3.5)	10YR 6/2 灰黄褐	
181	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師器	手づくね土器	体部～底部	45%		(5.0)		(3.5)	5 YR 6/6 橙	
182	14	B２	1	東側側溝	－	土師器	手づくね土器	口縁部～底部	70%	(6.6)	(5.2)	6.7	6.6	5 YR 5/6 明赤褐	
183	14	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	土製品	土製円板		－		7.0			7.5YR 7/3 にぶい橙	
184	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	20%	(10.4)	(6.4)	(12.5)	3.1	10YR 4/1 褐灰	
185	14	B２,３	1	東側側溝	－	須恵器	坏身	口縁部～底部	95%	12.1	4.2	14.7	4.0	N 6 / 灰	
186	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～体部	10%	(12.0)		(14.2)	1.7	10Y 6/1 灰	
187	14	B２,３	1	東側側溝	－	須恵器	坏身	口縁部～体部	10%	(14.0)		(16.5)	2.7	2.5GY 6/1 オリーブ灰	

第５表　出土遺物計測表（土器・陶磁器）

挿図番号	写真図版	グリッド	調査区	遺構	層位	種別	器種	部位	残存率	口径(cm)	底径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調	備考
188	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～体部	10%	(13.1)			(3.9)	2.5Y 6/1 黄灰	
189	14	B３	1	SX01	－	須恵器	坏身	口縁部～体部	25%	(12.0)			3.9	7.5Y 6/1 灰	
190	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～体部	15%	(11.9)			(3.6)	N５/ 灰	
191	14	B２	1	東側側溝	－	須恵器	坏身	口縁部～底部	15%	(14.6)	(8.4)		4.1	N6/1 灰	
192	14	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	(10.0)	(7.4)		3.7	10Y 6/1 灰	
193	14	B２,３	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	30%	(15.5)	(10.4)		4.2	2.5Y 6/1 黄灰	
194	14	B２	1	東側側溝	－	須恵器	坏身	口縁部～底部	40%	(14.0)	(9.2)		4.1	7.5Y 6/1 灰	
195	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	(15.6)	(10.2)		3.6	2.5Y 7/1 灰白	
196	14	B２	1	SX01	－	須恵器	坏身	体部～底部	45%		(13.0)		(2.7)	2.5Y 7/2 灰黄	
197	14	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	体部～底部	40%		(10.2)		(3.5)	５Y 7/1 灰白	糸切痕
198	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	15%	(13.8)	(10.1)		3.7	５GY 6/1 オリーブ灰	
199	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	95%	(12.7)	(10.9)		4.3	7.5Y 7/1 灰白	糸切痕
200	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	(13.8)	(9.8)		3.2	10Y 5/1 灰	
201	14	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	10%	(12.8)	(10.4)		3.2	５Y 6/1 灰	
202	14	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏身	口縁部～底部	20%	(13.4)	(10.6)		3.0	7.5Y 6/1 灰	
203	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	30%	(14.4)			3.5	N５/ 灰	
204	15	B３	1	東側側溝	－	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	45%	(14.6)			4.6	N６/ 灰	
205	15	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	20%	(14.8)			3.4	N６/ 灰	外面自然釉
206	15	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～体部	10%	(12.4)			(3.3)	N５/ 灰	
207	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	20%	(9.8)			(3.4)	N５/ 灰	
208	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	20%	(9.7)			3.0	N５/ 灰	
209	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	40%	(9.8)			(3.7)	N６/ 灰	
210	15	B３	1	SX01	－	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(9.8)			3.3	N５/ 灰	窯印
211	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(8.8)			(3.4)	7.5Y 5/1 灰	
212	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(9.4)		(11.6)	2.8	2.5Y 6/1 黄灰	
213	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(15.3)		(17.6)	(2.7)	2.5Y 6/1 黄灰	外面自然釉
214	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	30%	(15.8)		(16.2)	3.6	N５/ 灰	
215	15	B３	1		－	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	30%	(15.8)		(16.0)	3.6	N５/ 灰	
216	15	B２	1	東側側溝	－	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	70%	(14.6)		(15.0)	(3.4)	５Y 7/1 灰白	
217	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(15.7)			3.0	7.5Y 5/2 灰オリーブ	外面自然釉 焼きぶくれ
218	15	B２	1	東側側溝	－	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	20%	(15.6)		(16.0)	(2.5)	2.5Y 7/2 灰黄	窯印
219	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(15.3)		(16.3)	3.0	N５/ 灰	
220	15	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	25%	(11.9)		(12.4)	3.3	N６/ 灰	
221	15	C９	2		9	須恵器	高坏	坏部～脚部	60%		(10.8)		(13.4)	N６/ 灰	
222	15	B３	1	SX01	－	須恵器	高坏	坏部～脚部	40%				(10.7)	N７/ 灰白	
223	16	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	長頸壺	口縁部～頸部	35%	(12.2)			(4.5)	N７/ 灰白	
224	16	B２,３	1	東側側溝	－	須恵器	長頸壺？	胴部	－			(13.2)	(6.4)	N６/ 灰	
225	16	B２,３	1	東側側溝	－	須恵器	甕	口縁部～頸部	20%	(24.2)			(5.1)	7.5Y 4/3 暗オリーブ	
226	16	C10	2		15	須恵器	甕	口縁部～頸部	25%	(10.6)			(7.2)	7.5Y 4/2 灰オリーブ	外面自然釉
227	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	甕	口縁部～頸部	20%	(21.7)			(5.7)	５PB 7/1 明青灰	
228	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	長頸壺	胴部～底部	20%		(8.0)		(5.9)	N７/ 灰白	
229	16	B３	1	SX01	－	須恵器	長頸壺	胴部～底部	100%		(8.4)		(4.8)	N７/ 灰白	
230	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	長頸壺	胴部～底部	30%		(8.3)		(5.3)	10Y 5/1 灰	
231	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	平瓶	口縁部～頸部	30%	(12.4)			(6.9)	7.5Y 5/3灰オリーブ	外面自然釉
232	16	B１	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	甕	口縁部～頸部	15%	(19.1)			(11.1)	2.5GY 5/1 オリーブ灰	
233	16	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	須恵器	甑	把手	破片			(33.6)	(6.2)	7.5Y 5/1	
234	16	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	深埦	底部	20%		(9.3)		(5.2)	５Y 6/1 灰（内面） ５Y 6/1 灰（外面）	
235	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	100%		(5.2)		(2.1)	５Y 7/1 灰白（内面） ５Y 7/1 灰白（外面）	
236	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	20%		(8.0)		(2.5)	５Y 7/1 灰白（内面） ５Y 7/1 灰白（外面）	
237	16	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	20%		(5.6)		(2.2)	N５/ 灰（内面） N５/ 灰（外面）	
238	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	25%		(7.1)		(1.9)	５Y 6/1 灰（内面） ５Y 6/1 灰（外面）	
239	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	25%		(7.1)		(2.7)	５Y 6/2 灰オリーブ（内面） ５Y 7/1 灰白（外面）	
240	16	B３	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	埦	底部	30%		(6.6)		(2.3)	2.5Y 8/1 灰白（内面） 2.5Y 8/1 灰白（外面）	
241	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	灰釉陶器	小埦	底部	100%		(4.9)		1.5	５Y 6/1 灰（内面） ５Y 6/1 灰（外面）	
242	16	B２	1		Ⅳ～Ⅴ層	陶磁器	瓶子	口縁部	30%	(3.4)			(2.7)	10Y 8/1 灰白（内面） 10Y 7/2 灰白（外面）	古瀬戸
243	16	B１,２	1		Ⅳ～Ⅴ層	土師質土器	羽釜	胴部	10%以下			(27.1)	(3.1)	10Y 5/1 灰（内面） 2.5Y 8/3 淡黄（外面）	



第28図　出土遺物実測図16（石器）

2　石器（第28図244～246　図版16）

３点を図示した。石材はいずれも黒曜石である。

244は石核である。礫を分割し、原礫面に調整剥離を施してから、90度転位して剥片剥離を行っている。245と246は剥片である。いずれも打面を折損している。

第６表　出土遺物計測表（石器）

挿図番号	写真図版	グリッド	調査区	遺構	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材
244	16	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	石核	7.0	(4.6)	4.1	110.5	黒曜石
245	16	B1	1		Ⅳ～Ⅴ層	剥片	3.4	2.7	0.9	6.9	黒曜石
246	16	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	剥片	2.7	5.2	1.9	20.4	黒曜石

３　木製品（第29図247～第41図325　第６表　図版17～28）

（１）容器

247は刳物の槽である。小型の楕円形を呈し、平底である。木取りは横木取り柾目である。外面を削り出し、内面を刳り抜いて作られている。器面全体に刃物痕が見られる。

（２）調度

248は脚を組み合わせる形状の案の天板と考えられる。長軸が現存で74.6cmであり、木取りは板目である。木裏面を表にして使用したものと想定される。左側面の角を手斧で楕円形状に切り落している。小口は手斧で真直ぐ平坦に切断している。右側縁ともう一方の小口は折損している。左側縁は裏面で屈曲し、浅い刳物のような形状を呈している。表面には刃物痕が見られる。裏面の小口から３cm下の位置には、幅３cm、深さ１cmを測る溝を彫りこんでいる。裏面にはほぼ全面に長軸方向に削った幅３cm程の手斧痕が見られる。小口と溝の間は長軸に逆らって削っており、幅1.5cm程の手斧痕が見られる。この結果、小口部分の厚さは３cm程となり、溝との段差は５mm程となる。溝の直下５㎝の範囲は、手斧で角を斜めに削ぎ落として厚みを１cm程薄くしている。溝には非常に細かい手斧痕が見られる。

（３）建築部材

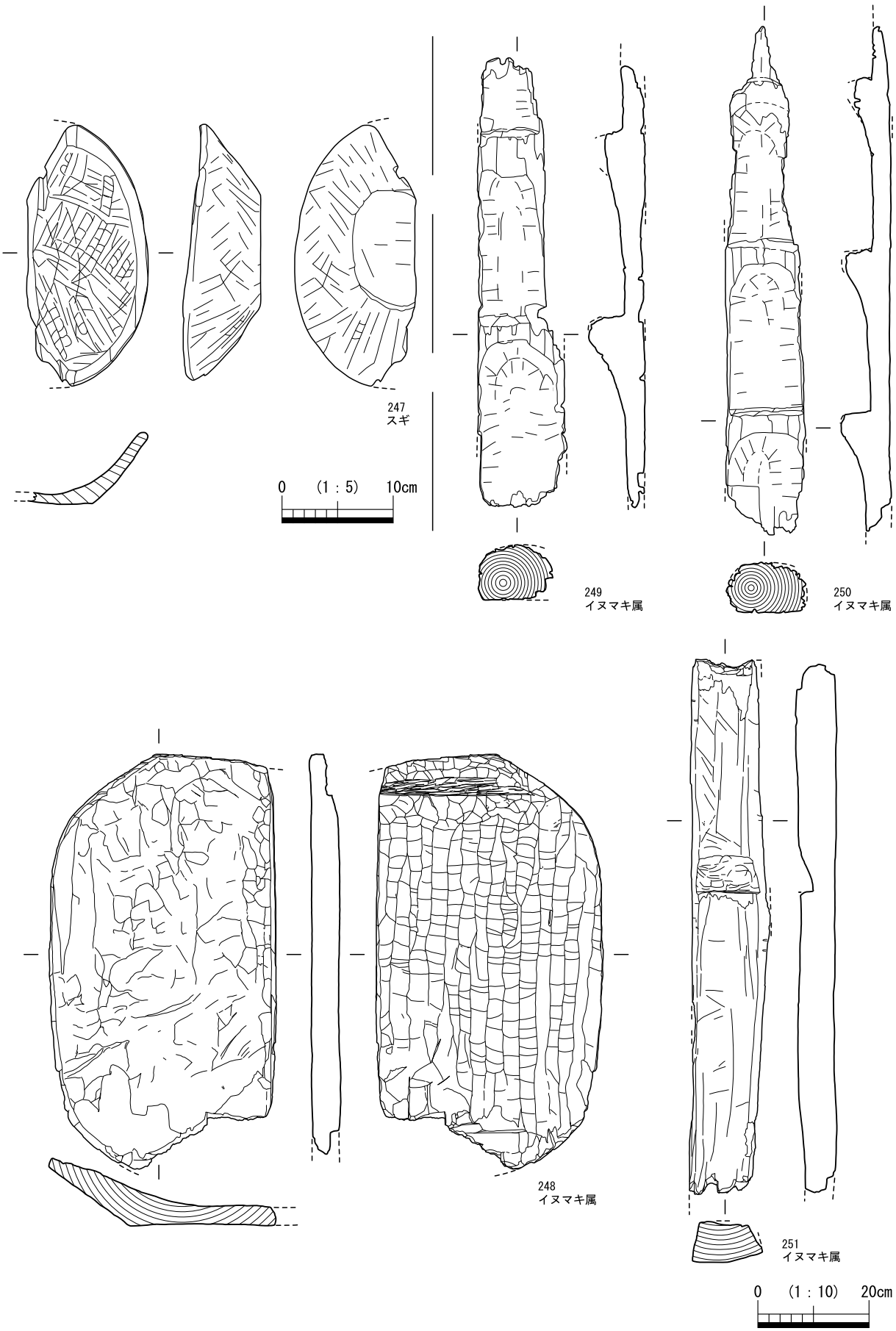
ア　梯子

249と250は芯持材を素材としている。249は階段部が２段残る。裏面を平らに削り、左側縁を粗く割っている。階段の間隔は残存値で34cm、足かけは７cmである。階段部の厚みは10cm、板部の厚みは3.5cmである。階段部の間を削った部分には幅２～３cm程の刃物痕が見られる。裏面に刃物痕は見られない。上端部から右側縁部にかけては、足かけも含めて折損している。下端部も折損している。250は階段部が３段残る。表裏面を平らに、左側縁を粗く割っている。階段の間隔は、上段が残存値で31cm、下段は29cm、足かけは５㎝である。階段部の厚みは９㎝、板部の厚みは3.5cmである。階段部の間を削った部分には幅２～３cm程の刃物痕が見られる。裏面に刃物痕は見られない。上端部から右側縁部にかけては、足かけも含めて腐食が著しい。下端部は折損している。

251はミカン割りの角材を素材としている。木裏面に階段部が１段残る。上端部から足かけまでの長さが現存値で41cmであることから、階段の間隔は長かったものと想定される。足かけは2.5cmと非常に浅い。階段部の厚みは6.5cm、板部の厚みは４㎝である。階段部の間を削った部分は、長さが6.5cmと短く、幅２cm程の工具痕が多く見られる。上端部は二次加工の際に手斧で粗く切断している。下端部は折損している。

イ　柱

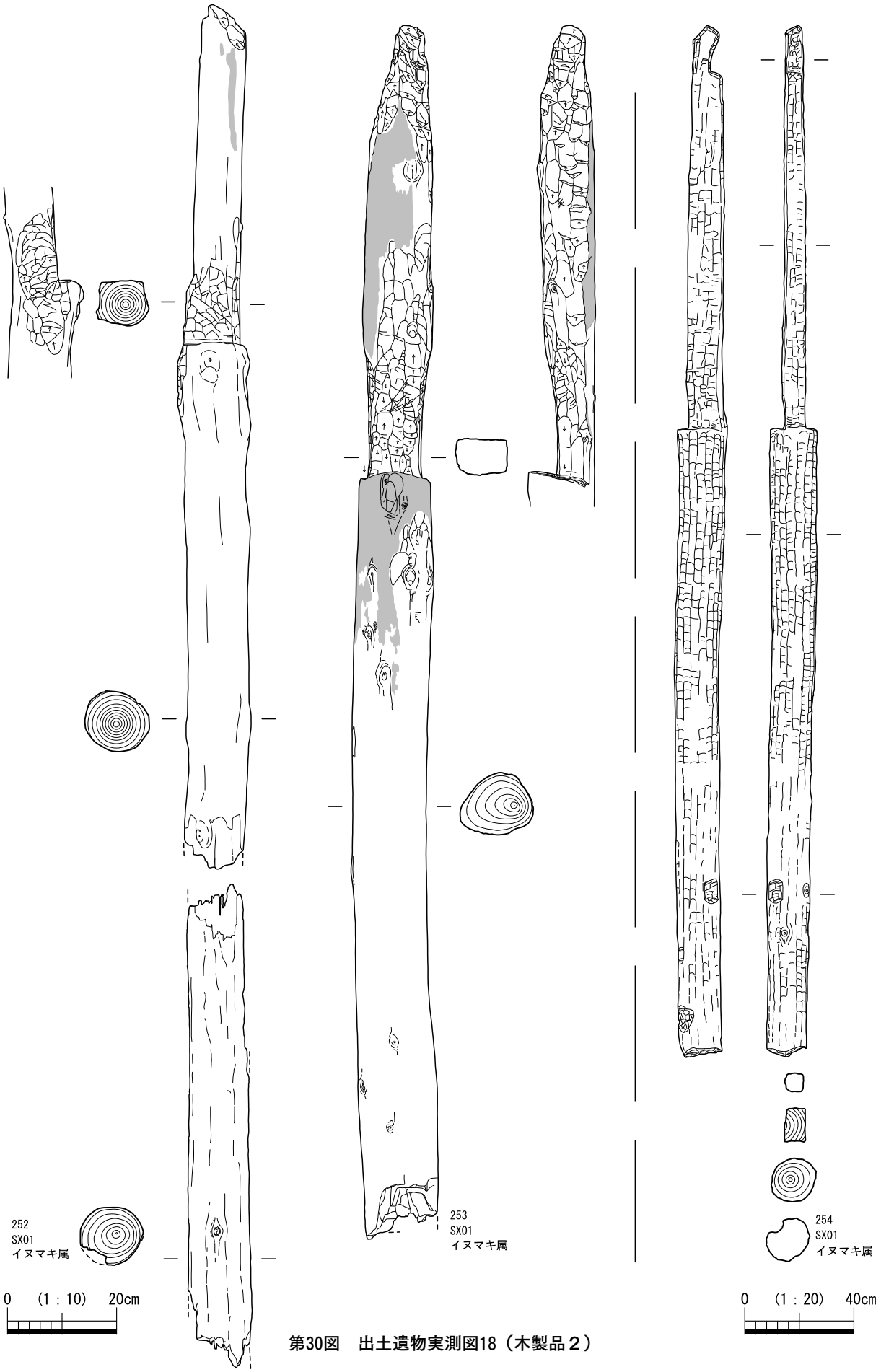
252～259は上半部全体もしくは上半部と下半部の境に方形の加工を施した柱である。加工を施した範囲の比率は個体によって異なるが、ここでは加工を施した箇所から上を上半部、下を下半部と呼称することにする。252は全長が推定で247.4cm、丸太の最大径は13.4cmである。下半部の長さは推定で184.8cmである。節から上が急激に細くなる部分に断面が長方形を呈する階段状の加工を施している。長方形の断面の厚さは８㎝×７cmである。加工の範囲は37cmであり、これより上部は再度未加工となる。加工部分には幅３cm程の粗い手斧痕が顕著に見られる。上半部には部分的に樹皮が付着している。上端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、２方向から手斧で粗くＶ字状に切断して杭の先端加工を施している。下端部は折損している。253は芯の位置が片寄った断面楕円形の丸太材を用いている。全長は222.5cm、丸太の最大径は14.1cmである。下端部から139cmの位置に断面が長方形を呈する階段状の



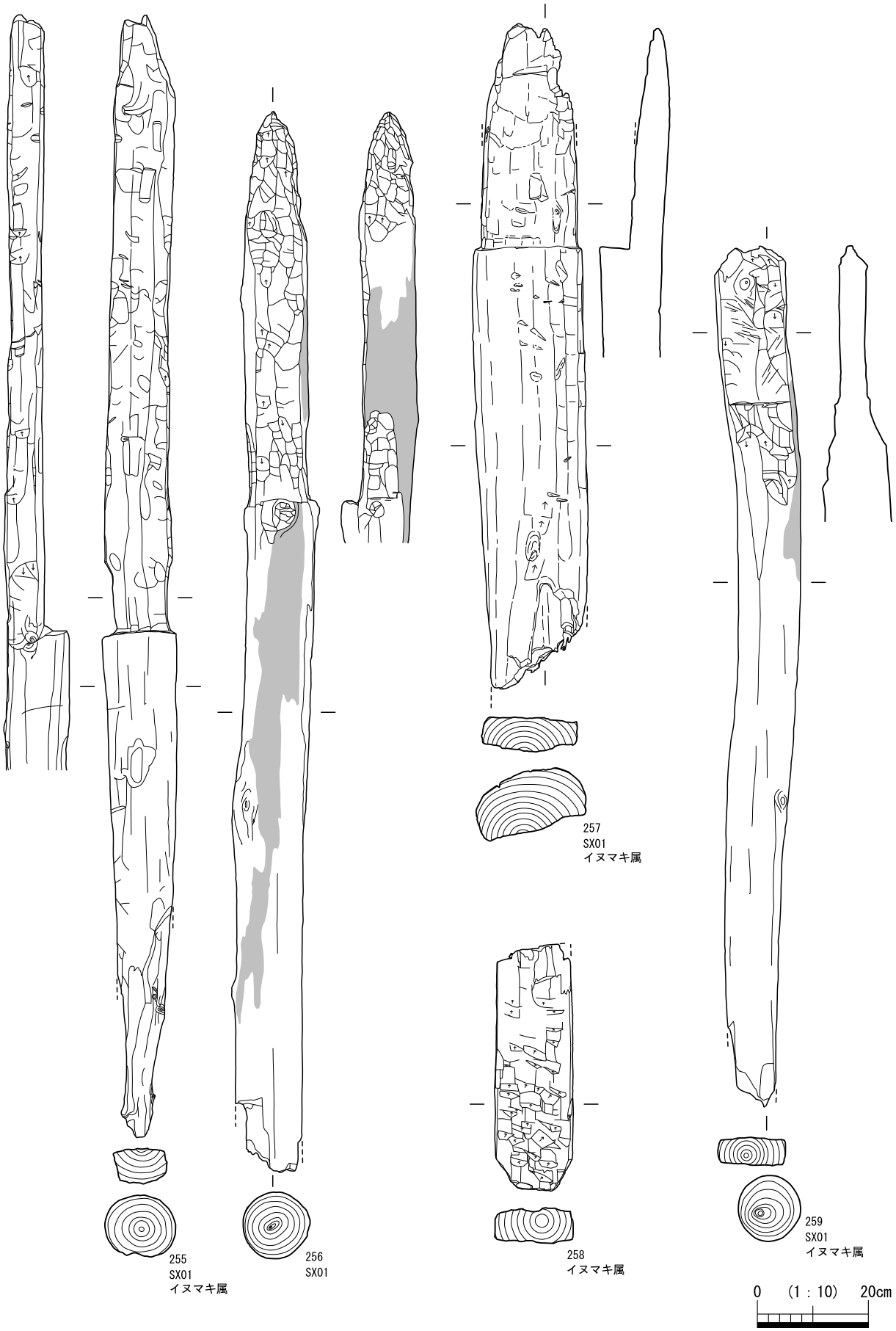
第29図　出土遺物実測図17（木製品１）

加工を施している。長方形の断面は９㎝×６㎝を測る。加工の範囲は27cmであり、これより上部は加工が少なくなり、一部未加工の部分も見られる。上半部と階段状の加工直下の丸太部分に樹皮が付着している。上端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。下端部は粗く切断している。254は本遺跡で出土した柱の中で唯一完存する個体である。全長は378cm、丸太の最大径は17cmである。下端部から226cmの位置に、両側面から加工を施して上半部を板状に仕上げている。上半部の断面の厚さは８㎝×12cmである。上半部、下半部とも全面に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が顕著に見られる。上端部は右側縁に垂木状の抉りが彫りこまれている。下端部から55cm上の右側縁には縦９㎝×横５㎝の方形で深さ1.5cm、40cm上の左側縁には縦６㎝×横4.5cmの方形で深さ1.5cm、５㎝上の左側縁には10cm×10cmの不整形で深さ３cmを測る未貫通の孔が確認され、それぞれ幅２cm程の工具痕が多く見られる。下端部は４方向から手斧を入れて切断している。255は全長が202.2cm、丸太の最大径は13.4cmである。下半部から91cmの位置から上を階段状に加工し、上半部を板状に仕上げている。上半部の断面の厚さは11cm×6.5cmである。段差付近15cmの範囲は両側面から抉りを入れており、この部分の断面の厚さは9.5cm×6.5cmである。上半部は全面に幅３cm程の粗い手斧痕が見られる。上端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を手斧で粗く斜めに削ってから、左側縁から手斧を途中まで真直ぐ刃を入れ、割り折りをしている。下端部は腐食のため加工方法は不明である。256は全長が191cm、丸太の最大径は13.8cmである。節の部分に当たる下端部から121cmの位置に、階段状の加工を施している。段差は３cm、段差付近の径は12cmである。段差付近16cmの範囲は両側面から抉りを入れている。段差の加工と抉りの部分以外は未加工で、一部樹皮が付着している。上端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。下端部は折損している。257は半割の丸太材を素材としている。最大幅が20.8cmであることから、丸太材の柱より太い用材が使用されていたことが窺える。下端部から91cmの位置から上は、木表面に階段状の加工を施し、上半部を板状に仕上げている。上半部の断面の厚さは17cm×６cmである。上半部は全体に刃物痕が見られる。下半部は右側縁に幅２cm程の工具痕が見られる。上下端部は折損している。258は段差を持つ柱の上半部を切断したものと想定される芯持材の板材である。表面には幅３～４㎝程の短い単位の粗い手斧痕が見られる。加工の方向はほとんどが長軸方向だが、一部斜方向のものも見られる。上端部は手斧で粗く切断している。下端部は手斧で真直ぐ平坦に切断してから、両側縁を斜めに切断している。259は芯の位置が片寄った丸太材を用いている。全長は155cm、丸太の最大径は12.8cmである。下端部から127cmの位置に表裏両面から加工を施して上半部を板状に仕上げている。上半部の断面の厚さは12cm×５cmである。上半部には幅3.5cm程の手斧痕が見られる。下半部の段差付近は、表面は18cm、裏面は９㎝の範囲を手斧で粗く斜めに削り落している。下半部は一部樹皮が付着している。上端部は表裏両面から手斧で粗く切断し、断面を尖らせている。下端部は折損している。

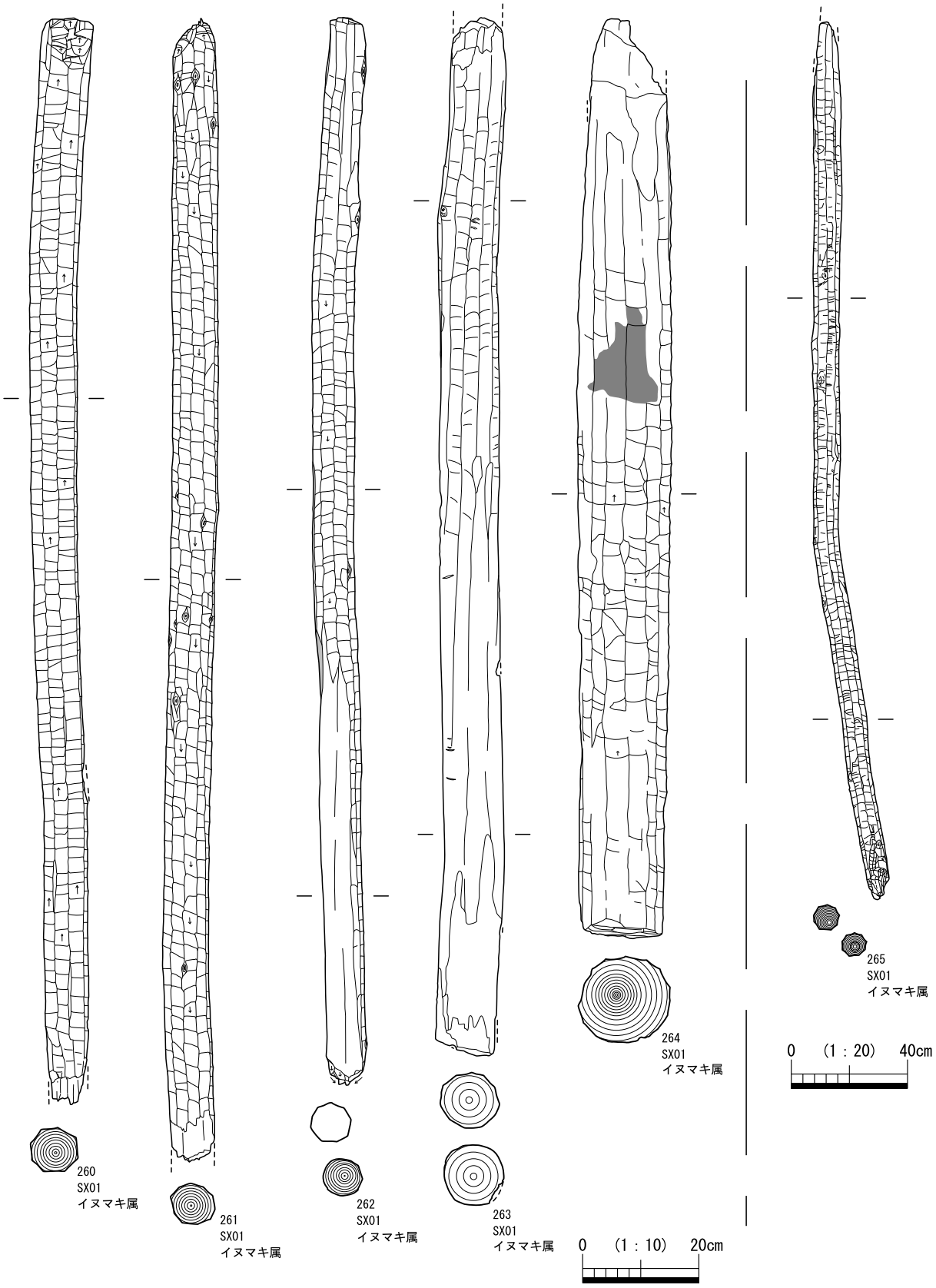
260～265は丸太材のほぼ全面に調整痕が見られる柱である。260は長さ187cm、丸太の最大径は9.1cmである。全面に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られ、断面形は八角形を呈している。上端部は２方向から手斧でＶ字状に切断し、下端部は折損している。261は長さ196.9cm、丸太の最大径は7.6cmである。全面に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られ、断面形は十角形を呈している。上端部は、直径の2/3は２方向から手斧でＶ字状に切断し、残り1/3は真直ぐ平坦に切断している。下端部は折損している。262は長さ183.8cm、丸太の最大径は７cmである。上半部2/3は全面に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られ、断面形は九角形を呈している。下半部1/3は右側縁のみに工具痕が見られ、その他の範囲は未加工である。上端部は真直ぐ平坦に切断しているが、腐食のため加工方法は不明である。下端部は２方向から手斧で途中まで切断し、割り折りをしている。263は長さ176.8cm、丸太の最大径は12.2cmである。上半部1/2は全面に長軸方向に削った幅2.5cm程の工具痕が見られるが、



第30図　出土遺物実測図18（木製品２）



第31図　出土遺物実測図19（木製品３）



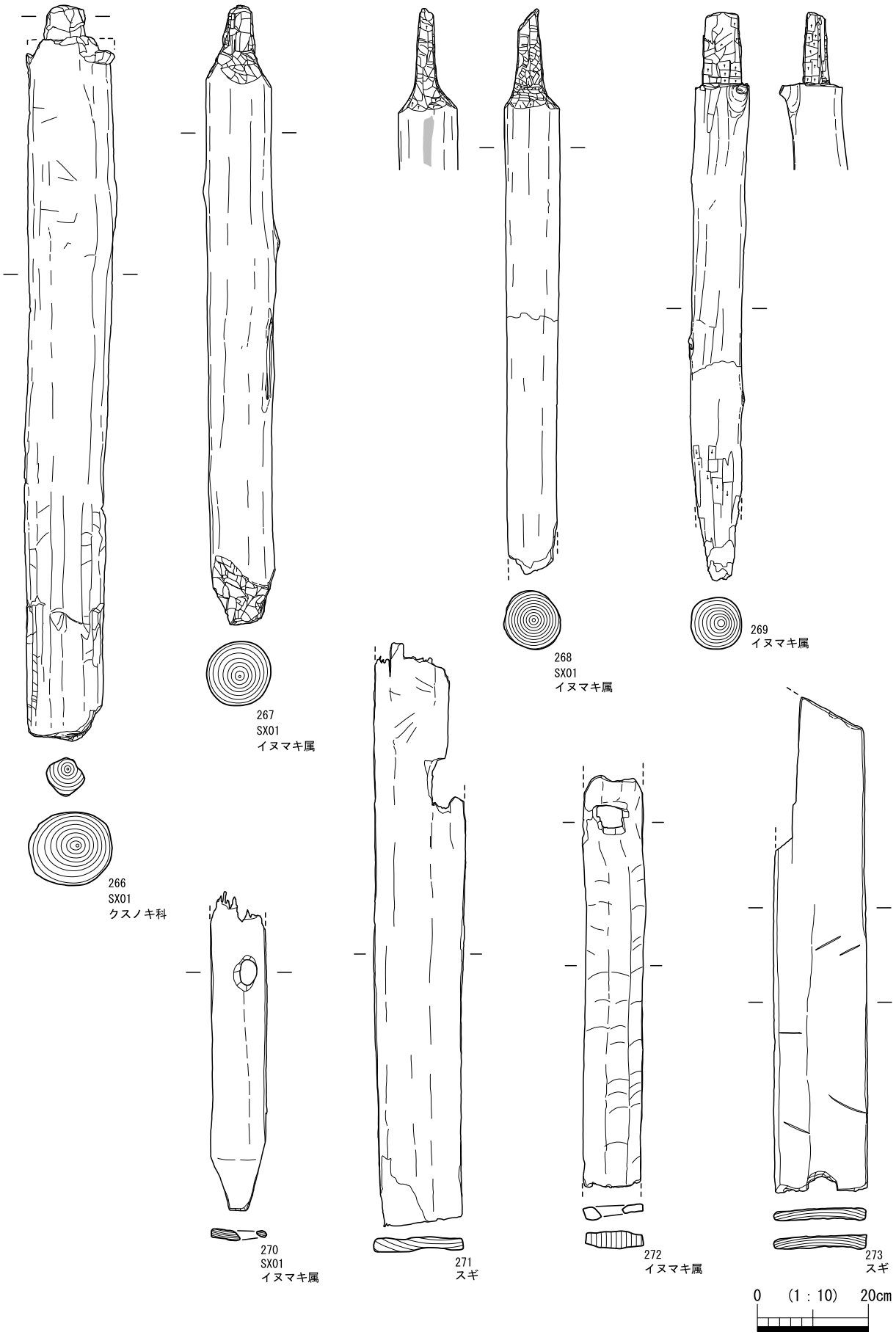
第32図　出土遺物実測図20（木製品４）

下半部1/2は未加工である。上端部は折損している。下端部は真直ぐ平坦に切断しているが、腐食のため加工方法は不明である。264は長さ158.2cm、丸太の最大径は16.2cmである。ほぼ全面に長軸方向に削った幅3.5cm程の工具痕が見られるが、上半部はやや不鮮明である。柱の中央部は一部炭化している箇所が見られる。上端部は折損している。下端部は幅５㎝程の手斧で真直ぐ平坦に切断している。265は長さ302.2cm、丸太の最大径は9.7cmである。全面に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られ、断面形は九角形を呈している。上端部は折損している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、手斧で斜めに切断している。

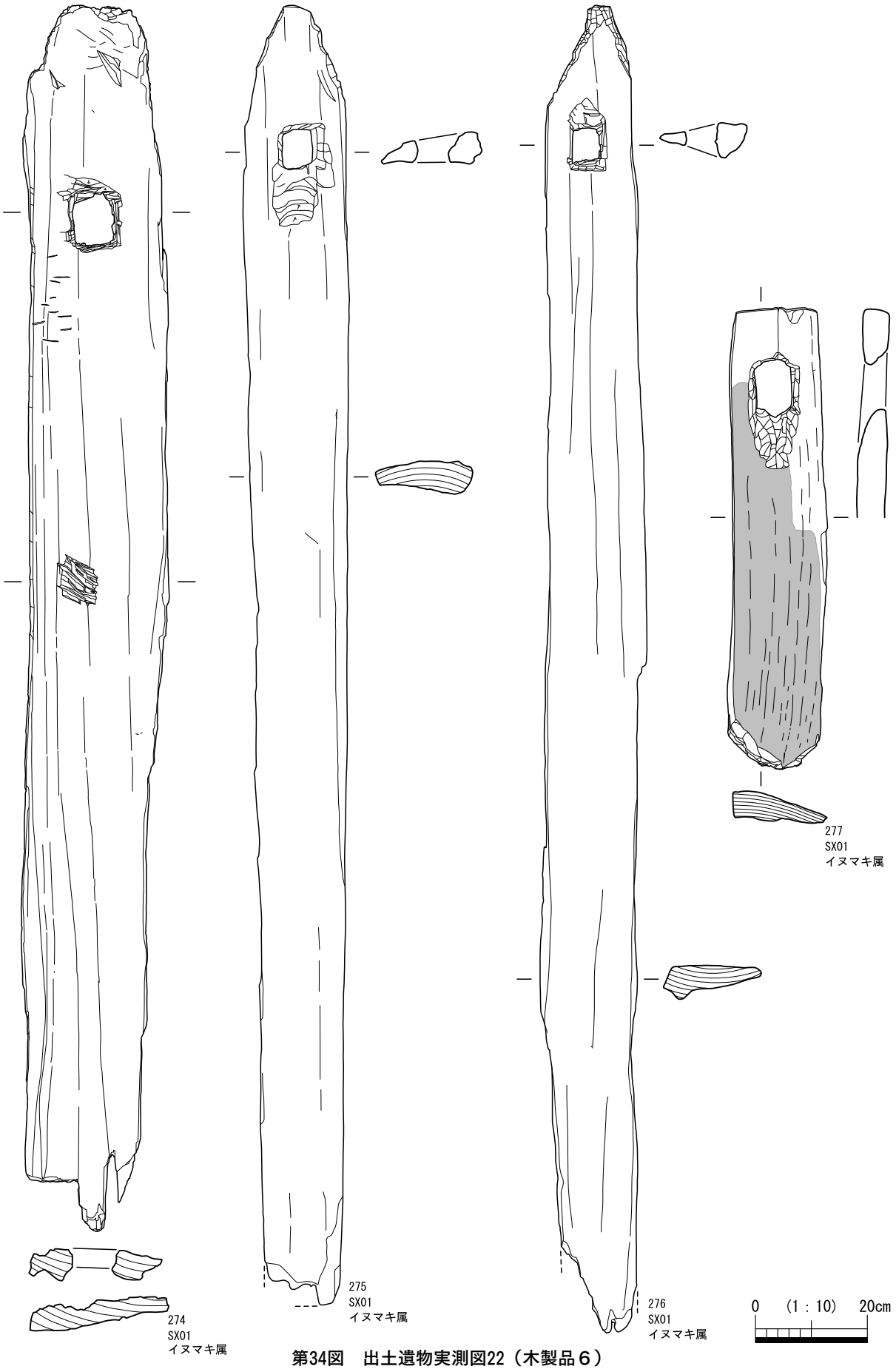
266～269は丸太材の先端部に枘状の突起を作り出した柱である。266は長さ132.6cm、丸太の最大径は16.7cmである。先端に断面の厚さが６㎝×５cmを測る方形の突起を作り出している。突起の長さは６㎝である。段差の部分は腐食が著しく、欠損しているため加工方法は不明であるが、４方向から垂直に刃を入れて削ったものと推定される。柱の下半部1/3には長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が部分的に見られる。下端部は右側縁を手斧で斜めに、その他の部分は平坦に切断している。267は長さ111.7cm、丸太の最大径は13.8cmである。４方向から突起を削り出し、突起の断面は方形を呈し、長さは９㎝である。突起の部分には明瞭な刃物痕が見られる。上端部は真直ぐ平坦に切断している。下端部は真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。268は年輪が密に詰まった丸太材を用いている。長さ101.9cm、丸太の最大径は10.2cmである。４方向から突起を削り出し、突起の断面は５㎝×3.5cmの方形を呈し、長さは14㎝である。突起の部分には細かく明瞭な刃物痕が見られる。丸太部分には一部樹皮が付着している。上端部は左側縁から手斧を入れて、斜めに切断している。下端部は折損している。269は長さ102.4cm、丸太の最大径は9.8cmである。節の部分に表裏両面から階段状の加工を施して、板状の突起を作り出している。突起の断面の厚さは７cm×３cmを測り、長さは13cmである。突起には長軸方向に削った幅1.5cm程の工具痕が見られ、この工具痕は側面にも確認できる。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下端部は杭として使用した際の二次加工の痕跡が見られるが、腐食が著しく、加工方法は不明である。

ウ　梁または桁と考えられる建築材

270～277は枘孔または抉りのある板材である。270～273は厚さ2.1cm～3.3cmを測る薄手の板材である。270は割り剥した状態の腐食の進んだ板目材で、下端部から41cm上のやや右寄りの位置に枘孔がある。枘孔は現状では縦4.5cm×横2.5cmの楕円形である。上端部は折損している。下端部は真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を斜めに削っている。271も割り剥した状態の腐食の進んだ板目材で、下端部から75cm上の右寄りの位置に枘孔がある。枘孔は欠損しているが、縦8.5cm×横３cmの方形と推定される。木表面の下端部付近は炭化している。上端部は折損している。下端部は真直ぐ平坦に切断している。272は柾目材で、上端部から５㎝下に枘孔がある。枘孔は４㎝角の方形であるが、不整形である。片面全体に長軸方向に削った幅3.5cm程の工具痕が見られる。上下端部は折損している。273は割り剥した状態の板目材である。枘孔の位置で二次加工を施したものと考えられ、下端部に幅５㎝、深さ２cm程の楕円形の抉りがある。上端部は右側縁から斜めに切断している。下端部は手斧で粗く切断している。274～277は厚さ4.6cm～6.8cmを測る割り剥した状態の厚手の板目材で、割材のまま使用されている。274は上端部から33cm下に枘孔がある。枘孔は縦９㎝×横７cmの方形である。枘孔の周囲には非常に細かい刃物痕が見られる。木裏面には上端部から98cm下のやや左寄りの位置に未貫通の孔があり、縦８㎝×横７cmの方形の範囲に非常に細かい刃物痕が密集している。上端部は腐食のため加工方法は不明である。下端部は左側縁から手斧を途中まで真直ぐ刃を入れ、割り折りをしている。275は上端部から23cm下に枘孔がある。枘孔は縦７cm×横5.5cmの方形である。木表



第33図　出土遺物実測図21（木製品５）



第34図　出土遺物実測図22（木製品６）

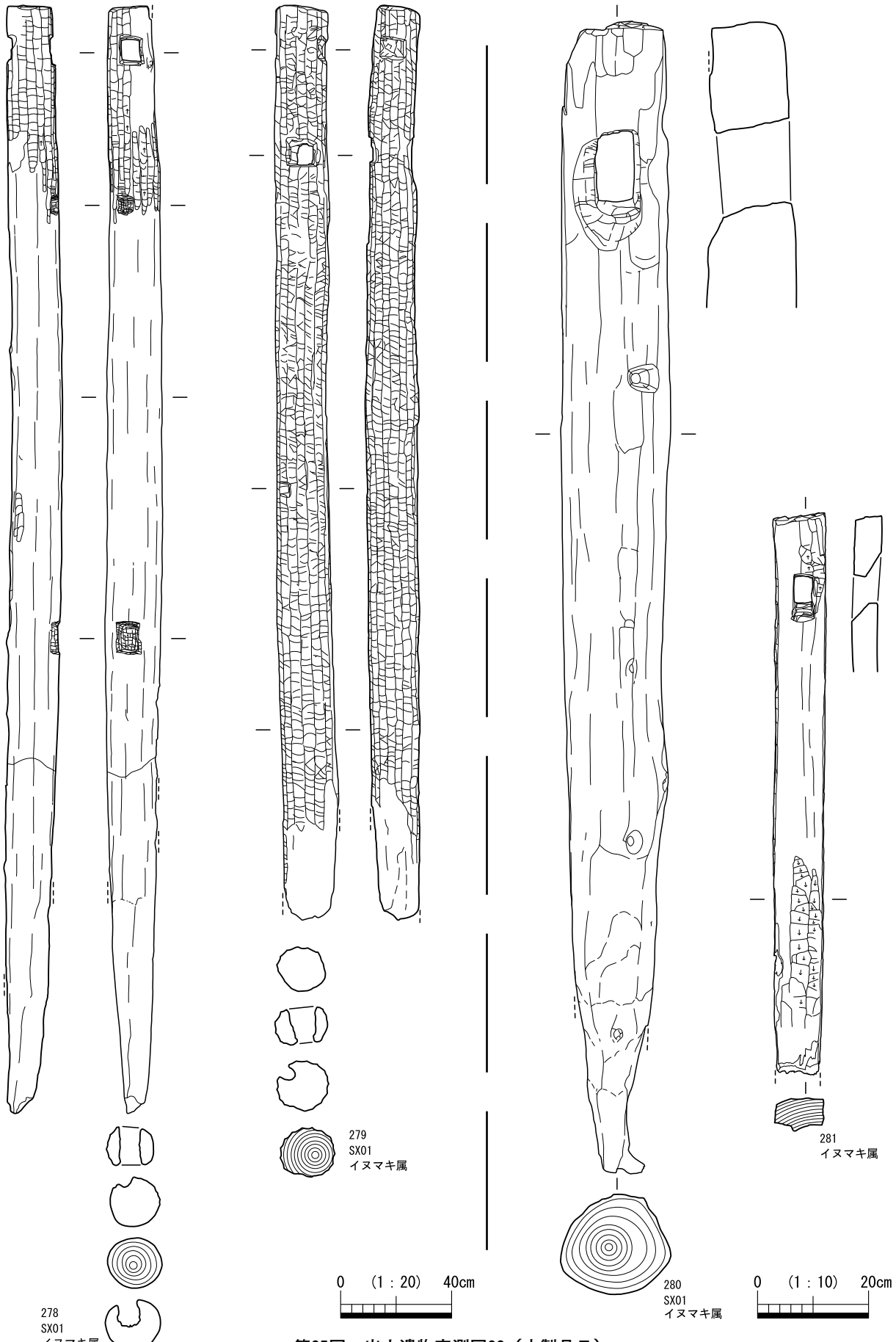
面の枘孔の直下10cmの範囲には幅６㎝程の工具痕が見られる。上端部は真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を手斧で粗く斜めに削っている。下端部は真直ぐ平坦に切断しているが、大部分は折損している。276は上端部から22cm下に枘孔がある。枘孔は縦６㎝×横５cmの方形である。枘孔の周囲には非常に細かい刃物痕が見られる。上端部は真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を斜めに削っている。下端部は折損している。277は上端部から19cm下に枘孔がある。枘孔は縦10cm×横6.5cmの方形である。木表面の枘孔の直下10cmの範囲には幅1.5cm程の工具痕が明瞭に見られる。木表面の下半部2/3は樹皮が付着している。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、手斧で粗くＶ字状に切断している。

278～280は枘孔のある丸太材である。278は長さ399cm、丸太の最大径は20cmである。上端部から10cm下に枘孔がある。枘孔は縦８㎝×横７cmの方形である。上端部から70cm下の左側縁寄りには未貫通の孔があり、６㎝角の範囲に非常に細かい刃物痕が密集している。深さは２cmである。また、上端部から220cm下の左側縁寄りにも未貫通の孔があり、縦12㎝×横８cmの方形の範囲に非常に細かい刃物痕が密集している。深さは10cmである。上半部約1/6の範囲には長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。上端部から243cm～278cmの範囲の右側縁と、175cm～215cmの範囲の裏面にも部分的に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が部分的に見られる。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下半部は腐食が著しく加工方法は不明である。279は長さ329.5cm、丸太の最大径は23.5cmである。上端部から50cm下に枘孔がある。枘孔は縦11㎝×横10cmの方形である。上端部から11cm下の両側縁には未貫通の孔があり、大きさはそれぞれ縦10cm×横８cmの方形、深さは１cmである。また、上端部から170cm下にも未貫通の孔があり、大きさは縦５㎝×横４cmの方形、深さは５㎝である。丸太の全面に長軸方向に削った幅４㎝程の工具痕が見られる。上端部は多方向から手斧を入れて、真直ぐ平坦に切断している。下半部は折損している。280は年輪幅が均等ではない丸太材を用いている。長さ207.6cm、丸太の最大径は19.8cmである。上端部から20cm下に枘孔がある。枘孔は縦15cm×横８cmの方形である。枘孔の周囲には刃物痕が見られる。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下端部は腐食が著しく加工方法は不明である。

281は枘孔のある割材である。上端部から11cm下に枘孔がある。枘孔は縦５㎝×横３cmの方形である。木表面の枘孔の直下３cmの範囲には非常に細かい刃物痕が見られる。枘孔周辺の右側縁部付近と、下半部1/3の範囲にも、面調整の痕跡である長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。木裏面は枘孔周辺の左側縁部付近に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。両側縁は全面に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。上端部は表裏両面から手斧を入れて真直ぐ平坦に切断している。下端部は折損している。

エ　壁材

282は柾目材である。板材のほぼ全面に長軸方向に削った幅３㎝程の粗い手斧痕が見られる。上端部は折損している。下端部は手斧で粗く真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を手斧で粗く斜めに削っている。283は割り剝した状態の追柾目の板材である。上端部は折損している。下端部は手斧で真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を手斧で粗く斜めに削っている。284は追柾目で、上半部の厚さが１cmに満たない薄い板材である。木裏面の上半部4/5の範囲に長軸方向に削った幅2.5cm程の工具痕が見られる。上下端部は折損している。285は板目材である。木裏面の左側縁部付近には、面調整の痕跡である長軸方向に削った幅２～３cm程の工具痕が見られる。上端部は折損している。下端部は両側縁の四隅の角をＶ字状に削って杭の先端加工を施している。286は割り剝した状態の板目材である。厚さ1.9cmを測る薄い板材である。上端部は折損して

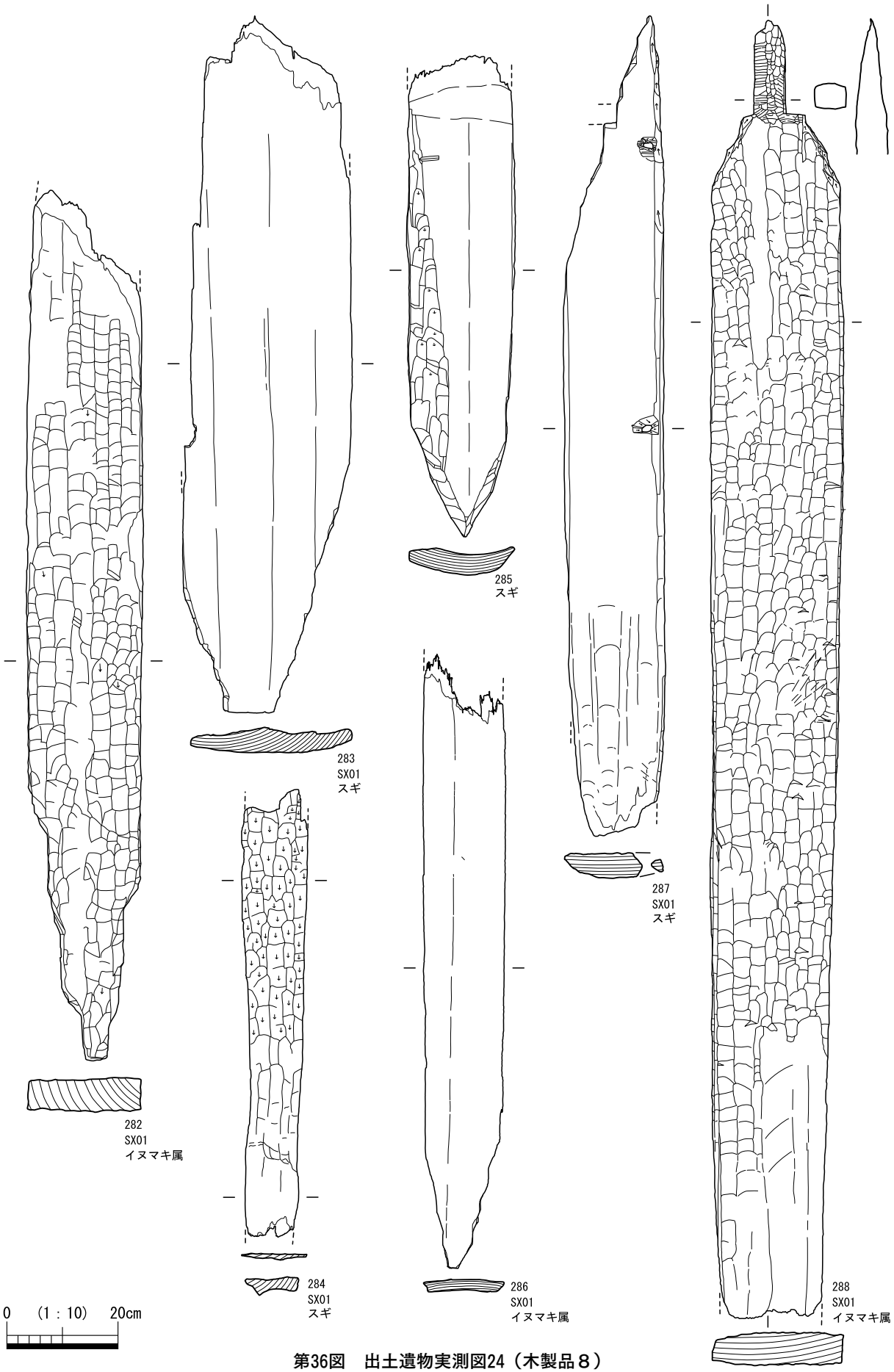


第35図　出土遺物実測図23（木製品７）

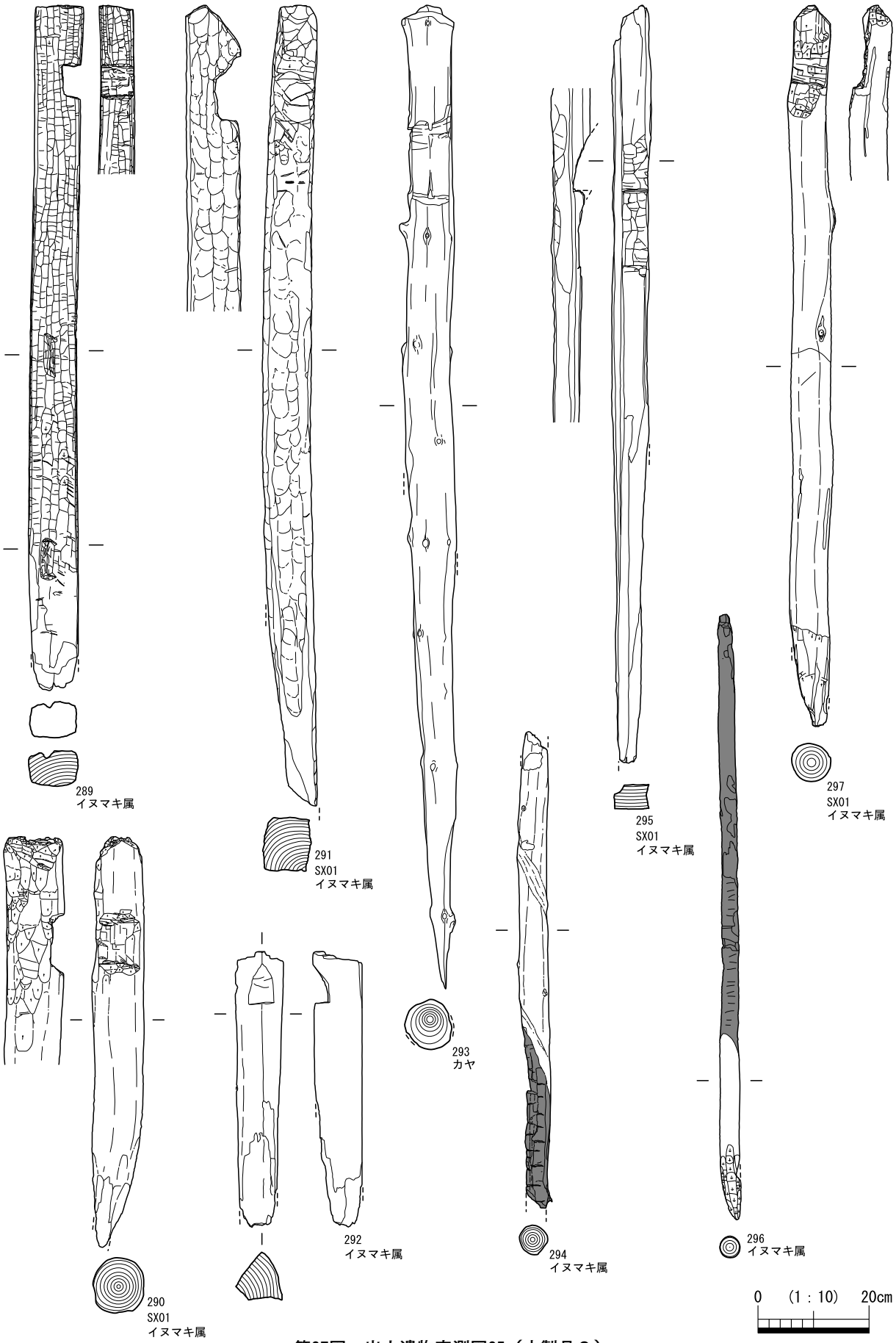
いる。下端部は手斧で真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁を手斧で粗く斜めに削っている。287は板目材である。木裏面の右側縁寄りに縦１cm×横２cmの楕円形の孔を２箇所穿孔している。孔の周囲には細かい刃物痕が見られる。孔の間隔は51cmである。木裏面の下半部1/4の範囲には、面調整の痕跡である長軸方向に削った幅3.5cm程の工具痕が見られる。右側縁はほぼ全面に長軸方向に削った工具痕が見られる。上端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、左側縁から手斧で粗く斜めに切断しており、この時に方形の枘孔も切断している。下端部は折損している。288は板目材である。上端部は左右両側縁を階段状に切断して、横断面の厚さが６㎝×４cmを測る方形の枘状の突起を作り出してから、さらに段の部分を斜めに切断している。突起の長さは16cmである。突起の縦断面は先端に進むにつれて薄くなり、断面が尖る。板材の部分は、木裏面のほぼ全面に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られるが、割り剝しの部分が一部残る。両側縁はほぼ全面に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。木表面は上端部から40cmまでの範囲に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。突起の部分は全面に工具痕が見られる。この部分に関しては工具痕の幅が１cm～２cmと狭く、また加工の単位も非常に細かいものとなっている。下端部は折損している。

オ　垂木と考えられる建築材

289は板目の角材を用いている。上端部から11cm下の右側縁に深さ４cmの抉りを入れている。抉りは上下とも垂直に刃を入れ、５㎝程の平坦部を有する。上端部から59cm下と96cm下の木表面に、縦７cm×横２cmを測る断面Ｖ字形の溝を削り出している。溝の深さはともに２cmである。木表面と右側縁は下半部1/6を除くほぼ全面に長軸方向に削った幅１cm程の工具痕が見られる。左側縁は上端部から32cmの範囲は割面のまま、その下からは下半部1/6を除くほぼ全面に長軸方向に削った幅１cm程の工具痕が見られる。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下端部は折損している。290は丸太材を用いている。上端部から15cm下に深さ２cmの抉りを入れている。抉りは上下ともに斜め50度に刃を入れ、７cm程の平坦部を有する。上半部左側面1/2の範囲に長軸方向に削った２cm程の工具痕が見られる。上端部は２方向から手斧で粗くＶ字状に切断している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、鉛筆状に削っている。先端は欠損している。291は角材を用いている。上端部から９㎝下の木表面に深さ４cmの抉りを入れている。抉りは上部が斜め45度、下部はほぼ垂直に刃を入れ、６㎝程の平坦部を有する。木表面と両側縁のほぼ全面に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られる。上端部は、木表面は抉りの位置から斜め35度の角度で切断し、木裏面は斜め60度の角度で切断している。下端部は折損している。292はミカン割材を用いている。上端部から２cm下の割材の角に深さ３cmの抉りを入れている。抉りは上部が斜め20度、下部はほぼ垂直に刃を入れ、形状は三角形を呈する。上端部は手斧で粗く切断している。下端部は折損している。293は枝の先端部に近い丸太材を用いている。表面に節の痕が多く残る。上端部から20cm下に深さ３cmの抉りを入れている。抉りは上下とも垂直に刃を入れ、12cm程の平坦部を有する。抉りの部分に刃物痕がわずかに見られる。上下端部は腐食のため加工方法は不明である。294は丸太材を用いている。全体に縄によると考えられるらせん状の緊縛痕が見られる。下半部1/3は著しく炭化している。上下端部は折損している。295は柾目の角材を用いている。上端部から23cm下の木裏面に深さ３cmの抉りを入れている。抉りは上部が斜め20度、下部はほぼ垂直に刃を入れ、形状は三角形を呈する。抉りの部分とその下14cm、及び左側縁の抉り付近の一部には長軸方向に削った幅1.5cm程の工具痕が見られる。木表面の上端部から10cmの範囲は、手斧で粗く削って断面を薄くしている。未加工の部分には樹皮が付着している。上端部は手斧で粗く切断している。下端部は折損している。296は細い丸太材を用いている。上半部2/3は著しく炭化している。上端部は手斧で粗く切断している。下端部は杭として使用した際の二次加工の痕跡が見られる。297は丸太材を用いている。



第36図　出土遺物実測図24（木製品８）



第37図　出土遺物実測図25（木製品９）

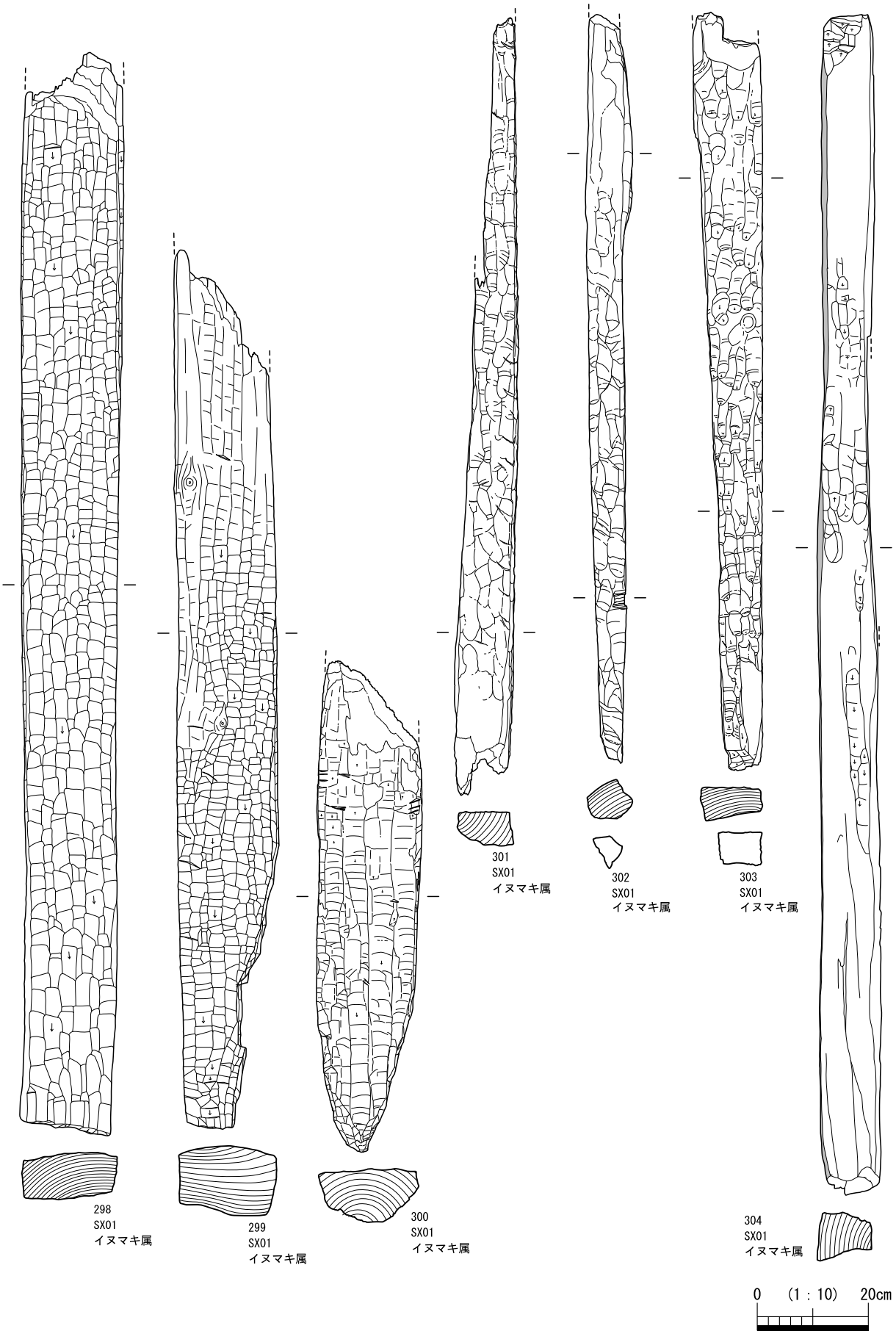
上端部から深さ３cmの抉りを入れている。抉りの下部はほぼ垂直に刃を入れてから、斜め10度の角度で角を切断している。抉りの部分には幅１cm程の粗い手斧痕が見られる。裏面は上端部から８㎝下の位置から18cmまでの範囲に長軸方向に削った幅１cm程の粗い手斧痕が見られる。上端部は手斧で鉛筆状に削っている。下半部はＳＸ01を構築する際の二次加工で杭の先端加工を施しているが、腐食のため加工方法は不明である。

（４）表面調整割材

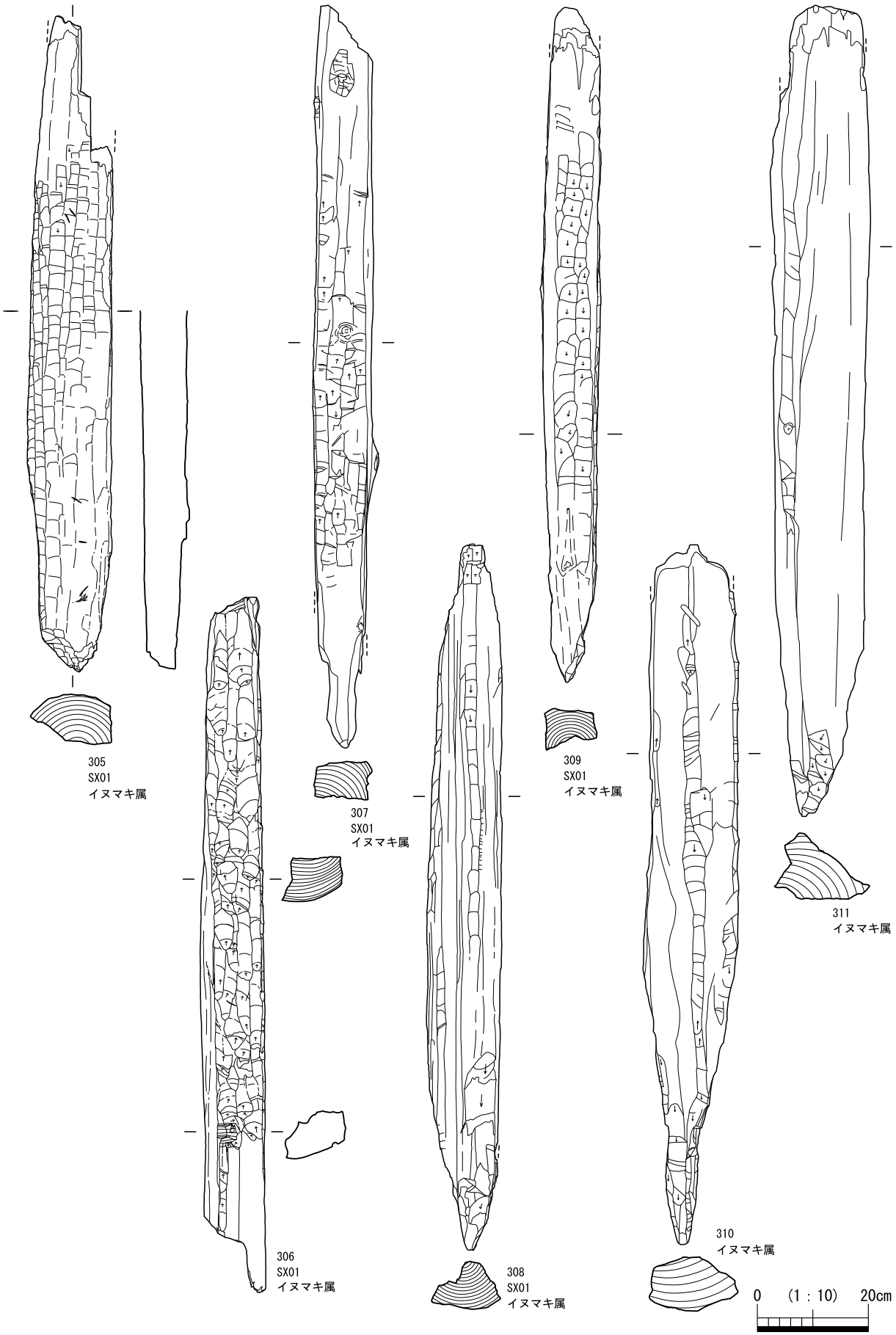
298は板目材である。左側縁の下半部1/3を除いたほぼ全面に長軸方向に削った幅2.5cm程の工具痕が明瞭に見られる。上端部は折損している。下端部は木表面から手斧で真直ぐ平坦に切断している。299は板目材である。木裏面と両側縁のほぼ全面に長軸方向に削った幅2.5cm程の工具痕が見られる。工具痕は節の影響を受けて一部方向が不規則になった箇所が見られる。木表面には樹皮が付着している。上端部は折損している。下半部は手斧で真直ぐ平坦に切断した後、ＳＸ01を構築する際の二次加工で、右側縁を手斧で粗く切断して杭の先端加工を施している。300はミカン割材である。木表面の全面と両側縁に長軸方向に削った幅４㎝程の手斧痕が見られる。木裏面は芯の位置に長軸方向に削った幅４㎝程の粗い手斧痕が２列見られる。また、その両脇にも長軸方向に削った幅４㎝程の粗い手斧痕が部分的に見られる。上端部は折損している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、両側縁の四隅の角をＶ字状に削って杭の先端加工を施している。301はミカン割材である。木表面のほぼ全面に長軸方向に削った幅２cm程の粗い手斧痕が見られる。手斧痕の方向はやや不規則である。上下端部は折損している。302はミカン割材である。木表面の下半部3/4の範囲に長軸方向に削った幅2.5cm程の粗い手斧痕が見られる。手斧痕の方向はやや不規則である。上端部から103cm下の右側縁の角に、縦３cm×横２cm、深さ２cm程の方形の抉りがある。この抉りは元の用材を割ってから入れられたものである。上端部は折損している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、鉛筆状に削っている。303は板目材である。木表面と右側縁のほぼ全面に長軸方向に削った幅２cm程の手斧痕が見られる。手斧痕の方向はやや不規則である。上端部は折損している。下端部はＳＸ01を構築する際の二次加工で、表裏両面から手斧で粗く切断し、断面が尖るように杭の先端加工を施している。304はミカン割材である。柾目となる面の片面の中央部に長軸方向に削った幅2.5cm程の工具痕が部分的に見られる。この面には左側縁の上端部から10cmの範囲にも工具痕が見られる。木表面には樹皮が付着している。上端部は手斧で真直ぐ平坦に切断している。下端部は手斧で粗く切断している。

（５）杭

305～318は割材を用いた杭である。305は木表面のほぼ全面と右側縁に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られる。木裏面の下端部から23cmの位置に１cmの段差を設け、下端部まで平坦に削っている。この部分にも長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られる。上端部は折損している。下端部は左側縁の角を手斧で削ってから、木表面を手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。306は木裏面と右側縁の上半部4/5の範囲に長軸方向に削った幅2.5cm程の粗い手斧痕が見られる。手斧痕の方向はやや不規則である。木裏面には上端部から93cm下のやや左寄りの位置に未貫通の孔があり、３㎝角の範囲に非常に細かい刃物痕が密集している。上端部は粗く切断している。下端部は左側縁から手斧を途中まで真直ぐ刃を入れ、割り折りをしている。307は節が多く残る。木表面、左側縁、木裏面の中央部には長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られる。上端部から８㎝下には節を落とした際の細かい刃物痕が見られる。上端部は手斧で右側縁から粗く斜めに切断している。下端部は折損している。308は芯の位置と左側縁の一部に長軸方向に削った刃物痕が見られる。上下端部は木裏面を削り、両側



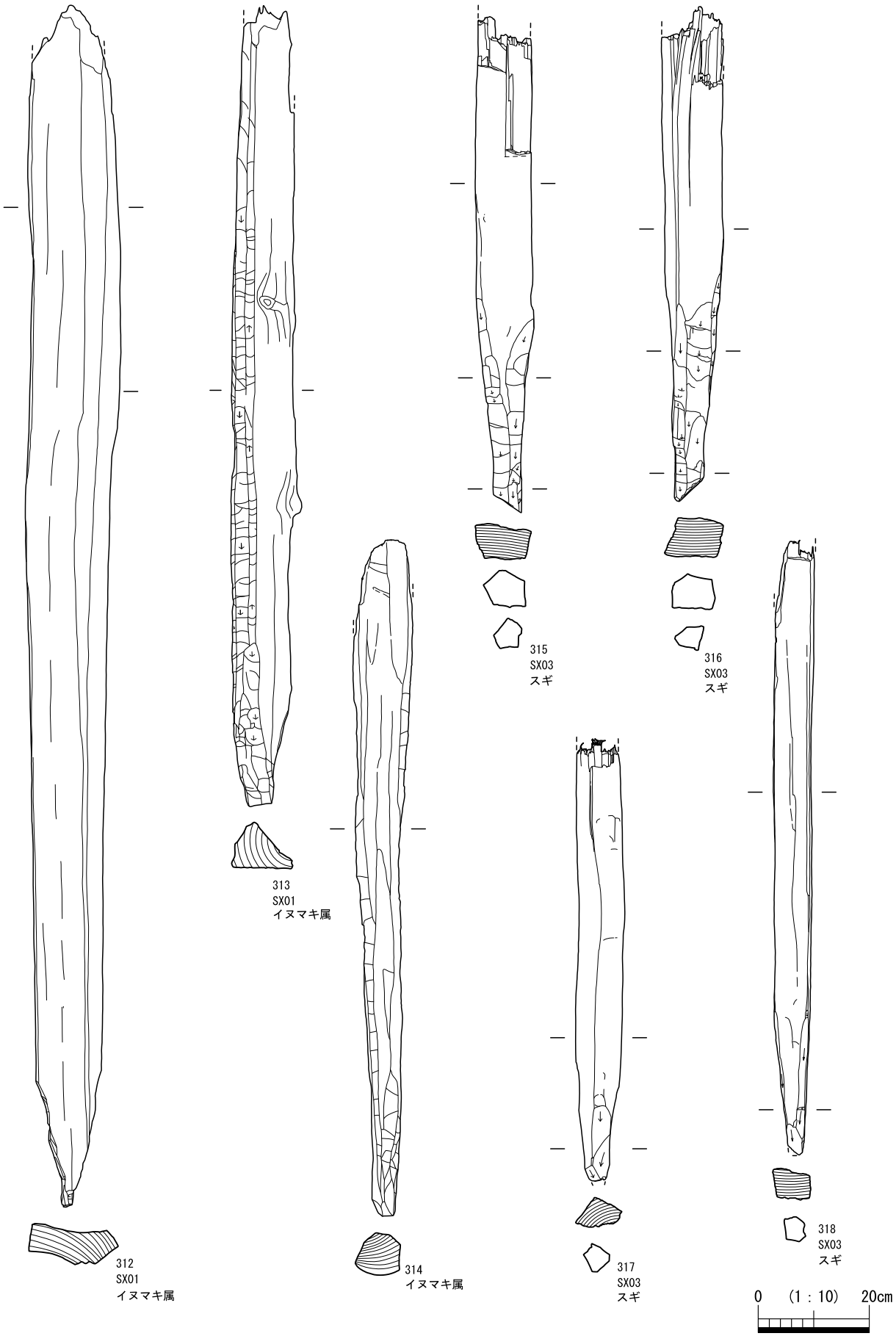
第38図　出土遺物実測図26（木製品10）



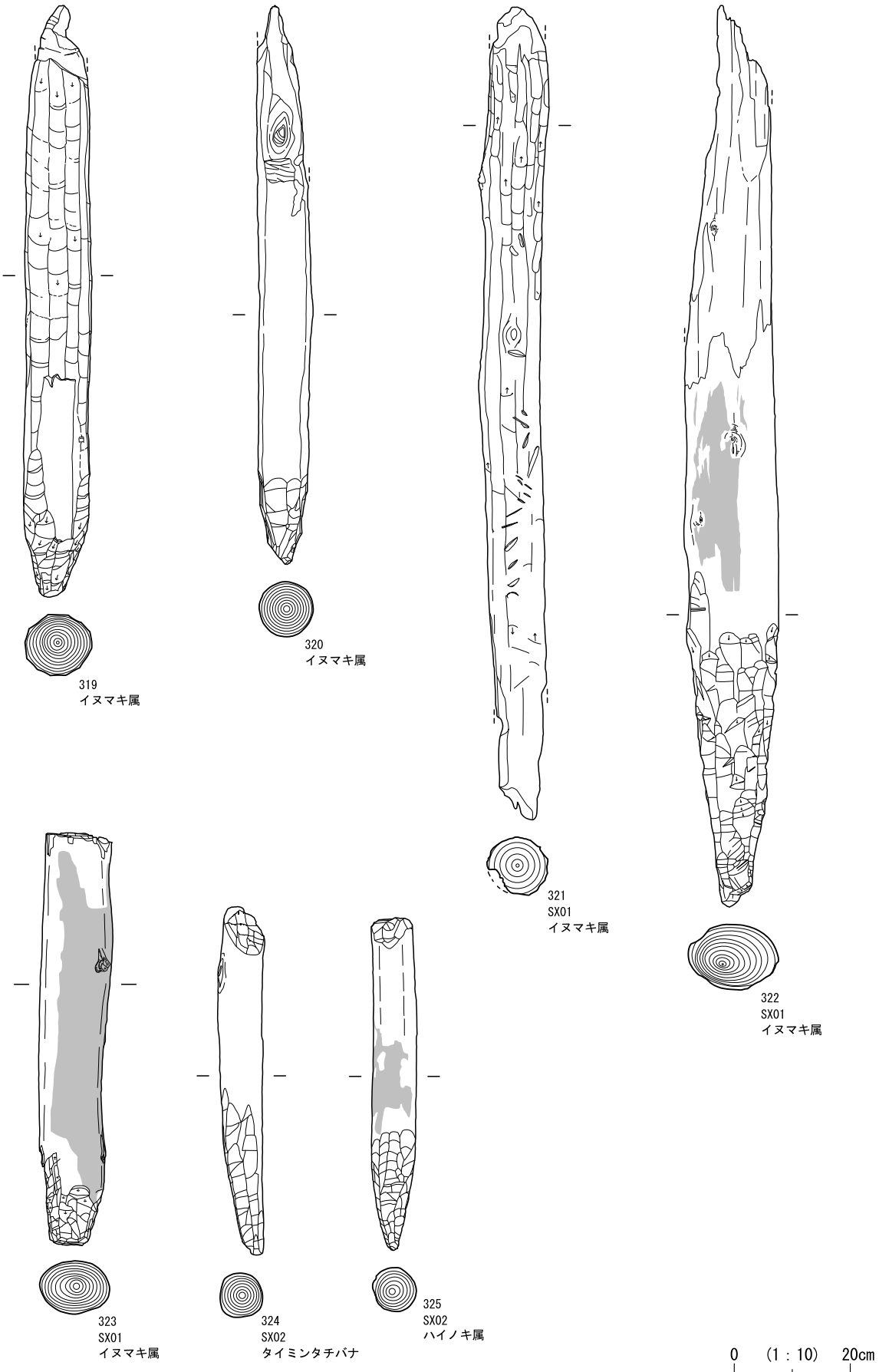
第39図　出土遺物実測図27（木製品11）

縁を手斧でＶ字状に切断して杭の先端加工を施している。杭の天地は不明である。309は木表面の中央部と両側縁に長軸方向に削った幅３cm程の工具痕が見られる。上端部は折損している。下端部は両側縁を手斧でＶ字状に切断し、木裏面を鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。310は木裏面の割材の角に当たる位置と右側縁に長軸方向に削った工具痕が見られる。上端部は折損している。下端部は両側縁を手斧でＶ字状に切断し、木裏面を手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。311は木表面の割材の角に当たる位置に長軸方向に削った刃物痕が見られる。上端部は折損している。下端部は両側縁を手斧でＶ字状に切断し、木表面を鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。312は割り剝した板材をそのまま用いている。上端部は折損している。下端部は両側縁を手斧でＶ字状に切断して杭の先端加工を施している。313は節の多いミカン割材を用いている。木表面に長軸方向に削った幅3.5cm程の工具痕が見られる。上端部は折損している。下端部は割材の角を手斧でＶ字状に削って杭の先端加工を施している。314は割材の木裏面の角に長軸方向に削った刃物痕が見られる。上端部は折損している。下端部は手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。315～318はミカン割材をそのまま用いている。いずれも上端部は折損し、下端部は手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。

319～325は丸太材を用いた杭である。319は下半部の長さ1/3の一部を除くほぼ全面に、長軸方向に削った幅3.5cm程の工具痕が見られ、断面形は12角形を呈している。上端部は折損している。下端部は手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。先端は使用時の土圧でつぶれている。320は上端部から27cm下に深さ１cm程の断面半円形の抉りがあり、縦５㎝×横４cmの範囲に細かい刃物痕が密集している。上端部は折損している。下端部は表面半周の範囲を手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。321は上半部1/4の範囲を中心に長軸方向に削った幅２cm程の工具痕が見られる。全体的に腐食が著しい。上下端部は折損している。322は芯の位置が片寄った断面楕円形の丸太材を用いている。丸太部分の一部に樹皮が付着している。上端部は折損している。下端部は手斧で粗く鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。323は断面楕円形の丸太材を用いている。丸太部分の一部に樹皮が付着している。上端部は表裏両面から手斧を入れて真直ぐ平坦に切断している。下端部は手斧で真直ぐ平坦に切断してから、４方向から手斧で粗く削って杭の先端調整を施している。324は上端部を手斧で粗く斜めに切断している。下端部は手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。325は丸太部分の一部に樹皮が付着している。上端部は手斧で粗く切断している。下端部は手斧で鉛筆状に削って杭の先端加工を施している。



第40図　出土遺物実測図28（木製品12）



第41図　出土遺物実測図29（木製品13）

第７表　出土遺物計測表（木製品）

挿図番号	写真図版	グリッド	調査区	遺構	層位	分類	器種	樹種	木取り	長さ（cm）	径・幅（cm）	厚さ（cm）	備考
247	17	－	1		－	容器	刳物	スギ	横木取り柾目	(23.5)	(10.9)	1.3	
248	17	－	1		－	調度	案？	イヌマキ属	板目	(74.6)	(40.8)	－	高さ(12.1)cm
249	17	B1	1	東側側溝	－	建築材	梯子	イヌマキ属	芯持材	(80.8)	16.0	10.1	
250	17	B1	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梯子	イヌマキ属	芯持材	(91.3)	14.4	(9.0)	
251	17	B3	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梯子	イヌマキ属		(96.3)	14.6	(7.4)	
252	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(158.6)	13.4	11.0	土木材転用
252	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(88.8)	12.0	10.6	土木材転用
253	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(222.5)	14.1	11.4	土木材転用
254	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	378.0	17.0	18.5	土木材転用
255	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(202.2)	13.4	11.2	土木材転用
256	18	B3	1	SX01	－	建築材	柱		芯持材	(191.0)	13.8	12.0	土木材転用
257	19	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属		(119.8)	20.8	11.0	土木材転用
258	19	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	44.5	14.5	6.4	
259	19	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(155.0)	12.8	11.8	土木材転用
260	19	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(187.0)	9.1	8.2	土木材転用
261	19	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(196.9)	7.6	7.1	土木材転用
262	19	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	183.8	7.0	6.7	土木材転用
263	19	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(176.8)	12.2	10.4	土木材転用
264	20	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(158.2)	16.2	14.8	土木材転用
265	20	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(302.2)	9.7	9.2	土木材転用
266	20	－	1	SX01	－	建築材	柱	クスノキ科	芯持材	132.6	16.7	13.7	土木材転用
267	20	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	111.7	13.8	11.5	土木材転用
268	20	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(101.9)	10.2	10.6	土木材転用
269	20	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	柱	イヌマキ属	芯持材	(102.4)	9.8	9.3	
270	21	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	板目	(57.6)	10.3	2.1	土木材転用
271	21	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梁・桁	スギ	板目	(105.3)	16.6	2.7	
272	21	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梁・桁	イヌマキ属	柾目	(74.2)	11.4	3.3	
273	21	－	1		－	建築材	梁・桁	スギ	板目	(89.3)	16.9	2.6	
274	21	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	板目	219.2	26.4	6.8	土木材転用
275	21	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	板目	232.4	9.5	5.8	土木材転用
276	21	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	板目	(237.2)	18.0	6.2	土木材転用
277	22	－	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	板目	82.5	17.9	4.6	土木材転用
278	22	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	芯持材	(399.0)	20.0	19.0	土木材転用
279	22	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	芯持材	(329.5)	23.5	20.0	土木材転用
280	22	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	芯持材	(207.6)	19.8	18.2	土木材転用
281	22	－	1		－	建築材	梁・桁	イヌマキ属		(101.2)	9.7	5.7	
282	22	B3	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	柾目	(156.8)	21.0	6.3	土木材転用
283	23	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	追柾目	(125.5)	30.6	4.5	土木材転用
284	23	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	追柾目	(80.6)	11.9	2.9	土木材転用
285	23	－	1		－	建築材	壁材	スギ	板目	(86.7)	19.6	5.1	
286	23	－	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	板目	(110.6)	14.9	1.9	土木材転用
287	23	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	板目	(144.7)	18.4	4.6	土木材転用
288	23	－	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	板目	(233.8)	24.0	6.0	土木材転用
289	24	－	1		－	建築材	垂木？	イヌマキ属	板目	(246.7)	17.8	13.3	
290	24	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	芯持材	(73.9)	9.4	10.2	土木材転用
291	24	B2	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属		(144.1)	8.9	9.7	土木材転用
292	24	－	1		－	建築材	垂木？	イヌマキ属		(49.6)	8.6	8.8	
293	24	－	1		－	建築材	垂木？	カヤ	芯持材	(177.0)	9.5	9.4	
294	24	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	垂木？	イヌマキ属	芯持材	(85.7)	6.3	5.3	
295	24	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	板目	(136.4)	7.2	7.0	
296	24	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	垂木？	イヌマキ属	芯持材	108.9	3.6	3.9	
297	24	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	芯持材	(129.7)	7.7	6.4	土木材転用
298	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	板目	(195.0)	18.4	8.6	
299	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	板目	(158.4)	17.6	12.6	
300	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	芯持材	(88.4)	19.0	10.7	
301	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属		(140.0)	11.6	6.3	
302	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属		(134.8)	8.5	8.2	
303	25	－	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	板目	(136.4)	12.5	7.1	
304	25	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	柾目	212.6	11.2	8.8	
305	26	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		(118.2)	15.3	8.4	
306	26	－	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		125.3	11.8	8.7	
307	26	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		(133.8)	11.6	7.7	
308	26	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		127.3	13.7	8.7	
309	26	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		(121.6)	10.9	7.1	
310	26	－	1		－	土木材	杭	イヌマキ属		(126.0)	18.4	9.8	
311	26	－	1		－	土木材	杭	イヌマキ属		(146.1)	17.7	12.9	
312	27	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		(216.4)	16.2	5.8	
313	27	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属		(144.2)	12.8	8.2	
314	27	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属		(121.8)	10.6	7.6	
315	27	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ		(89.1)	11.1	6.4	
316	27	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ		(89.1)	11.1	6.4	
317	27	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ		(79.7)	8.9	5.3	
318	27	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ		(110.2)	7.4	5.7	
319	28	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属	芯持材	(101.9)	11.5	10.5	
320	28	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属	芯持材	(96.3)	9.7	10.0	
321	28	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	芯持材	(140.0)	12.8	10.0	
322	28	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	芯持材	(155.3)	16.2	11.3	
323	28	－	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	芯持材	70.1	12.8	9.2	
324	28	B2	1	SX02	Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	タイミンタチバナ	芯持材	60.1	8.2	7.6	
325	28	B2	1	SX02	Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	ハイノキ属	芯持材	57.4	7.9	7.6	

第４章　ミカノセ遺跡のまとめ

第１節　遺跡の時期と周辺遺跡との関連について

本遺跡は日詰遺跡、日野遺跡をはじめとする南伊豆地域の遺跡が営まれていた当時からの河川であり、出土した土器や木製品は、鯉名川の上流や周辺に存在していた遺跡で使用されていたものが流れこんできたものである。本節では土器に着目して遺跡の時期と周辺遺跡との関連を概観する。

本遺跡で出土した土器のうち最も古いものは縄文時代晩期後半の浮線文系土器（１）である。この型式の土器に限らず、晩期の土器が出土したのは南伊豆町域で初の事例である。浮線文系土器は中部高地を中心に、新潟、東北南部、関東、東海東部に分布している。静岡県内では東部地域を中心に県下全域で出土しており、御殿場市関屋塚遺跡、同宮ノ台遺跡、河津町姫宮遺跡が主要な遺跡としてあげられる。本遺跡でこの型式の土器が出土したことは、浮線文系土器の文化圏が南下したことを示すものであり、また、過去にこの時期の遺跡が鯉名川及びその周辺に存在していたことを示すものでもある。

鯉名川の本流である青野川の上流に位置する日詰遺跡は、弥生時代中期に集落の構築を開始し、後期に盛期を迎えている。本遺跡においても弥生時代中期中葉から後期にかけての土器が出土している。日詰遺跡で出土したこの時期の土器のほとんどは在地の土器である。本遺跡では在地の土器に混じって、中期中葉の平沢型の長頸壺（２）、中期後葉の信州系の甕（23）、後期前葉の東遠江の壺（11）、後期後葉の関東系の高坏（35）といった、外来系の土器も出土している。

古墳時代前期は、日詰遺跡の集落は一時中断するが、本遺跡から東に約200m離れた微高地上に立地する日野遺跡で水田耕作が行われていた時期である。本遺跡においてもこの時期の土器が出土しており、日詰遺跡、日野遺跡では出土していないＳ字甕の脚部（29）も見られる。また、大廓Ⅲ～Ⅳ様式期の壺や平底甕、小型の坩などが出土している。古墳時代中期は、日詰遺跡では竪穴住居跡や祭祀遺構に伴って５世紀中葉から後葉にかけての土器が多く出土している。日野遺跡でも４世紀代の土器埋設遺構、５世紀後半代の土器や石製模造品を廃棄した祭祀遺構が検出されている。本遺跡では主に土師器の甕や高坏などが出土している。古墳時代後期は、日詰遺跡で継続して竪穴住居と祭祀遺構が構築されていた時期である。日野遺跡でも祭祀遺構が継続して構築されている。日詰遺跡では７世紀以降、遺構・遺物は希薄になり、平安時代まで中断する。本遺跡では主に土師器の甕や坏が出土している一方、高坏の出土量が減少している。また、７世紀末の堝が多く出土しているのが特徴的である。須恵器も坏蓋、坏身を中心に６世紀前半から出現している。日詰遺跡、日野遺跡の祭祀遺構で出土している手づくね土器が本遺跡でも出土している。

奈良時代の遺物は日野遺跡で包含層中から出土している。本遺跡では駿東甕、堝、平城京産と考えられる皿（138）、須恵器の坏身と坏蓋などが出土している。本遺跡で出土する土器の時期は８世紀中葉までであり、８世紀後葉で一時中断している。日野遺跡で出土しているいわゆる駿河型と称されている坏は出土していない。

平安時代、日詰遺跡では10世紀以降折戸53号窯式の灰釉陶器が出土し、その後中世まで継続している。日野遺跡では奈良時代に引き続いて遺物が出土し、12世紀前半まで継続している。本遺跡では９世紀～10世紀の土師器の坏と折戸53号窯式期の灰釉陶器が出土している。しかし日野遺跡で出土している黒笹14号窯式～黒笹90号窯式期の灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、土師器有高台坏は出土していない。

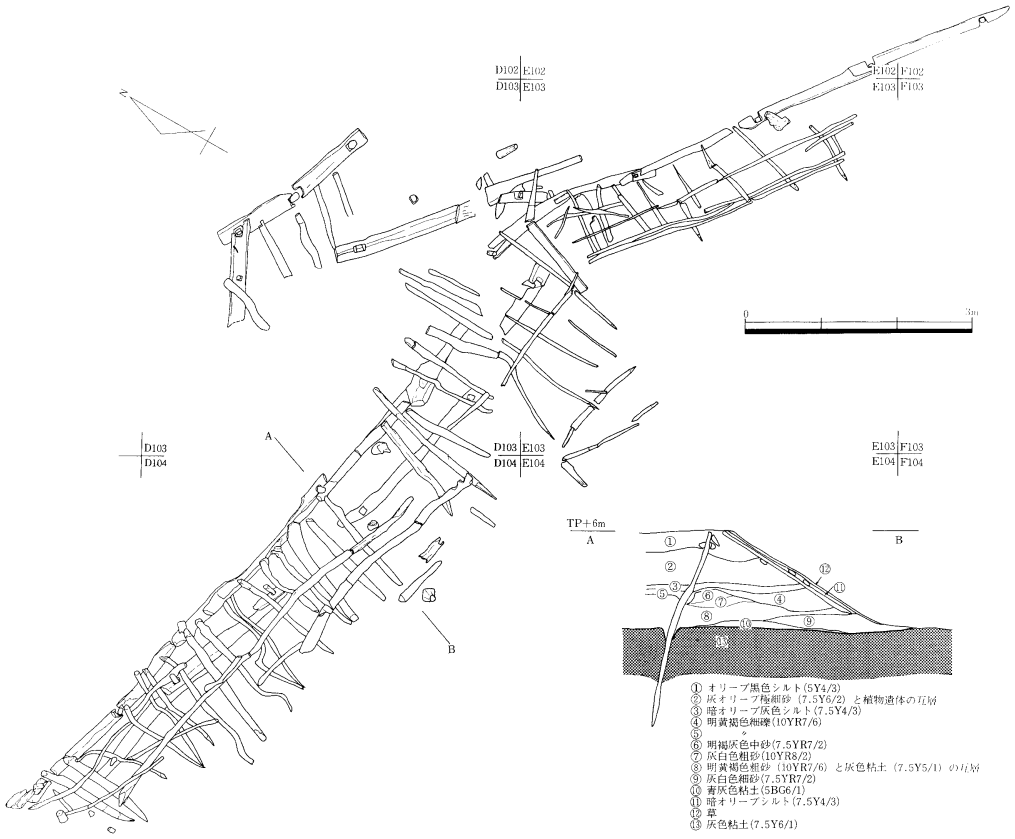
第２節　護岸遺構ＳＸ01について

河川に横木と杭を組み合わせて構築した遺構は全国各地で検出されている。護岸遺構として河川の壁に沿って構築されている例として、大阪府八尾市久宝寺北遺跡（大阪府教委他1987）、岡山市津寺遺跡（岡山県教委1996）、堰として河川と直交するように構築されている例として、弥生時代後期に構築された大阪府八尾市山賀遺跡（大阪府教委他1983）、古墳時代前期から後期に構築された福岡市那珂君休遺跡（福岡市教委1989）があげられる（第42図～第44図）。本遺跡のＳＸ01は河川の壁に沿って構築されているので、前者の護岸遺構として差し支えないであろう。ここでは護岸遺構として報告されている類例を概観する。

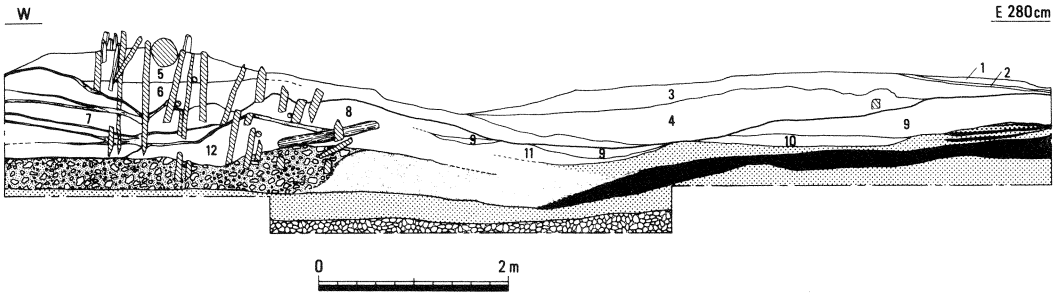
久宝寺北遺跡では５箇所の杭列が検出されている。共伴する土器から５世紀中葉以降６世紀までに構築されたものと考えられている。構築の手順は、①河川の上面肩部に枘穴を穿孔した基礎横木を並べ、枘穴を重ねて杭を打って継いでいく。②この連続した基礎横木を更に固定させるために補助杭を打ち込む。③河川の斜面に補助杭を打ち込み、これに横木を渡し、さらにこの上に丸太杭の杭先を下にして並べていく。横木材の設置は２～３段に及ぶ。さらにこの丸太材の上に、長い横木を横方向に並べて斜面を覆う。この場合にも任意に補助杭を打ち込んでいく。④底面も①と同じ造作を行い、斜面丸太杭の押さえとする、といった工程で進められている。また、上面と斜面の骨組を粘土・シルトで被覆して、この上に草を敷き、さらに河川の浸食による骨組内部の土砂の流失を防止するために補助杭を打ち込み、背面にも杭を打ち込んでいることが観察されている。

津寺遺跡では全長約50ｍに及ぶ護岸遺構が検出されている。共伴する土器から６世紀末から７世紀前半に構築されたものと考えられている。本遺跡のＳＸ01、久宝寺北遺跡の杭列と同様、河川の壁に沿って横木と杭を組み合わせた杭列を構築している。この過程で途中２回の盛土を行い、結果３回に分けて最大幅７ｍを測る大規模な杭列を構築していることが確認されている。杭の勾配は本遺跡のＳＸ01、久宝寺北遺跡の杭列が河川の壁とほぼ等しいのに対し、津寺遺跡の杭は垂直または急勾配に打ち込まれている。使用された木材は、丸太材または丸太材をミカン割りにしたものをこの杭列を構築するために用意している。杭列はこの後盛土で覆い、盛土の間には細い枝を格子状に組んだものの上にアシを被覆したものや、スギの樹皮を敷いている。この杭列を場所を変えて長期的に構築していった結果、河川の流路変更を実現している。

本遺跡のＳＸ01は、横木が河川の上面のみに配置されていること、大量の杭を密着させて打ち込んで横木を固定していること、構築材に柱材や板材などの建築材が転用されていることが大きな特徴である。また、本遺跡のＳＸ01では盛土が確認できず、その存在も不明である。上記の類例と比較して考察すると、本遺跡のＳＸ01は計画的な河川の付け替えのための施設ではなく、既に存在していた水位の高い河川の氾濫を防ぐために緊急的に設置されたものであると推定される。



大阪府八尾市久宝寺北遺跡 SS5003（報告書1987より転載）

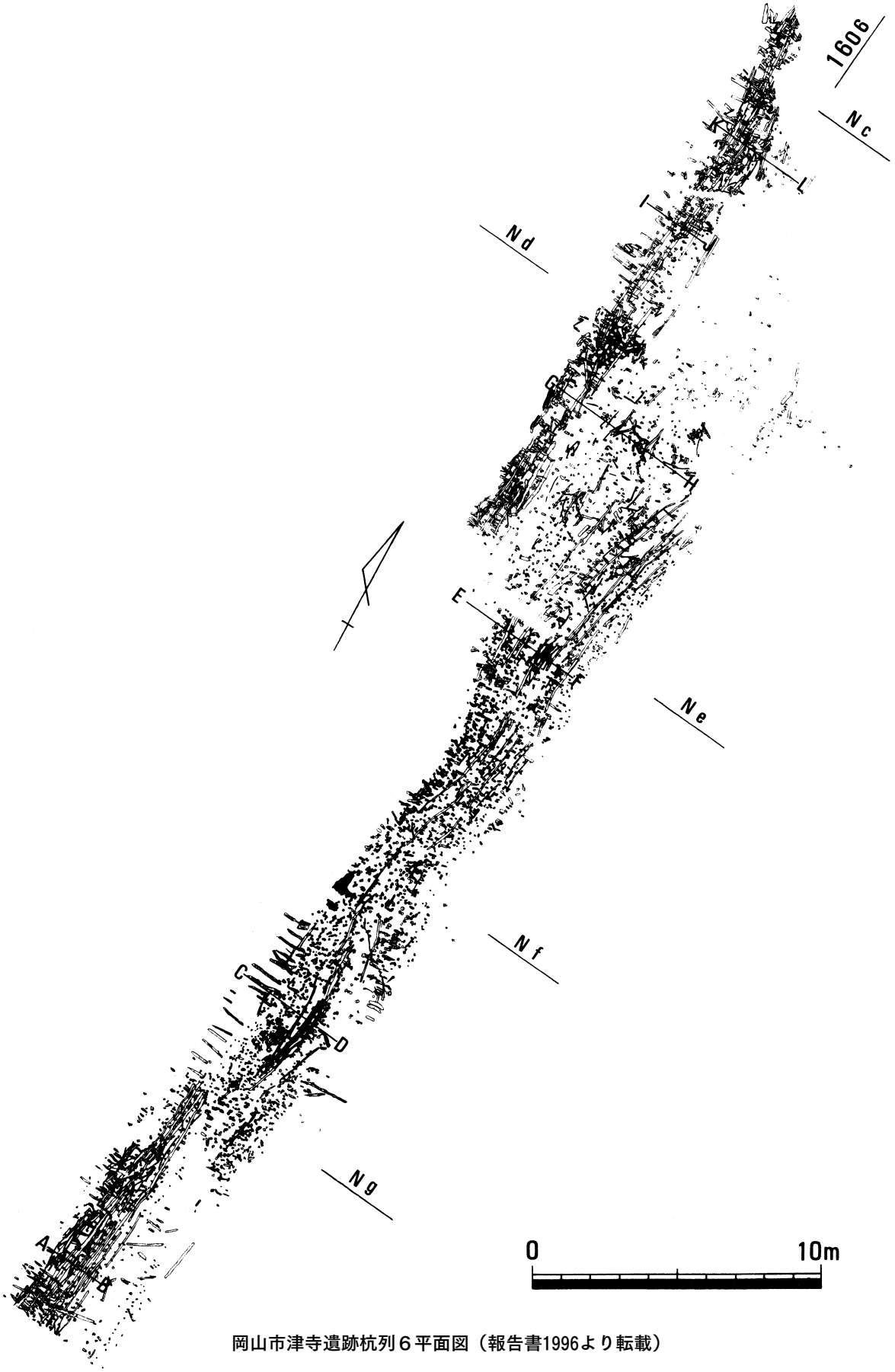


1	淡灰色粗砂層(礫混り)	4	黒褐色粘質土	7	淡黒褐色粘質土	10	灰色粗砂層(砂混り)
2	黒褐色粘質土	5	灰色粗砂層(礫混り)	8	灰青色砂質土微砂	11	灰色砂礫層
3	淡灰色粗砂層(礫混り)	6	灰色砂礫層	9	灰色砂礫層	12	灰色粗砂

粗～細砂層　粘質土層　シルト層　砂礫層　礫層(小)

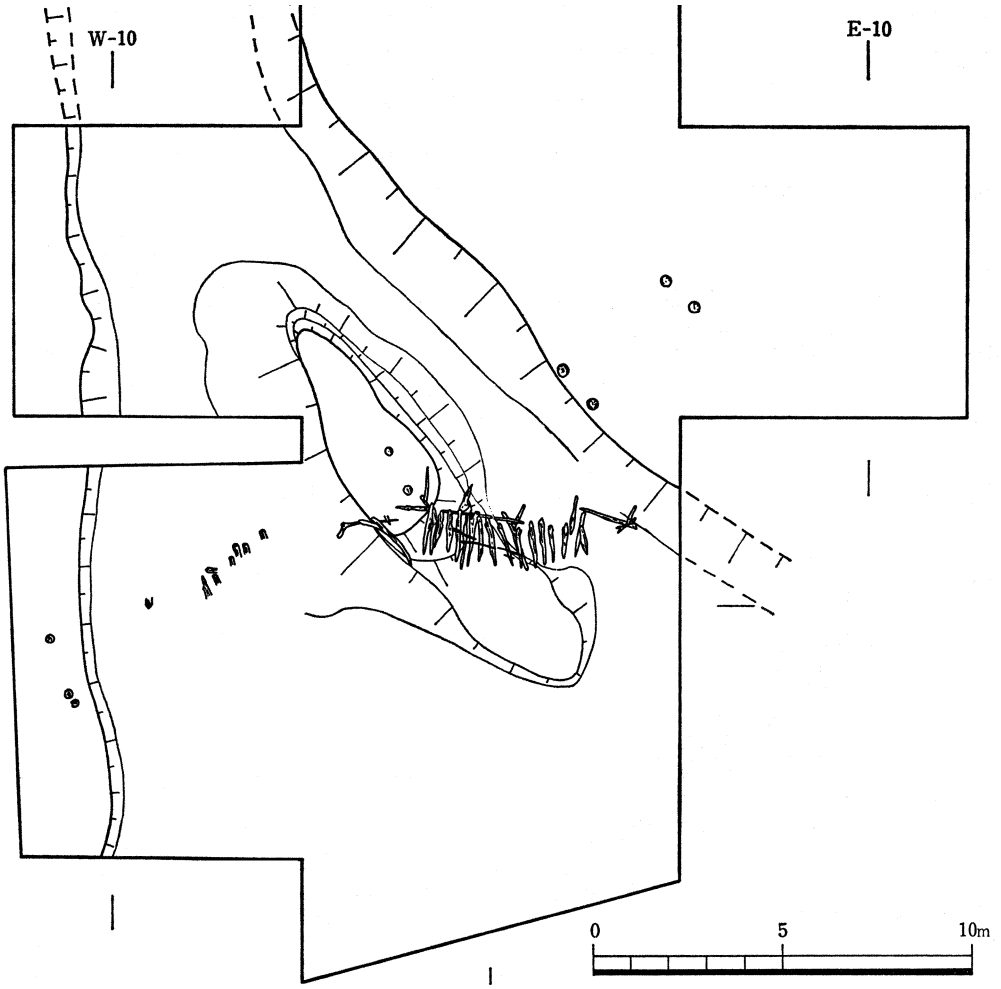
岡山市津寺遺跡杭列６断面図（報告書1996より転載）

第42図　杭列の類例（１）



岡山市津寺遺跡杭列６平面図（報告書1996より転載）

第43図　杭列の類例（２）



大阪府八尾市山賀遺跡堰（報告書1983より転載）

福岡市那珂君休遺跡３号井堰（報告書1989より転載）

第44図　杭列の類例（３）

〈参考文献〉

荒牧重雄・葉室和親1977「東伊豆単成火山群の地質
－1975-1977中伊豆の異常地殻活動に関連して－」『地震研究所彙報52』
伊豆ジオパーク推進協議会2012『南から来た火山からの贈りもの　伊豆ジオパーク構想
日本ジオパークネットワーク加盟申請書』
大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター1983『山賀』（その１）
大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター1987『久宝寺北』（その１～３）
岡山県教育委員会1996『津寺遺跡』２
小野真一・大島淑嗣1961「南伊豆町大日山遺跡出土土器」『駿豆考古』５
小野真一1978「南伊豆の先史・古代概観」『駿豆考古』20・21合併号
川江秀孝1992「須恵器の編年」『静岡県史』資料編３考古三
北川恵一1988「『駿東型の甕』の初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12
後藤建一1989「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』本文編
小林青樹2008「浮線網状文系土器」『総覧縄文土器』
小山真人編2011『伊豆半島ジオパーク構想指針書』静岡県文化政策部観光局観光政策課
佐野五十三1994「遠江・駿河・伊豆の古代集落の土器－土師器を主として－」『静岡県史研究』10
静岡県総務部防災局2002『地域の地盤と地震被害（伊豆南部地域）』
静岡県教育委員会1981『静岡県の中世城館跡』
静岡県埋蔵文化財センター2013『寺家前遺跡Ⅱ（木製品・石製品・金属製品他編）』
鈴木敏則2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』
第５分冊　補遺・論考編
瀬川裕市郎1980「藤井原の大鉢－律令時代堝形土器の変遷－」『沼津市歴史民俗資料館紀要』４
西尾太加二2008「遺跡から出土する建築材の樹種構成」『研究紀要』第14号
静岡県埋蔵文化財調査研究所
樋上　昇2012「16章　東海・中部」『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社
平野吾郎1992「灰釉陶器の編年」『静岡県史』資料編３考古三
福岡市教育委員会1989『那珂君休遺跡』Ⅳ
松井一明1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」
『静岡県の窯業遺跡』本文編
三島市教育委員会1989『安久遺跡』
南伊豆町教育委員会1979『日詰遺跡』Ⅶ　O地点製鉄遺構調査報告
南伊豆町教育委員会1980『日詰遺跡』上
南伊豆町教育委員会1984『日詰遺跡』下　遺物編Ⅰ
南伊豆町教育委員会1987『日野遺跡発掘調査報告書』
南伊豆町教育委員会2000『日詰遺跡』下　遺物編Ⅱ
八木勝行1992「須恵器の編年」『静岡県史』資料編３考古三
山本恵一1989「静岡県東部の古墳時代後期の土師器について」『沼津市博物館紀要』13
山本恵一1994「駿河湾東部の古墳時代の土師器について」『向坂鋼二先生還暦記念論集　地域と考古学』
渡井英誉1996「東駿河における布留式併行期の様相（前）－土器編年の設定－」『静岡県考古学研究』28
渡井英誉1999「中見代式土器小考－大廓式土器から中見代式土器へ－」『東国土器研究』第５号

附編　自然科学分析の結果

附編１　静岡県ミカノセ遺跡出土木材の樹種

鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県賀茂郡南伊豆町のミカノセ遺跡で検出された護岸遺構とみられる木組み木材群の樹種を調べた。ミカノセ遺跡からは弥生時代から平安時代にかけての遺物が出土しているがこの木組み遺構自体の時代は特定されていない。遺構は打ち込まれた杭材、縦材及び横材から構成され、それらの多数の木材のうちの80点について樹種を調べた。

取り上げられた木材から１辺１cmほどの木材小片を切りだし、剃刀刃を用いて切片を作成してプレパラートとした。80点の資料からは次に記載する６樹種が同定された（表１）。なお、同定に用いられたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

１．スギ　Cryptomeria japonica（Linn.f.）D.Don　ヒノキ科

写真図版I：１a−１c（No.14718）

年輪の明瞭な針葉樹材で、出土材の多くは黒褐色をしている。垂直、水平の樹脂道を欠き、仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。仮道管は断面四角形で整然と並び、早材では径が大きく薄壁、晩材では放射径が小さく扁平で細胞壁が極めて厚い。早材から晩材への移行は緩やか〜やや急で、晩材部は一般に幅広い。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞はしばしば黒褐色物質を含み、水平壁は平滑でやや薄い〜多少とも厚くなる。分野壁孔は大型のスギ型で開孔部の軸はほぼ水平になり、１分野に通常２個ある。これらの形質からスギの材と同定した。

スギは本州青森県南部〜九州屋久島の暖帯〜温帯の湿潤地に広く分布する常緑針葉樹で日本特産である。特に静岡県地方では愛鷹山、天城山など、スギの天然分布が多い。また、古くから植林され、現在では天然分布域よりも広い範囲にある。寿命が長くて成長は早く、樹高50m以上、幹径３m以上の巨木に育つ。木材は軽軟で割裂性良く、加工容易で大材が得られることから建築材、各種器具材を始めありとあらゆる用途に用いられる。静岡県地方では弥生時代以来現代までスギ材が非常によく利用されてきている。当遺跡出土材は土木用材としての板材が６点、杭が４点、それに刳物１点である。

２．イヌマキ属　Podocarpus　マキ科

写真図版I：２a−２c（No.14738）

年輪が不明瞭な針葉樹材で、出土材の色は灰褐色で保存性は良い。垂直、水平の樹脂道を欠き、仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。仮道管は断面四角形〜多角形でやや雑然と並び、早材では径が少し大きく壁もやや薄く､晩材では放射径がやや小さくて壁が多少厚い。早材から晩材への移行は緩やか､晩材部は幅狭い。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は断面で放射径が小さな扁平な四角形で,普通細胞内容物が目立たないが時に褐色〜黒褐色物質を含むことがある。水平壁は平滑で非常に薄い。分野壁孔は小型のヒノキ型で１分野に１−２個ある。これらの形質からイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属にはイヌマキPodocarpus macrophyllus（Thunb.）LambertとナギPodocarpus nagi（Thunb.）Zoll. et Moritzi（ナギ属として別属とされることもある）が日本に分布する。イヌマキは関東南部以西琉球台湾の、ナギは和歌山県以南、琉球台湾の暖地に分布する。伊豆地方ではイヌマキは海岸林に良く

自生し、また、イヌマキ及びその園芸品種のラカンマキが良く植栽される。伊豆半島にナギの自生はなく、希に植栽される。イヌマキの材は硬く粘りがあり、加工性に難はあるが耐朽性にすぐれ、建築材、特に土台に重用される。静岡県地方では他の地域と異なり、イヌマキ属製の丸木弓が弥生時代を中心に多数出土するほか、土木、建築材としても多量に用いられてきていることが知られている。当遺跡では丸太材、割材、杭材などの土木材として、あるいは柱材、角材、梯子などの建築材であったものが土木材に転用され、樹種を調べた80点の内実に65点と、多数がイヌマキ属材であった。

3．カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科

写真図版I：3a−3c（No.15178）

年輪があまり目立たない針葉樹材で、出土材は褐色で、保存性が極めて良い。垂直、水平の樹脂道を欠き、仮道管と放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない。仮道管は断面四角形でほぼ整然と並び、早材では径が少し大きく壁もやや薄く、晩材では放射径がやや小さくて壁が多少厚い。早材から晩材への移行は緩やか、晩材部は幅狭い。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚が２～３本ずつまとまって走っている。分野壁孔は小型のトウヒ型～スギ型で１分野に２−４個ある。これらの形質からカヤの材と同定した。

カヤは東北南部（宮城県）～九州屋久島の暖帯に分布する常緑針葉樹で、樹高30m以上、幹径１m以上の大木となる。材は木理通直、割裂性良く加工容易で光沢があって美しく、また保存性にすぐれている。建築、各種器具材に広く用いられるが、奈良時代以来の木彫仏（一木つくり）に特用されてきたほか、碁盤、将棋盤などにも珍重される。当遺跡出土材は土木材に用いられた丸太材１点である。

4．クスノキ科　Lauraceae

写真図版II：4a−4c（No.15231）

茶褐色を呈する出土材で保存性は比較的良い。断面がほぼ丸い小型の道管が単独あるいは２−３個、主に放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で年輪界は目立たない。道管の穿孔は主に単一で横棒の数が少ない階段状穿孔が混じる。木部柔組織は周囲状。放射組織は異性、ほぼ２細胞幅で背は低い。ごく希に放射組織の直立細胞が大きく膨らみ油細胞となる。これらの形質からクスノキ科のうち、クスノキおよびクロモジ属などの落葉性の低木類を除いた樹種の材であると同定した。

候補に挙がる樹種はタブノキ、ヤブニッケイ、カゴノキなどがあるが、いずれも材構造は類似していて個々の区別は困難である。伊豆地方にはこれらの樹種は多く自生している。

5．タイミンタチバナ　Myrsine seguinii Lev.　サクラソウ科

写真図版II：5a−5c（No.15235）

断面が丸みを帯びた多角形の微細な道管が単独あるいは２−数個主に放射方向に複合したものがまばらに均一に分布する散孔材で、幅広い放射組織が目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微細な小孔紋で交互状に密にある。木部柔組織は随伴状及び散在状。放射組織は３−８細胞幅で方形細胞及び直立細胞からなり異性、背が非常に高い。これらの形質からタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは千葉県以西の海岸沿いの暖地に自生する常緑小高木で、木材に特段の用途はない。伊豆地方の海岸林にはごく普通に見ることが出来る。

6．ハイノキ属　Symplocos　ハイノキ科

写真図版II：6a−6c（No.15234）

薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個様々な方向に複合したものが密度高く均一に分布する散孔材

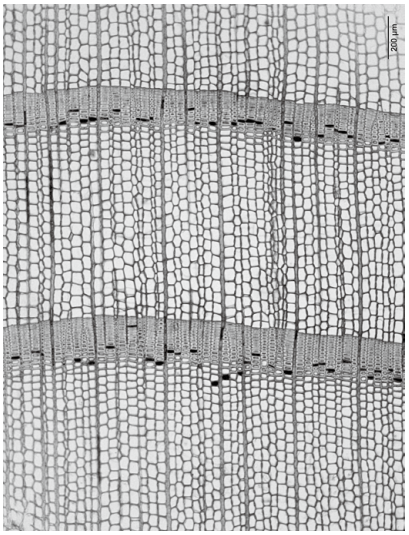
で、年輪界附近では道管密度は低い。道管の穿孔は横棒が20-30本ほどの階段状。木部柔組織は散在状。放射組織は１－２細胞幅で異性、背は低い。これらの形質からハイノキ属のうち、サワフタギなどの落葉性の樹種とハイノキなどの低木製の樹種を除いた、クロバイなどの常緑の小高木～高木の樹種の材と同定した。

関東地方以南の暖地、特に海岸地方にはクロバイ、ミミズバイなどの小高木～高木の常緑性の樹種があり、出土材はそれらのどれかであると考えられる。ハイノキ属の材は良質の木灰が得られることでその名があるが、木材としては薪炭材以外の特別な用途は見あたらない。当遺跡出土材は丸太の土木用材が１点である。

第１表　ミカノセ遺跡出土木材の樹種

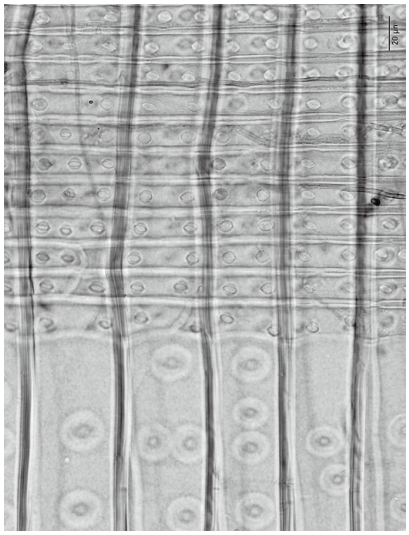
挿図番号	グリッド	調査区	遺構	層位	分類	器種	樹種	プレパラート番号	木取り	長さ(cm)	径・幅(cm)	厚さ(cm)	備考
247	－	1		－	容器	刳物	スギ	14741	横木取り柾目	(23.5)	(10.9)	1.3	
248	－	1		－	調度	案？	イヌマキ属	15180	板目	(74.6)	(40.8)	－	高さ(12.1)cm
249	B1	1	東側側溝	－	建築材	梯子	イヌマキ属	15176	芯持材	(80.8)	16.0	10.1	
250	B1	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梯子	イヌマキ属	15177	芯持材	(91.3)	14.4	(9.0)	
251	B3	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梯子	イヌマキ属	14951		(96.3)	14.6	(7.4)	
252	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14962	芯持材	(158.6)	13.4	11.0	土木材転用
252	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14963	芯持材	(88.8)	12.0	10.6	土木材転用
253	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14967	芯持材	(222.5)	14.1	11.4	土木材転用
254	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14957	芯持材	378.0	17.0	18.5	土木材転用
255	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15192	芯持材	(202.2)	13.4	11.2	土木材転用
256	B3	1	SX01	－	建築材	柱		14965	芯持材	(191.0)	13.8	12.0	土木材転用
257	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15188		(119.8)	20.8	11.0	土木材転用
258	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	柱	イヌマキ属	14729	芯持材	44.5	14.5	6.4	
259	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15187	芯持材	(155.0)	12.8	11.8	土木材転用
260	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15237	芯持材	(187.0)	9.1	8.2	土木材転用
261	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14968	芯持材	(196.9)	7.6	7.1	土木材転用
262	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14961	芯持材	183.8	7.0	6.7	土木材転用
263	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15238	芯持材	(176.8)	12.2	10.4	土木材転用
264	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14969	芯持材	(158.2)	16.2	14.8	土木材転用
265	B3	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	14974	芯持材	(302.2)	9.7	9.2	土木材転用
266	－	1	SX01	－	建築材	柱	クスノキ科	15231	芯持材	132.6	16.7	13.7	土木材転用
267	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15232	芯持材	111.7	13.8	11.5	土木材転用
268	－	1	SX01	－	建築材	柱	イヌマキ属	15233	芯持材	(101.9)	10.2	10.6	土木材転用
269	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	柱	イヌマキ属	15184	芯持材	(102.4)	9.8	9.3	
270	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14730	板目	(57.6)	10.3	2.1	土木材転用
271	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梁・桁	スギ	14736	板目	(105.3)	16.6	2.7	
272	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14733	柾目	(74.2)	11.4	3.3	
273	－	1		－	建築材	梁・桁	スギ	14718	板目	(89.3)	16.9	2.6	
274	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14955	板目	219.2	26.4	6.8	土木材転用
275	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14966	板目	232.4	9.5	5.8	土木材転用
276	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14953	板目	(237.2)	18.0	6.2	土木材転用
277	－	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14956	板目	82.5	17.9	4.6	土木材転用
278	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14958	芯持材	(399.0)	20.0	19.0	土木材転用
279	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14960	芯持材	(329.5)	23.5	20.0	土木材転用
280	B3	1	SX01	－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14954	芯持材	(207.6)	19.8	18.2	土木材転用
281	－	1		－	建築材	梁・桁	イヌマキ属	14738		(101.2)	9.7	5.7	
282	B3	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	15244	柾目	(156.8)	21.0	6.3	土木材転用
283	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	15234	追柾目	(125.5)	30.6	4.5	土木材転用
284	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	14730	追柾目	(80.6)	11.9	2.9	土木材転用
285	－	1		－	建築材	壁材	スギ	15186	板目	(86.7)	19.6	5.1	
286	－	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	14732	板目	(110.6)	14.9	1.9	土木材転用
287	－	1	SX01	－	建築材	壁材	スギ	14970	板目	(144.7)	18.4	4.6	土木材転用
288	－	1	SX01	－	建築材	壁材	イヌマキ属	15236	板目	(233.8)	24.0	6.0	土木材転用
289	－	1		－	建築材	垂木？	イヌマキ属	15179	板目	(246.7)	17.8	13.3	
290	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	14952	芯持材	(73.9)	9.4	10.2	土木材転用
291	B2	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	15240		(144.1)	8.9	9.7	土木材転用
292	－	1		－	建築材	垂木？	イヌマキ属	14737		(49.6)	8.6	8.8	
293	－	1		－	建築材	垂木？	カヤ	15178	芯持材	(177.0)	9.5	9.4	
294	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	垂木？	イヌマキ属	14739	芯持材	(85.7)	6.3	5.3	
295	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	14714	板目	(136.4)	7.2	7.0	
296	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	建築材	垂木？	イヌマキ属	14731	芯持材	108.9	3.6	3.9	
297	B3	1	SX01	－	建築材	垂木？	イヌマキ属	15239	芯持材	(129.7)	7.7	6.4	土木材転用
298	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	14975	板目	(195.0)	18.4	8.6	
299	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	15243	板目	(158.4)	17.6	12.6	
300	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	15242	芯持材	(88.4)	19.0	10.7	
301	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	14717		(140.0)	11.6	6.3	
302	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	14713		(134.8)	8.5	8.2	
303	－	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	15235	板目	(136.4)	12.5	7.1	
304	B3	1	SX01	－	土木材		イヌマキ属	14964	柾目	212.6	11.2	8.8	
305	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15241		(118.2)	15.3	8.4	
306	－	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	14971		125.3	11.8	8.7	
307	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15247		(133.8)	11.6	7.7	
308	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	14972		127.3	13.7	8.7	
309	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15245		(121.6)	10.9	7.1	
310	－	1		－	土木材	杭	イヌマキ属	15185		(126.0)	18.4	9.8	
311	－	1		－	土木材	杭	イヌマキ属	15190		(146.1)	17.7	12.9	
312	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	14973		(216.4)	16.2	5.8	
313	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15182		(144.2)	12.8	8.2	
314	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属	15183		(121.8)	10.6	7.6	
315	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ	15293		(89.1)	11.1	6.4	
316	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ	15294		(89.1)	11.1	6.4	
317	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ	15295		(79.7)	8.9	5.3	
318	C10	2	SX03	－	土木材	杭	スギ	15296		(110.2)	7.4	5.7	
319	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属	15189	芯持材	(101.9)	11.5	10.5	
320	B2	1		Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	イヌマキ属	15181	芯持材	(96.3)	9.7	10.0	
321	B2	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15246	芯持材	(140.0)	12.8	10.0	
322	B3	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	15191	芯持材	(155.3)	16.2	11.3	
323	－	1	SX01	－	土木材	杭	イヌマキ属	14959	芯持材	70.1	12.8	9.2	
324	B2	1	SX02	Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	タイミンタチバナ	14735	芯持材	60.1	8.2	7.6	
325	B2	1	SX02	Ⅳ～Ⅴ層	土木材	杭	ハイノキ属	14734	芯持材	57.4	7.9	7.6	

写真図版 I

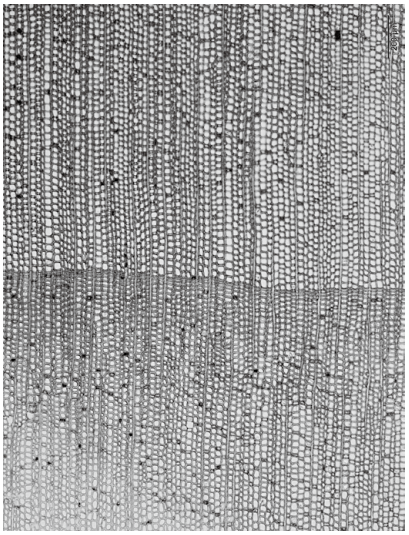


1a. スギ　14718　木口×30.

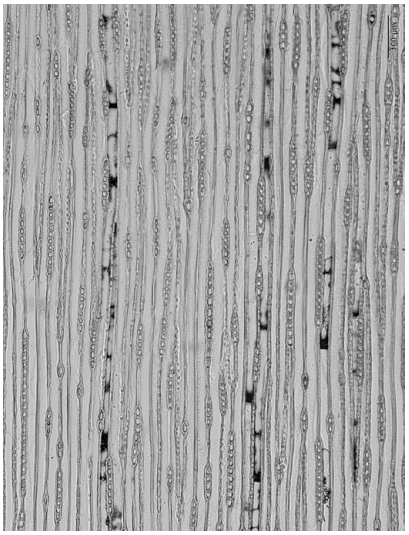
1b. 同　板目×60.



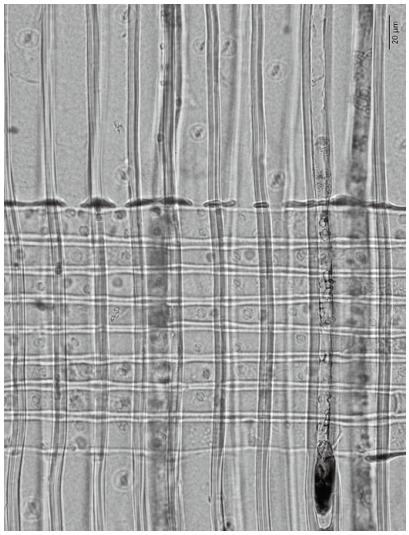
1c. 同　柾目×240.



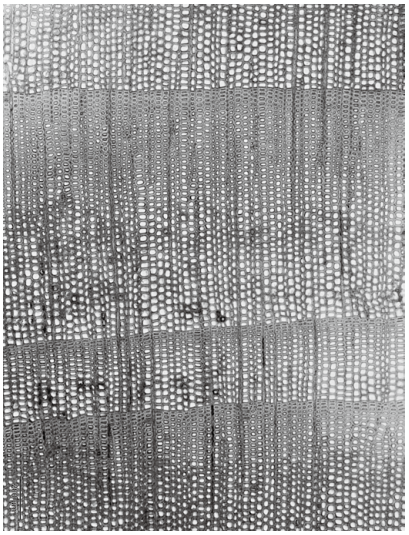
2a. イヌマキ属　14738　木口×30.



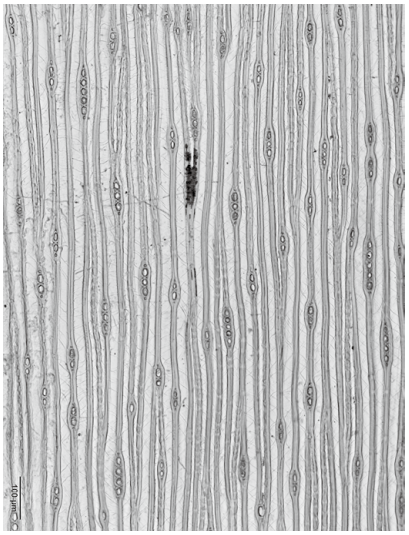
2b. 同　板目×60.



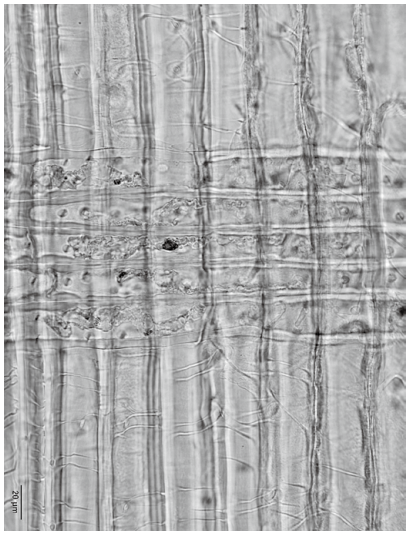
2c. 同　柾目×240.



3a. カヤ 15178　木口×30.

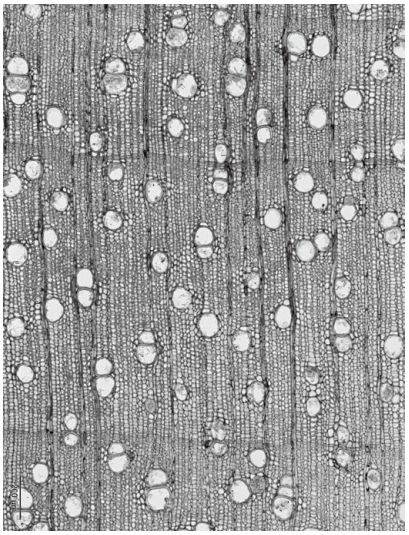


3b. 同　板目×60.



3c. 同　柾目×240.

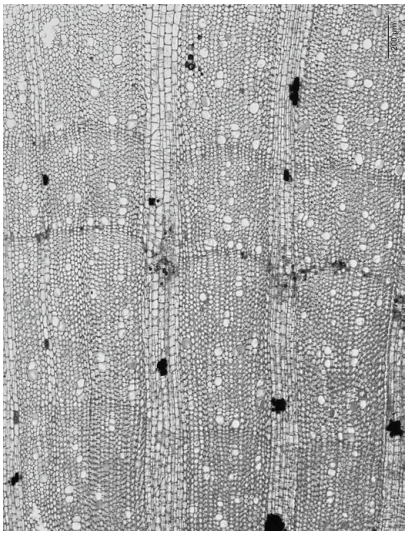
写真図版Ⅱ



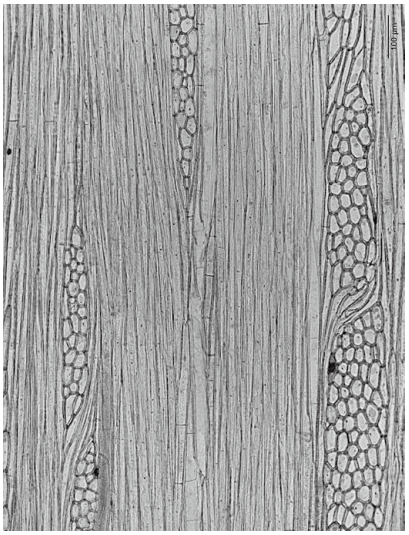
4a．クスノキ科　15231木口×30.

4b．同　板目×60.

4c．同　柾目×120.

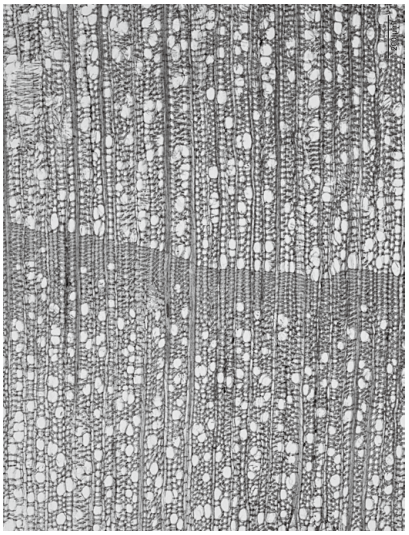


5a．タイミンタチバナ 15235 木口×30.



5b．同　板目×60.

5c．同　柾目×120.



6a．ハイノキ属　15234　木口×30.

6b．同　板目×60.

6c．同　柾目×120.

附編２　静岡県ミカノセ遺跡護岸木組み遺構の放射性炭素年代

小林和貴・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県賀茂郡南伊豆町のミカノセ遺跡で検出された護岸遺構SX01を構成する木組み木材群は遺構の状態から弥生～古墳時代の頃に構築されたものと推定されたがその詳細な年代は明らかではなかった。

この木組み遺構群は別項にあるように建築材の転用材と土木用材からなり、その樹種は「静岡県ミカノセ遺跡出土木材の樹種」にあるようにイヌマキ属材が大部分で僅かにスギを交えるものであった。

そこで、この遺構を特徴づける長大な横架材として挿図番号254の柱転用材と、挿図番号274の大型板材の２点（第１表）についてパレオ・ラボ（株）に委託して放射性炭素年代測定をおこなった。

試料の調整、測定方法、データの処理はパレオ・ラボ（株）によると以下の通りである。

測定試料の情報、調製データは第２表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。

その結果、第３表の年代値を得た。挿図番号274の板材（PLD-26520）の^{14}C値は2044±19yBPで２σの暦年代範囲は153BC～141BC（1.9%）、112BC～16AD（93.5%）であり、だいたい紀元前１世紀と言える。挿図番号254の柱転用材（PLD-26521）^{14}C値は1862±19yBPで２σの暦年代範囲は84AD～220AD（95.4%）であり、だいたい紀元１～２世紀と言える。いずれもほぼ弥生時代後期と言え、静岡県地方でイヌマキ材が多用される時期と符合する。

なお、2つの測定結果の間には^{14}C値で約200年の差がある。この差が転用材の元となった建築物の時期の違いに基づくのかは不明である。また、使用された年代値は弥生時代後期のものであるがそれはそれらの木の年輪が形成された年代を示すものであり、この遺構が構築されたのはそれらの年代値以降の出来事であることに留意する必要がある。

第１表　ミカノセ遺跡放射性炭素年代測定試料

サイズの単位はcm

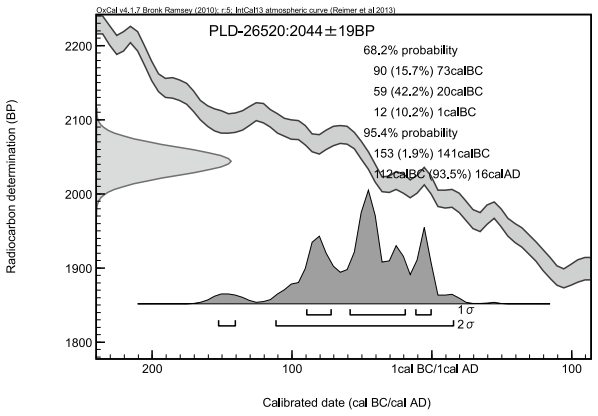
測定番号	挿図番号	出土遺構名	分類	器種	木取り	長さ	径・幅	厚さ	プレパラート番号	樹種	備考
PLD-26520	274	SX01	建築材	梁・桁	板目	219.2	26.4	6.8	14955	イヌマキ属	土木材転用
PLD-26521	254	SX01	建築材	柱	芯持材	378	17	18.5	14957	イヌマキ属	土木材転用

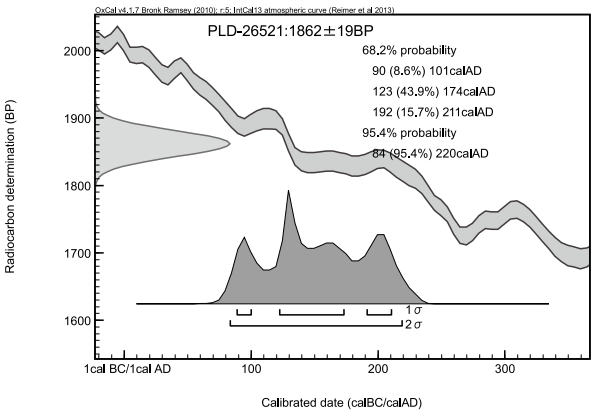
第２表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-26520	遺構：SX01 挿図No.274	種類：生試料・材（イヌマキ） 試料の性状：不明 器種：杭材 部位：12年輪中、外２年採取 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-26521	遺構：SX01 挿図No.254	種類：生試料・材（イヌマキ） 試料の性状：不明 器種：横架材 部位：２年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）

第３表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ13C（‰）	暦年較正用年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-26520 挿図No.274	−26.19±0.24	2044±19	2045±20	90BC（15.7%）73BC 59BC（42.2%）20BC 12BC（10.2%）１BC	153BC（１.9%）141BC 112BC（93.5%）16AD
PLD-26521 挿図No.W254	−27.31±0.27	1862±19	1860±20	90AD（８.6%）101AD 123AD（43.9%）174AD 192AD（15.7%）211AD	84AD（95.4%）220AD

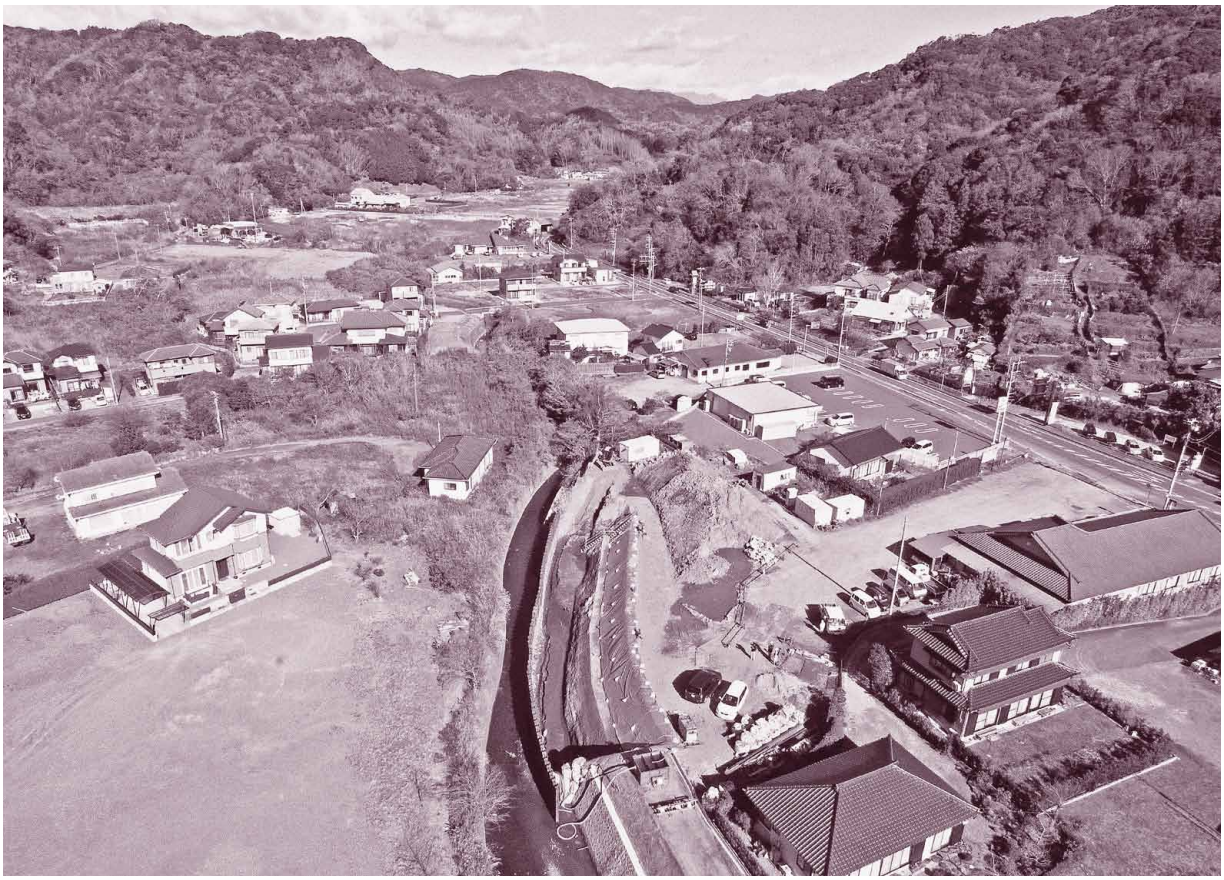




写 真 図 版

図版１

１区全景（南より）



２区全景（南より）

図版２

護岸遺構SX01全景（北東より）

護岸遺構SX01全景（南東より）

図版３

護岸遺構SX01全景（北西より）

杭列SX02検出状況（南東より）

図版４

杭列SX03杭検出状況（南より）

１区遺物出土状況（３）

１区遺物出土状況（25）

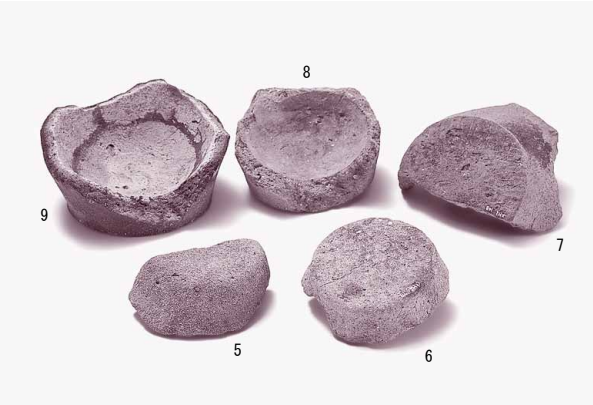
１区遺物出土状況（63・39）

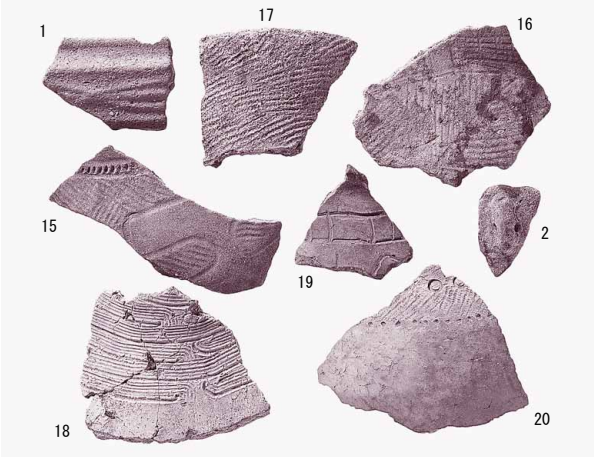
１区遺物出土状況（40）

１区遺物出土状況（41）

１区遺物出土状況（42）

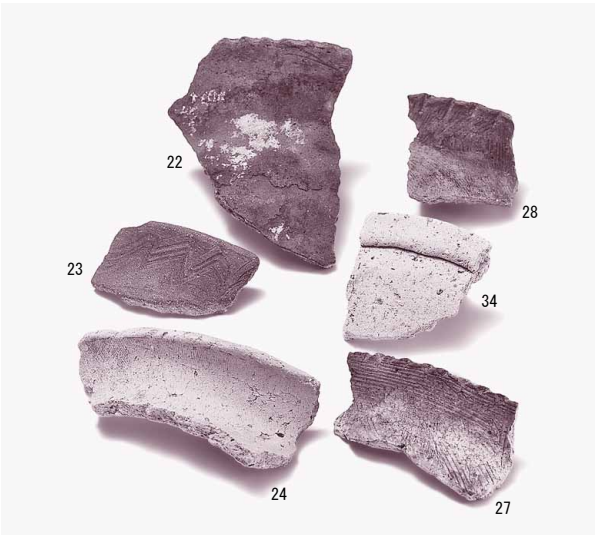
１区遺物出土状況（146）

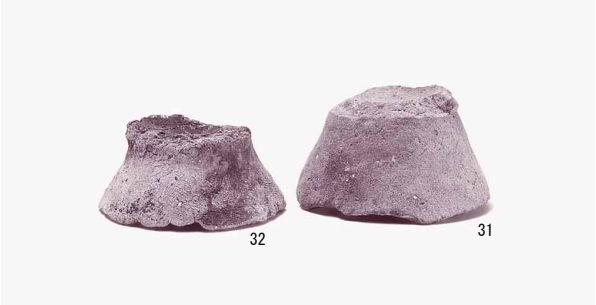




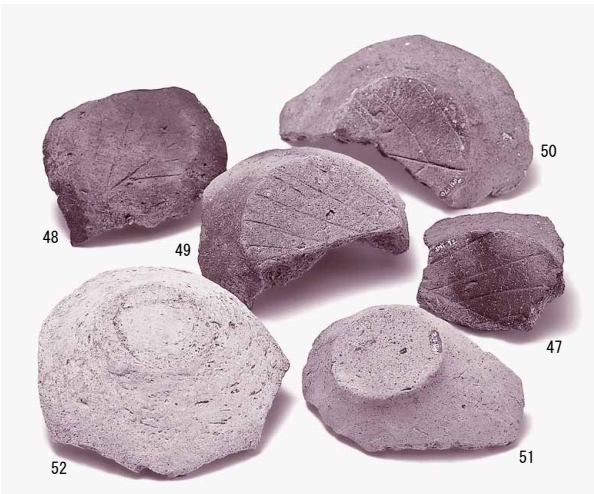
出土遺物１（土器１）

図版６



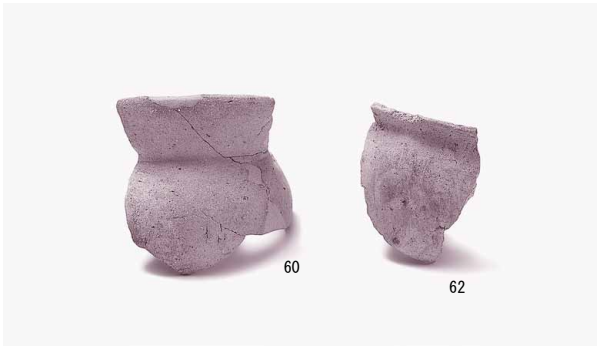


出土遺物２（土器２）

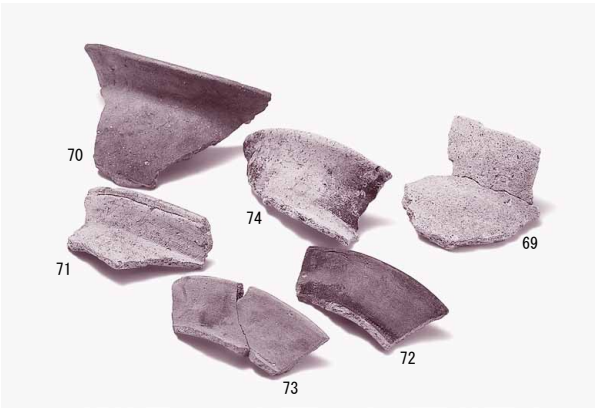


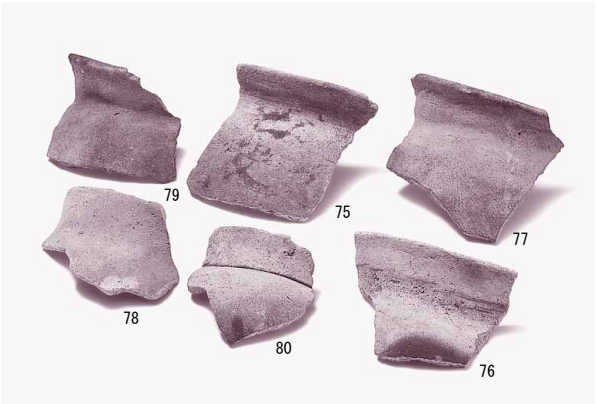
出土遺物３（土器３）

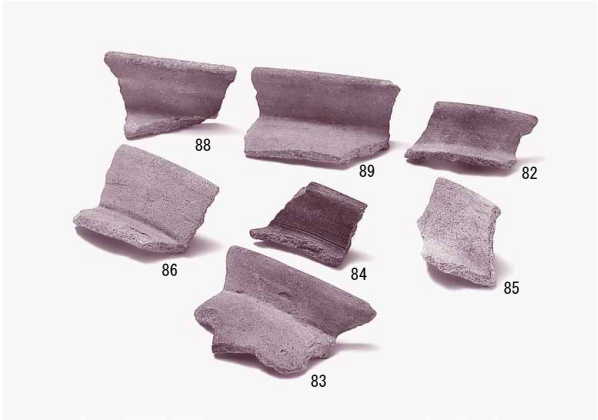
図版８



出土遺物４（土器４）

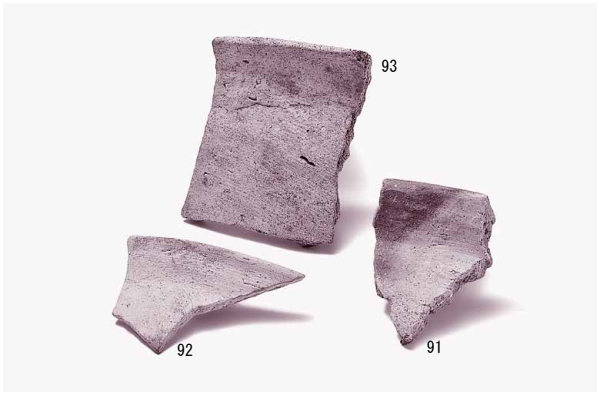


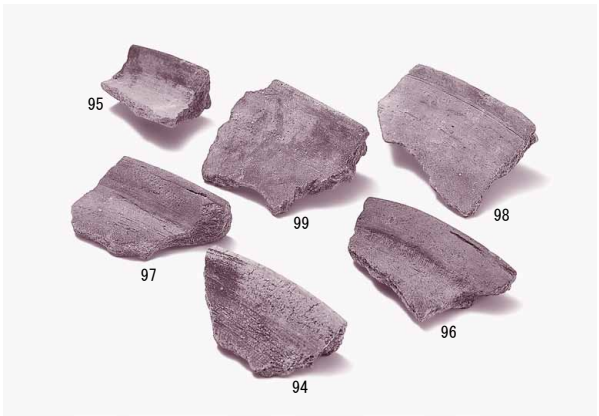


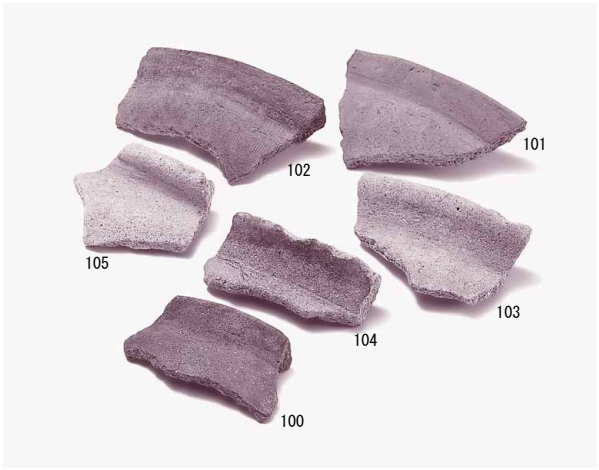


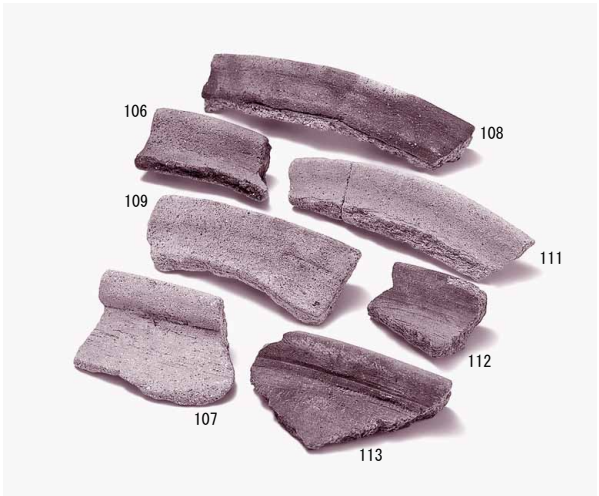
出土遺物５（土器５）

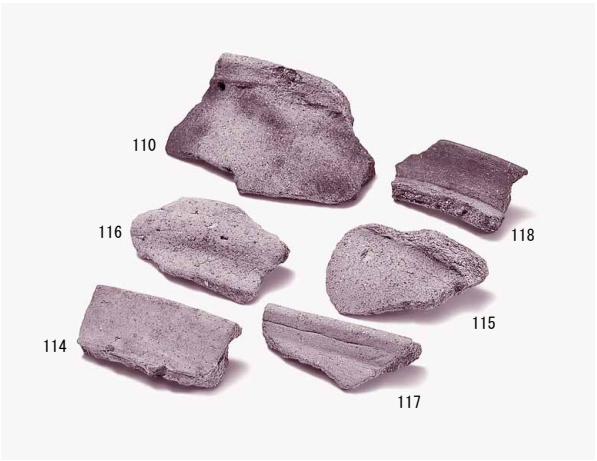
図版10

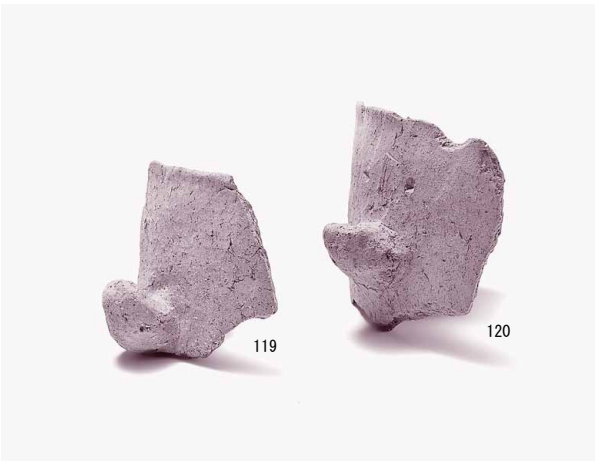


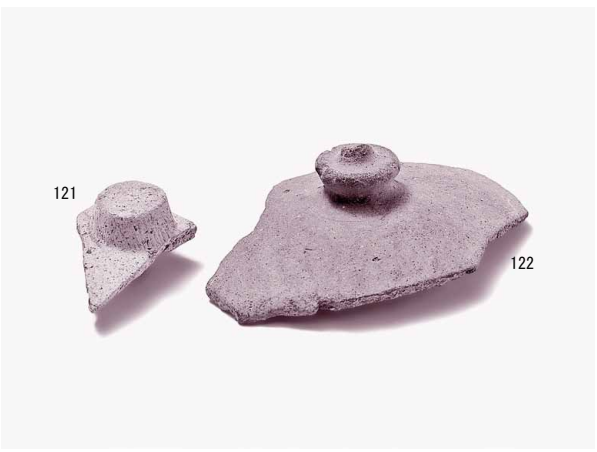












出土遺物６（土器６）

124

125

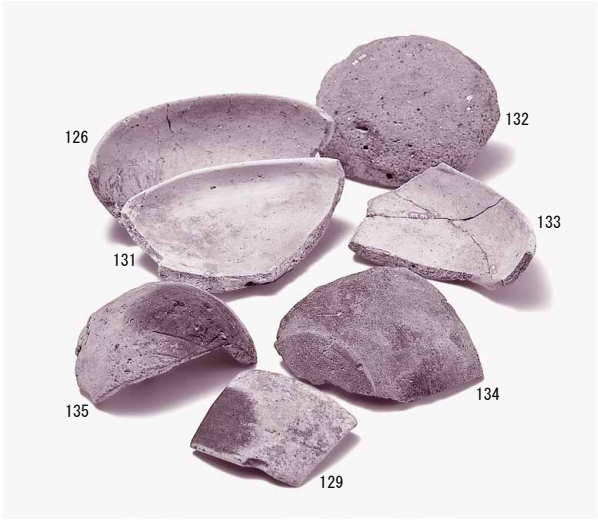
128

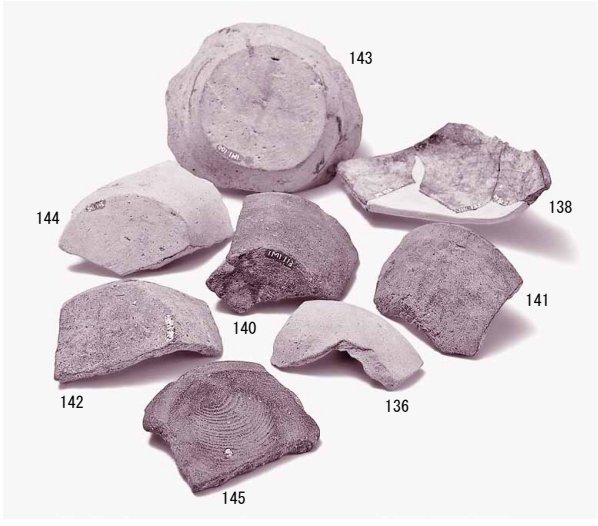
127

130

137

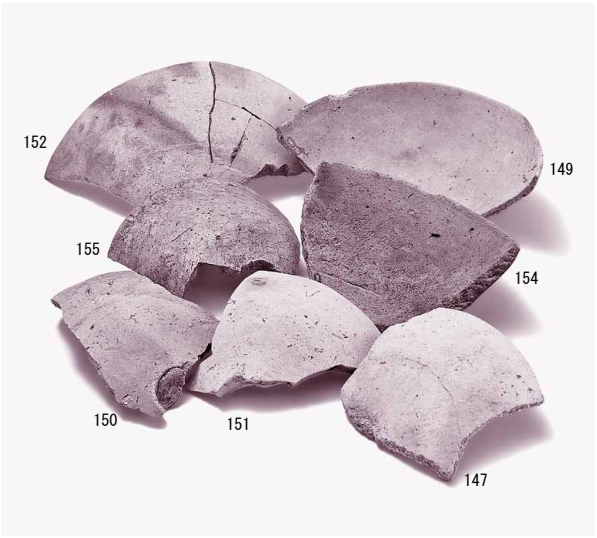
139

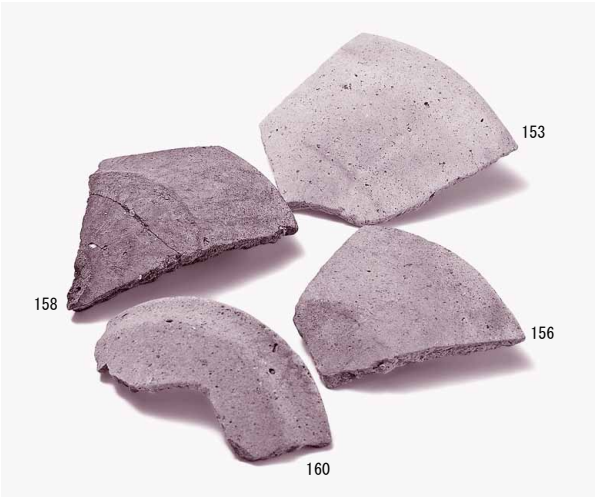

126
132
133
131
135
134
129


143
144
138
141
140
142
136
145

出土遺物７（土器７）

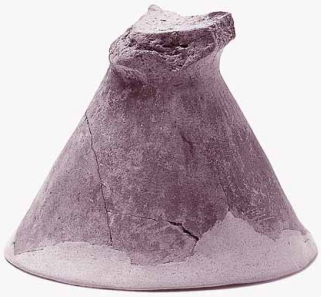
図版12





出土遺物８（土器８）

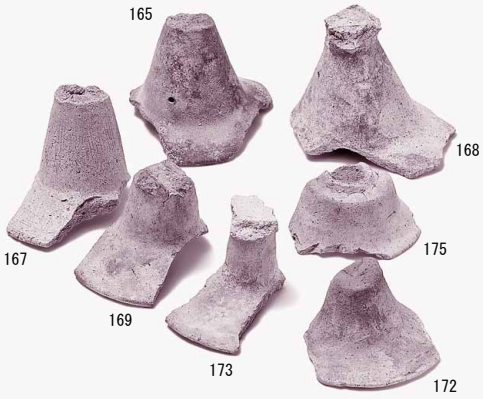
164


166

170

171

174



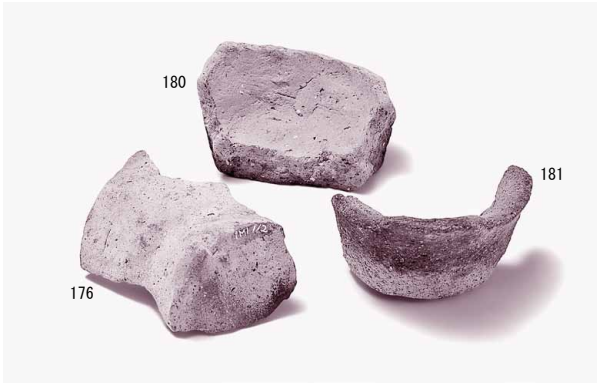
177

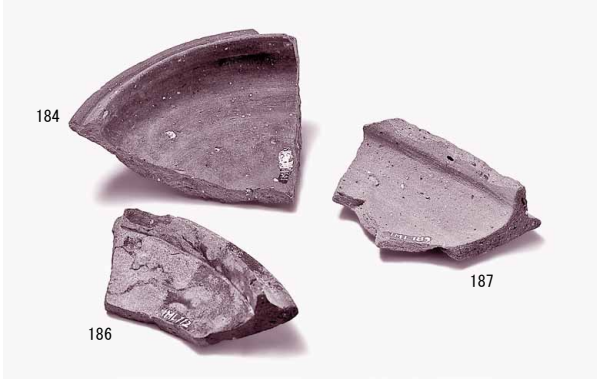
178

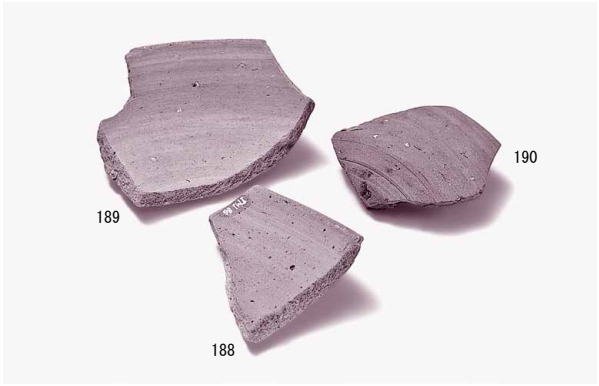
179

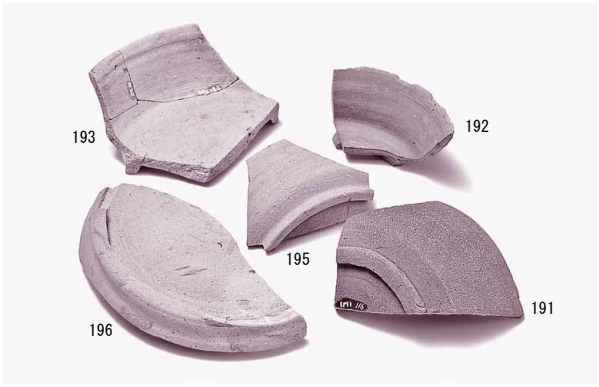
出土遺物９（土器９）

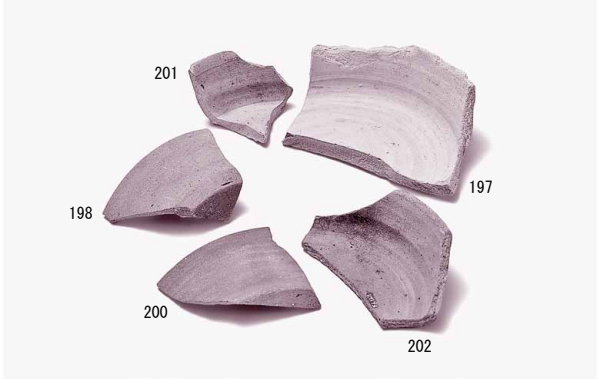
図版14







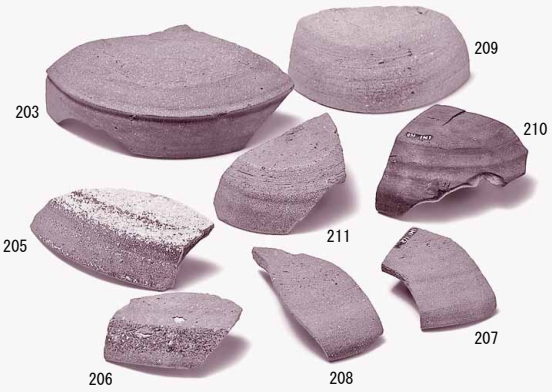




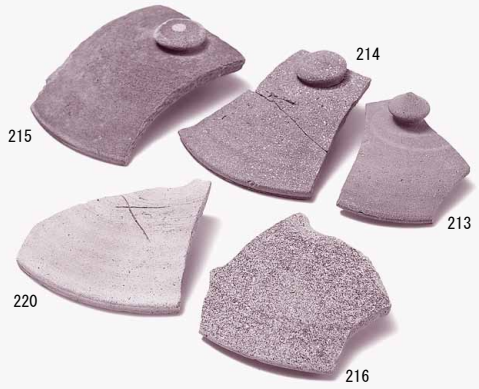
出土遺物10（土器10・土製品）

図版15

204



212



217

221

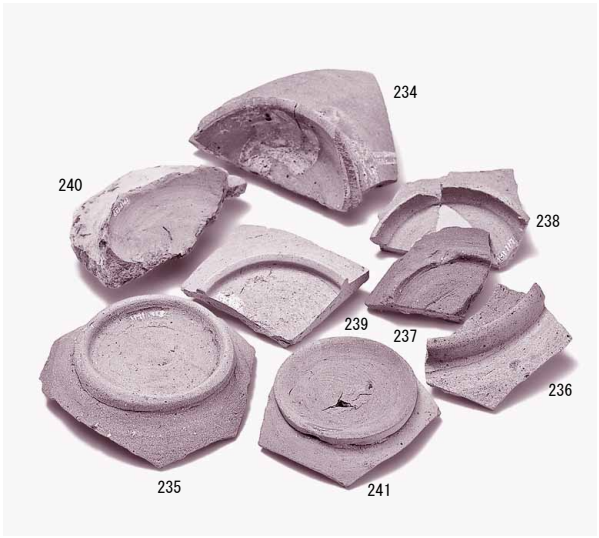
218

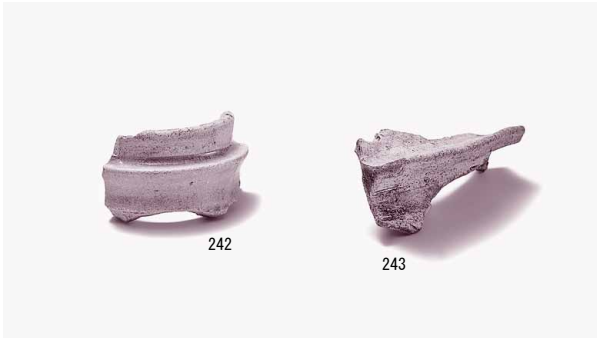
222

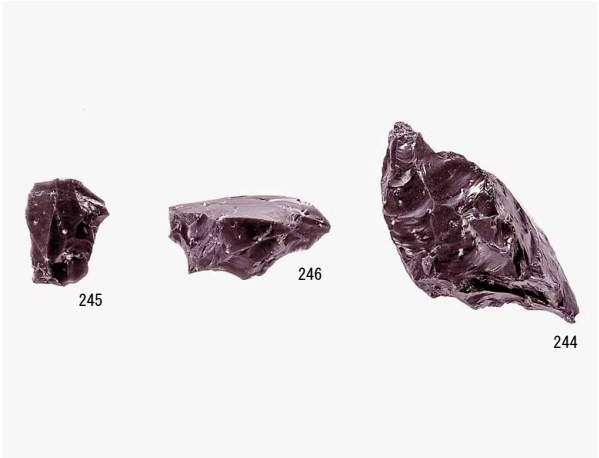
219

出土遺物11（土器11）

図版16



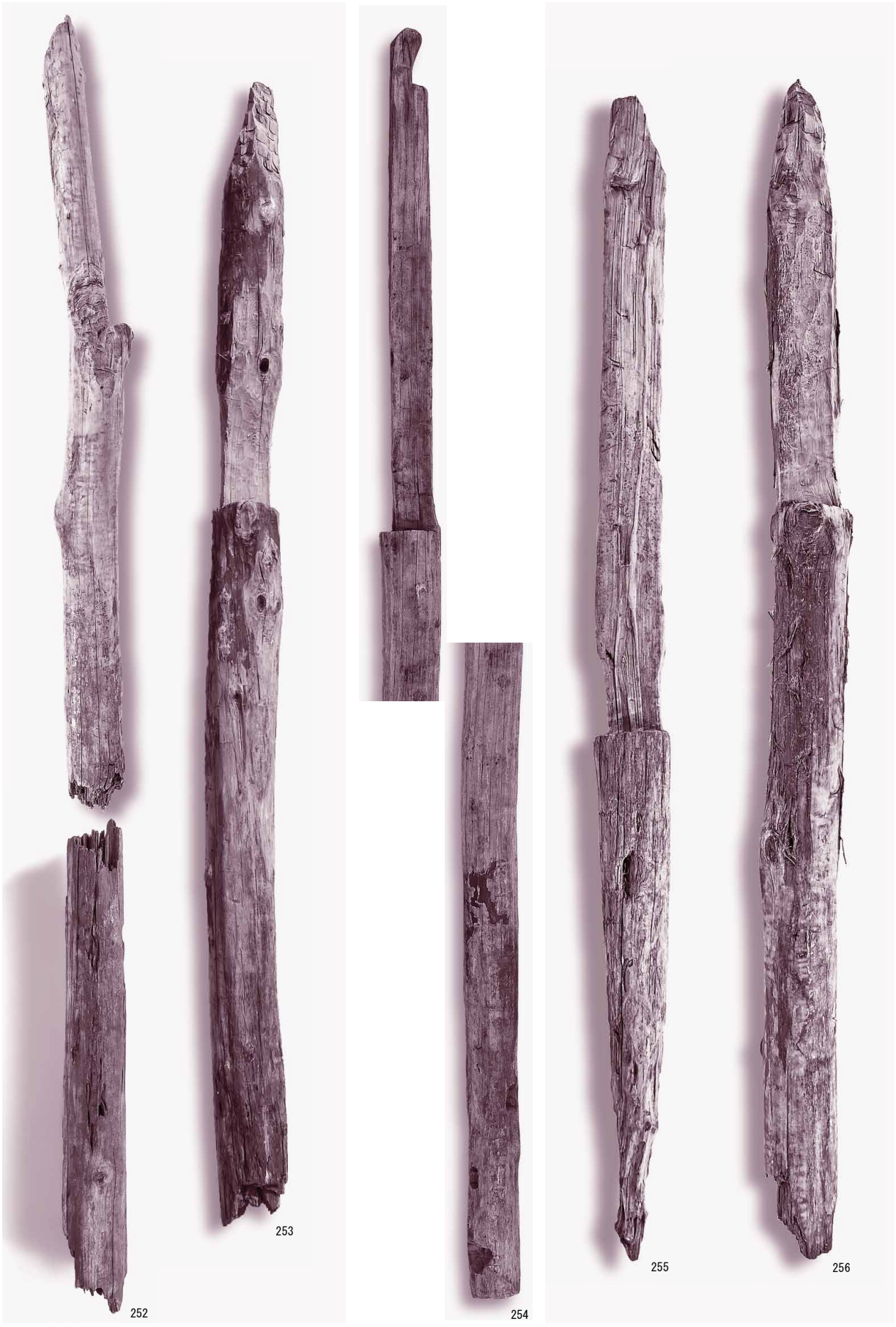




出土遺物12（土器12・陶磁器・石器）

出土遺物13（木製品１）

図版18



出土遺物14（木製品２）

出土遺物15（木製品３）

図版20

出土遺物16（木製品４）

出土遺物17（木製品５）

図版22

出土遺物18（木製品６）

出土遺物19（木製品７）

図版24

出土遺物20（木製品８）

出土遺物21（木製品９）

図版26

出土遺物22（木製品10）

出土遺物23（木製品11）

図版28

出土遺物24（木製品12）

報 告 書 抄 録

ふりがな	みかのせいせき
書名	ミカノセ遺跡
副書名	平成23～26年度山梨静岡交流圏域活性化事業（河川）に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第46集
編著者名	岩﨑しのぶ　溝口彰啓　鈴木三男　小林和貴
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　　TEL　054-262-4261（代）
発行年月日	2015年１月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町	遺跡番号					
みかのせいせき ミカノセ遺跡	しずおかけんかもぐん 静岡県賀茂郡 みなみいずちょうみなと 南伊豆町湊 あざうめだ 字埋田	223042		34°38′55″	138°52″60″	20111215 ～ 20120224 20121108 ～ 20121218	345	記録保存調査 （河川改修）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ミカノセ遺跡	その他（河川）	縄文時代 ～中世	流路・護岸遺構・杭列	・土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶磁器） ・土製品 ・石器（石核・剥片） ・木製品（刳物・調度・梯子・柱・梁または桁・壁材・垂木・板材・杭）	

要約

ミカノセ遺跡は二級河川青野川の支流である鯉名川左岸の泥質地盤上に立地する。調査区内からは鯉名川の旧河川が検出され、河川の左岸には護岸遺構が確認された。護岸遺構は河川の壁に沿って造られた木組みの遺構である。河川の壁に横木を置き、横木の前に杭を隙間なく並べて打つことを数回繰り返して構築している。この遺構を構築している木材は、自然木の他に柱、梁または桁、壁材、垂木などの建築材を転用したものも含まれている。これらの建築材は加工方法と、自然科学的年代測定の結果などから、弥生時代後期以降のものであることが推定され、遺構が構築された時期はそれ以降であると言える。

河川及び包含層中から出土した土器は、縄文時代晩期後半、弥生時代中期中葉～８世紀中葉、９世紀～10世紀と中世のものが見られる。近接する日詰遺跡、日野遺跡の５世紀中葉～７世紀前半の祭祀遺構で出土している手づくね土器、平安時代の製鉄遺構で出土している灰釉陶器が本遺跡でも出土しており、両遺跡との関連性の高さが窺える。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第46集

ミ カ ノ セ 遺 跡

平成23～26年度山梨静岡交流圏域活性化事業（河川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年１月30日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054－262－4261（代）
FAX　054－262－4266
印　刷　所　文光堂印刷株式会社
〒410-0871　静岡県沼津市西間門68-1
TEL　055－926－2800